



TITLE:

施存統と中國共產黨

AUTHOR(S):

石川, 禎浩

CITATION:

石川, 禎浩. 施存統と中國共產黨. 東方學報 1996, 68: 245-358

ISSUE DATE:

1996-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/66772>

RIGHT:

施存統と中國共產黨

石 川 禎 浩

はじめに	二四六	2 革命と戀愛	二八二
一 「非孝」の青年	二四七	3 「國共合作」下の上海で	二八八
1 杭州・北京・上海	二四八	四 「赤都」武漢	二九三
2 日本留學	二五二	1 武漢軍校	二九三
二 社會主義青年團の驍將	二五九	2 出陣	二九六
1 若き指導者	二五九	3 離黨——「悲痛の中の自白」	三〇三
2 團指導者の苦惱	二六三	五 離黨その後	三一四
3 團二大	二七六	附録	三三九
三 上海での黨員生活と私生活	二七九	施存統著作繫年目録初稿（一九一九—一九三三年）	三五一
1 上海大學	二七九		

はじめに

作家丁玲は、かつて親交のあったコミュニスト施存統のことを、「好人」「好人」あるいは「眞面目な人」「老實人」と評したことがあった。^①一九八〇年、すなわち施存統が北京で世を去ってから十年の後のことである。丁玲と施存統の交友は一九二二年の上海にまでさかのぼるものだが、みずからの意思で中國共產黨（以下、中共と略稱）を去ったという經歷、すなわち「歴史問題」を持つ施存統にたいし、黨員丁玲の注ぐ眼差しは温かかった。むろん、それら「好人」「眞面目な人」なる表現も愛すべき人物としてのそれである。丁玲にかかる心情を抱かせる施存統とは如何なる人物であったのだろうか。その中共との関わりとは、その一九二七年の離黨とは、如何なるものであったのだろうか。本稿は、これまでその見るべき事跡にふさわしい評價、検討のなされてこなかった一人の「眞面目」な五四青年、あるいは幹部黨員の共產黨時代の評傳である。^②

施存統（一八九九—一九七〇、のちに施復亮と改名、號は子由、化名は方國昌、玉英、子充、筆名は光亮、亮、文亮、伏量、半解、CT等。浙江省金華縣〔現金華市〕の人）は中華人民共和國建國期の民主諸黨派人士にして、勞働部副部長もつとめた人物として知られる。ただし、中國共產黨史の上では、むしろ黨創立時期の有力メンバー、とりわけ周佛海とともに建黨期「日本小組」の成員として、または中國社會主義青年團の初期の指導者、理論家として史乘にその名をとどめている。

だが、まさに中共をつくりだした主要メンバーの一人でありながら、かれの中共黨史上の位置はあくまで二流のものにとどまっている。それは、かれ自身も後年悔悟した先の離黨の經歷、すなわち一九二七年にみずから新聞紙上に聲明を發表して黨を捨てたことに因る。中華人民共和國に残ったのちの晩年の不遇、とりわけ失意の病逝の間接的原因となった文

化大革命時期の受難もまた、もとをたどれば、その離黨問題に起因するものであった。一九八二年六月一七日、『人民日報』にかれの實質上の名譽回復告示となる「民主革命時期の英勇戰士施復亮同志」が掲載され、かれは再び「同志」の列に置かれたが、その後に書かれたいくつかの略傳において、やはりその離黨は一樣に「大きな過ち」と評價されて今日に至っている。

しかし、筆者が、大陸での黨史研究上の公式評價とは別に、この施存統に着目する所以は、かれの残した貴重な資料にこそある。すなわち、五四時期の青年の思想的軌跡、中共・社會主義青年團の初期の活動と黨内事情、そして國民革命時期の中共系知識人の思想的苦悶と一部に見られた離黨等々、なお検討を要する多くの問題に對して、施存統はその「眞面目」さゆえに、その時々にくぐれて率直な文章を發表したのであった。さらに、信頼できる原資料が極めて少ない中共創立の過程に關しては、當時日本留學中だったかれに關する日本の警察側の資料、およびかれの東京地方裁判所での證言記録が残されており、史實の考證においても、かれの存在はいやがうえにも重要なものといわざるを得ないのである。

筆者はさきに「若き日の施存統——中國共產黨創立期の「日本小組」を論じてその建黨問題におよぶ」^①を草し、主にかれの日本留學時期（一九二〇年六月—一九二一年十二月）までの事跡と、中共結黨にかんするいくつかの問題について、すでに検討を加えた。したがって、本稿においては、前稿において紙幅の關係から抜粋紹介に壓縮せざるを得なかった日本官憲側の未公表文書を注末に全録する一方、該時期までの事象については必要最小限の記述にとどめることで縷述の煩を避け、主要には一九二二年の歸國から一九二七年の中共離黨にかけての施存統の軌跡を検討することにする。

一 「非孝」の青年

1 杭州・上海・北京

施存統は一八九九年、浙江省金華縣葉村に、父施長春、母徐氏の長子として生まれた⁽¹⁾。施家の大家族から分家した父施長春は、五畝の田畑を分與されたのち、その自作と他家の小作、および農閑期の米の運送で生計をたてる自小作農民であった。母徐氏は書香の家の出で、字の読み書きができたという。

私塾と初等小學堂に學んだかれは、若干の紆餘曲折を経たのち、一九一七年に杭州の浙江省立第一師範學校（以下、浙江一師と略す）に進んだ。儒教の徒たらんと志して特に子路（仲由）を思慕し——施存統、子由と號するの所以——、一面において「昇官發財」を夢みる學業優等生にして、他面、芝居、賭博にいれ込む遊蕩生でもあったかれの人生觀を大きく變えたのは、その浙江一師だった。當時の浙江一師の狀況や杭州での五四運動については、すでに前稿で觸れてあるの⁽²⁾で、ここではくりかえさない。ここでは、杭州時代のかれの最大の出來事にして、「施存統」の名を中國現代史に刻することになった一九一九年秋の「非孝」事件⁽³⁾をふりかえるにとどめよう。

五四時期の反儒教精神高揚の最大の事件のひとつに數えられる「非孝」事件とは、簡単にいえば、杭州の進歩派學生の雜誌である『浙江新潮』第二號（一九一九年十一月）に、孝道の非を痛罵するかれの一文「非孝」が發表されたことによる筆禍事件である。残念ながら『浙江新潮』該號は、中國においても傳存しておらず、原文を參照することはできないが、かれ自身がその翌年に綴った半生の自傳「二十二年來のわたしを振り返る」がその執筆經緯を告白しており、その大意を知ることができる。それによれば、「非孝」執筆にあたつての「事實の刺激」となったのは、病身の母親の痛ましい境遇をまねいた家、とりわけ父親の仕打ちであった。以下に、その一節を引用して、アナキズムの立場から「非孝」を發表したかれの置かれていた狀況とその心情をうかがうことにする。

このような環境においては、絶対に孝子になる術はない。……わたしは社會を救い、社會において母と同じ目にあっている人を救わなければならない。母が助かることはもうあるまいが、わたしは母のようになろうとしている人を救わないわけにはいかない。……人類は自由、平等、博愛、互助であるべきだ。「孝」の道德はこれに背いている。ゆえに我々は「孝」に反対せねばならないのだ。

「助かることはもうあるまい」とされている「母」とは、すなわち、當時神經性の病におかされ人事不省におちいついた郷里の實母であり、「このような環境」とは、それを不治の病と決めつけ、治療のための金を葬儀の費用に充當しようとした父の仕打ちのことである。そして、その父への屈從を「孝」として強制されたかれが、『進化』『民聲』『實社自由録』『近世科學與無政府主義』といった當時流行の書物を通じて得られたアナキズムの「思想の啓發」をえて、萬感の思いをこめて執筆したものがその「非孝」なのであった。

こうした内容の「非孝」を發表した一九一九年後半のかれは、反禮教の徒であると同時に、精神的には紛れもなくアナキストであったといつてよい。その理論的成熟の程度を喋々する必要は今はあるまい。事實、かれ自身も、「非孝」の文章を「惜しむらくは洗練、成熟されていない」とする好意的批評に對し、「非孝」の價值は「反抗精神」の四字にこそあるのであつて、そうした批評は自分の目的と動機を理解していない二義的なものであると訴えている。我々は「非孝」のなかに、卑近な舊道德事例の徹底否認とトータルな社會改造とを直ちに結びつける激烈な心象を見れば、それで足りるのである。

さらにかれは「二十二年來のわたしを振り返る」において、青年の「自殺的行爲」である手淫を斷然やめるに至った自己の祕部を赤裸々に告白し、浙江一師在學の二年半の間に、當時の學生一般の常習であつた賭博やカンニングを斷乎拒否し、一度も人力車に乗らず、また酒も煙草もたしなまなかつたことを心底誇りに感じる。今やかれは、品性の向上、道德

的革新、肉體的禁欲と社會改造を一體不可分のものとしておのれに課した急進的「五四青年」に伍したのであり、信條の面でも生活規律の面でも、まぎれもない中國アナキストであった。そして、時あたかも、施存統ほど天真にアナキズムの理想に「社會改造」の夢を託していたかどうかは別として、武漢には惲代英が、長沙には毛澤東が、いずれも同じような思考回路のもとに社會改造への第一歩を踏みだそうとしていたのである。⁽⁶⁾

「非孝」は、はたして大きな反響（その大部分はかれにたいする誹謗）を呼んだ。かれの言によれば、自身が「妖怪」よばわりされるのみならず、同じく杭州に學んでいたかれの従妹さえもが、「禽獸の従妹」として「冷嘲熱罵」されたという。かくて、この「非孝」事件は、その後、その「煽惑」をゆるした校長經亨頤の去就をめぐる新舊兩派の對立、流血事件、さらには警察による學校封鎖（いわゆる浙江一師風潮⁽⁷⁾）にまで發展する一方、その當事者である施存統も四面楚歌の苦境におかれ、一九二〇年の初めに杭州を離れて一部の同志たちと北京に向かうという顛末となった⁽⁸⁾。ただ、施存統らの上京は、事件のほとぼりが冷めるのを待つ逃避行ではなく、かれらが掲げる「自由、平等、博愛、互助」の理念を實行に移すための積極的行動だった。すなわち、北京には、施存統が尊敬してやまなかった陳獨秀（陳は「非孝」に關して一文を草し、『浙江新潮』の議論はさらに徹底しており、「非孝」……の文章は天真爛漫、きわめて愛すべきである」と賞賛していた⁽⁹⁾）がおり、時にかれらの發起にかかる北京工讀互助團が呱呱の聲をあげていたのである。

『新青年』『星期評論』といった當時の進歩的青年の愛讀誌によって、浙江「非孝」事件の勇將として紹介されたかれらの互助團への参加は、大きな社會的關心をあつめたという。施存統らは一九二〇年一月一〇日に勇躍して北京工讀互助團第一組に合流し⁽¹⁰⁾、念願であつた陳獨秀、李大釗、胡適ら新文化運動の將星との面會を果たした。だが、新社會のモデルたるべく出發した北京工讀互助團第一組のほうは、かれらの志とは裏腹に、開始早々に團員相互の戀愛問題のトラブル⁽¹¹⁾から活動の停滯をきたし、經濟的破綻もあつてその後二カ月ほどで解體してしまうことになる。多大な期待をうけて出發し

た北京工讀互助團第一組は、三月二三日に事實上の解散を決定したのであった。⁽¹²⁾ 施存統とそのアナキスト同志にして刎頸の友でもあった俞秀松は、互助團の發起人でもあった李大釗や胡適らの慰留を振り切り、ほどなく陳獨秀のあとを追うかのように北京を後にして上海に向かった。⁽¹³⁾

上海行にあたり、當初、かれらは福建省漳州に行き、「社會主義將軍」の呼び聲高かった陳炯明の幕下（當時、陳炯明のもとには劉師復の流れを汲む梁冰弦らアナキストがたむろしていた）⁽¹⁴⁾ に参じる心づもりであったという。だが、上海到着のその日に身を寄せた星期評論社での出会いがかれらの人生を大きく變えることになるうとは、恐らくかれら二人は豫想していなかっただろう。

施存統らは上海に到着すると、眞つ先に星期評論社をたずねたが、それは自然な成りゆきだった。そこには「浙江の二沈」、すなわち浙江一師の革新的教育方針に共鳴し、『星期評論』誌上で「非孝」への支持を表明した沈玄廬と、杭州において四面楚歌の境遇にあつた施存統の數少ない理解者であつた沈仲九（「非孝」事件當時、浙江省教育廳の雜誌『教育潮』の主編⁽¹⁵⁾）がいたからである。當時の星期評論社にはかれらのほか、孫文の側近にして該博な社會主義研究をもつて知られた戴季陶（『星期評論』主筆）や李漢俊、邵力子をはじめ、沈玄廬の四夫人からその子沈劍龍とその妻楊之華らが出入りし、さらには『星期評論』の聲望を慕つて家を飛び出してきた青年男女がひきもきらぬ一種の解放の場であつた。⁽¹⁶⁾ 上海に着いたばかりの俞秀松は、知人への手紙のなかで、そうした星期評論社の雰圍氣を、「この同志は老若男女あわせて十人、その主張はみなぎわめて徹底しており、わたしなど實にももの數にもはいりません。しかし、友愛、歡喜、天眞の空氣はわたしの周りに満ちあふれており、人間たることの樂しさを眞に感じます⁽¹⁷⁾」と傳えているが、それは施存統の氣持ちでもあつただろう。

さて、この星期評論社で、陳炯明の下に投じたいという意向をうちあけた施存統らに對して、相談をうけた沈玄廬と戴

季陶の答えは、「軍隊に身を投ずるは、工場に身を投ずるに如かず」というものだった。その説得を受け入れた二人は漳州行きをやめ、施存統は星期評論社の「事務補助員」⁽¹⁹⁾として、同誌に戴季陶の「資本家生産制下の工場に投じよ!」⁽²⁰⁾という言葉に全面的に賛意を表する『工讀互助團』の實驗と教訓⁽²¹⁾等を執筆するかたわら、陳獨秀、李漢俊を中心にして進められていた共產黨結成の活動に加わっていくことになる。そして、共產黨の母體となつたいわゆる「上海共產主義小組」(當時の名稱は「社會共產黨」)の成立に立ち合った後、戴季陶と宮崎滔天、龍介親子の援助をうけ、一九二〇年六月に日本へ留學したのだった。

2 日本留學

上海において、施存統にもっと大きな影響を与えたのは、當時の中國において、李漢俊とならぶマルクス主義研究を誇っていた戴季陶であり、施存統に留學を勧め、その資助を与えたのもかれであった。六月末に東京に着いてより、施存統はしばらくの間、宮崎滔天方に寄留し、七月より宮崎邸にほど近い三崎館という中國人學生向けの下宿で、一年半におよぶ留學生活(目白の東京同文書院に在籍、一九二一年のはじめに退學)を始めることになる。

日本において、經濟學を學ぶ決意をしていたかれではあったが、當然のようにまず習得せねばならなかったのは、まったく不自由な日本語であった。留學に先だって、日本語の達人である戴季陶に、日本語は「二年勉強すればまあまあ自由に操れるようになるが、本當に自由に使いこなすためには三、四年やらなければならない」⁽²²⁾と諭されていたかれは、最初の三、四カ月をもっぱら日本語の専修にあてたらしい。奮闘の甲斐あって、その年の暮れには何とか長編の翻譯を『民國日報』に寄稿できるようになったかれは、その後、山川均、河上肇、堺利彦らのマルクス主義研究をむさぼり讀むよう

になった。

當時の施存統は、「近來の思想はほぼ何もかもかれ〔戴季陶〕引用者注 以下、引用者注は「」で示し、いちいち注記しない」の影響をうけた⁽²⁶⁾と述べるように、すでに上海において、かれの影響のもとにマルクス主義への確信を次第に深めつつあったと考えられる。だが、日本留學當初のかれの思想的立場は、「とはいえ、かれの抱く主義にたいして、なお絶對的に信じているわけではない。すなわち、わたしがこれまで信じてきた「安那其」主義も、それが一個の合理的な理想であるということは認めている」⁽²⁷⁾と自ら語るように、アナキズムとマルクス主義とが（かれにとってはほぼ矛盾なく）混在したものであった。かれが留學當初、中國のアナキストと連絡を保っていたことは、まさにそれを證明しているよう。そしてはからずも、その中國アナキズム運動との接觸によって、かれの存在と舉動は、日本警察の監視網の探知するところとなってしまう。

警視廳がかれを警戒するに至った發端は、當時上海で梅景九らが出していたアナキズム雑誌『自由』第一號（一九二〇年一二月）に、日本通信所として「東京府高田村一五五六、三崎館存統」の名が掲載されたことによるものだった。日中間の「無政府共產主義者」の暗躍を警戒していた警視廳外事課が「宮崎滔天方ニ出入シ猶支那新聞雜誌ヲ講讀シ居ルモノ」として、施存統を突き止めたのは翌年一月、この時、警視廳側はすでにかれが「極端ナル儒教排斥忠孝否認論」である「非孝」の作者たることを探知していた⁽²⁸⁾。以後、その強制歸國に至るまで、かれの行動は日本警察の厳しい監視下に置かれることになる。

アナキズムの立場から「非孝」を發表したかれの名は、中國において相當に鳴り響いていたらしく、施存統は上記『自由』以外に、一月一四日にも安徽省の蕪湖第五中學の學生たちが組織したアナキズム結社「安社」の趣意書を受け取り、アナキズム關係の書籍を紹介するよう求められている⁽²⁹⁾。こうしたアナキズム運動にたいして、かれが具體的にいかなる對

應をしたかはよくわからない。だが、その一月に「自由組織、自由聯絡」や「能力に應じて働き、必要に應じて取る」といったことは、もちろん我々が到達せねばならぬ理想ではあろう。だが、……現社會から一足跳びにその理想へ到達するという理由を、我々はやはり見いだすことができない。その間には當然に一種の過渡的機關⁽³⁰⁾がなければならない」として、マルクス主義の不徹底やボルシェヴィキの專制をなじるアナキスト連をたしなめていたこの時期のかれは、「安社」の掲げる「アナキズムの眞理」なるものに、諸手をあげて賛意を表することはできなかったであろう。かれが山川、河上らのマルクス主義研究を翻譯しだすのはちょうどこのころである。そして、四月以降の警察側報告にあらわれる施存統は、すでにアナキストとしてのかれではなく、一方において陳獨秀、李達ら「上海共產黨」と連絡をとりあい、他方「日本共產黨」結成へむけて活動しつつあった堺利彦、高津正道ら日本人社會主義者と接觸する「要注意支那人」としてのかれであった。

かれと接觸のあった高津正道は當時（一九二二年六月）、中國のボルシェヴィズム紹介の文章を執筆しているが、それによれば、「陳獨秀、李大釗〔李大釗〕、戴季陶、李人傑〔李漢俊〕、沈玄釗〔沈玄廬〕」を中心とする中國の「ボルセキズムの信奉者」の働きかけにより、「上海、北京、南京、廣東、天津、哈爾賓⁽³¹⁾、奉天、武昌、漢口、杭州〔杭州〕」の各地に、小團體の發生を見るに至⁽³²⁾っており、この派の機關誌の最有力のものは「月刊『共產黨』」であった。また、高津論文は、中國の共產主義團體において、「極めて堅實な發展を遂げつゝあるは、上海の社會主義青年團（一名青年社會黨）で、目下團員が百餘名ある。この團員が中心となつて、二個の勞働組合が出来て居る……青年社會黨は、別に二三の夜學の勞工學校を造つて居る」とも傳えている。こうした情報が施存統の提供によるものであることは間違いない。⁽³²⁾現に、施存統自身もその『共產黨』に文章を寄せる一方、陳獨秀からの指令を受けて、四月末には鹿兒島にあった周佛海とともに「上海共產黨」の「駐日代表⁽³³⁾」となり、七月末の中共第一回全國代表大會（以下、中共一大と略稱する）には周を「日本小組」

の代表として派遣したのだった。

中國の共產主義組織と連携するのみならず、日本の社會主義者にも働きかけをせんとしていた施存統らの動向をつかんだ日本の警察側が、かれに一層の警戒を拂ったことはいうまでもない。五月八日にかれが上海の邵力子にあてた書簡（警察側によって開封されている）には、「僕ハ近來毎日日本警察ニ騷擾セラル眞ニ惡ムベシ⁽³⁴⁾」という言葉がみえ、六月一七日には、かれを厳しく監視していた警視廳外事課の刑事が尋問のために下宿にかれを訪問している。かれはその尋問にたいして、「當地日本人中ニテハ宮崎龍介以外一人ノ交友ナシ……日本社會主義者トハ交通セシコト一回モナシ⁽³⁵⁾」、あるいは「社會主義ヲ研究スト雖モ余ハ社會主義者ニアラス從テ主義ノ宣傳等モ亦爲シタル事ナシ⁽³⁶⁾」というように、社會主義人士との交友をつとめて否定していたが、すでに施存統と堺ら日本社會主義者、および陳獨秀らの中國共產主義組織との接觸の事實をつかんでいた警察側が、この言葉を額面通りに受けとるはずはなかった。かくて、施存統の「最近警察ハ余ニ追尾シ余ノ一舉一動ヲ束縛スルコト甚タシ奇怪ニ堪ヘス⁽³⁷⁾」という抗議にもかかわらず、かれに對する監視の目はそれ以後も緩むことはなく、逆に「宿主ヨリハ轉宿方ヲ要請サル等甚タ困窮シ居レリ⁽³⁸⁾」という狀況に置かれることになったのだった。

七月末に開かれた中共一大に周佛海を派遣したことによって、「日本小組」の實質上の責任者だった施存統は、名實ともに「中國共產黨」の黨員となったが、この時期、あたかも中共一大の開催とあい符合するかのようになり、かれはアナキズムと訣別する。その七月、かれはなお「わたしは決して根本から無政府共產主義に反對するものではない⁽³⁹⁾」としながらも、それがただちには實現できない現状では、「純粹のマルクス主義」にのっとった「過渡時代の辦法」が不可欠であるとして、理念だけが先行する「中國式のアナキズム」を批判し、さらには、「わたしは近世の無政府主義原理が現在の中國には適しないと信じる。ゆえに無政府主義には敢えて追隨しない。……わたしの信じるマルクス主義とはすなわちボルシェヴィズムである⁽⁴⁰⁾」と聲明するに至ったのである。ここには、アナキズムからボルシェヴィズムに轉じ、中共に投じた當時

の急進的青年の思想的軌跡のひとつの典型を見てとることができよう。すなわち、「中國式の無政府主義」(『新青年』九卷一號、一九二一年五月)において、中國のアナキズムのなかに「放縱」「懶惰」といった前代より變わらぬ心性をみいだし、それを指弾した陳獨秀とは別に、アナキズムの究極的理想を根本的には捨てることなく、否むしるその理想を實現するまさにそのことのためにこそ、その「階級が完全ニ消滅スルニ至リテ國家ハ其ノ效ヲ失フ」「無國家ノ社會」に道を開く「無産階級ノ政權掌握必要」⁽³⁹⁾の理論をマルクス主義、ないしはボルシェヴィズムのなかに見いだした施存統のごとき例は、決して少なくはなかったはずである。

その意味では、日本のマルクス主義研究、とりわけ『社會主義研究』誌上において、ソビエト・ロシアの勞農獨裁をマルクスの「ゴータ綱領批判」から肯定的に解釋していた當時の山川均が、施存統の轉位にあたえた影響は相當に大きかったはずである。實際かれは、同じく肺を病みながら、精力的にマルクス主義研究をすすめる山川のその種の論文を、鋭意翻譯しては『民國日報』に寄稿する一方、『社會主義研究』の紹介⁽⁴⁰⁾なる一文を書いて、山川への傾倒ぶりをあらわにしている。そして、山川をして「ボル」に轉換せしめた「ゴータ綱領批判」の理論は、施存統のみならず、かれを通じて中國の共產主義運動にも同様の變化を促したといっても過言ではない。なぜなら、施存統が山川の啓發をうけ、「專制」肯定の論據として中國に先驅的に紹介した「ゴータ綱領批判」は、おりから中國で幕を上げていた社會革命における「專制」の是非をめぐる論戰(いわゆる「無政府主義論戰」)において、中國の社會主義運動が、ボルシェヴィズムにのつとつた「共產黨」に脱皮するための、重要な理論的根據となったからである。⁽⁴¹⁾

中共「日本小組」——すなわちかれと周佛海——に與えられた使命は、そうしたマルクス主義理論を逐次中國に紹介することと共に、「日本全志ト連絡」⁽⁴²⁾してコミンテルンと日本の共產主義運動の橋渡しをすることであつたが、かれは事實上唯一の「日本小組」成員として、たしかにそれを實行している。すなわち、コミンテルンの主催する「極東諸民族大會」

への人員派遣の働きかけのために、その一〇月初旬に張太雷が密かに來日するや、かれは日本警察の厳しい監視の目をかいくぐって、日本に不案内な張と日本の社會主義者（堺利彦、近藤榮藏）との接觸を實現させたのであった。

かれの證言⁽⁴⁾によれば、「中國社會主義青年團の團員」張太雷が「露國過激派の代表」「S君」(Sneeviet すなわちマリーン [Maring]) からの使命と周佛海の紹介狀を帶びて、かれの下宿である三崎館に現れたのは一〇月五日だった。張太雷はかれのもとに一週間ばかり滞在したが、到着の翌日あたりに施に伴われて、かれと面識のあった堺利彦のもとを訪問し（施存統は大杉榮、山川均も知っていたが、面識がなかったので堺を紹介したという）、極東諸民族大會への人員派遣を要請したという。堺はすぐに近藤榮藏を呼んで張と施に應對したが、施存統の語學力ではとても通譯はおぼつかなかったであろう、そのやりとりは雙方英語でおこなわれたらしい。施存統はこのほかに、張太雷がその後もう一度堺に面會して、かれらが派遣してくれる人員の數を確認し、その何れかのさいに朝鮮銀行の百圓札で千圓を派遣旅費として近藤に渡したが、そのうちの五百圓は施存統自身が朝鮮銀行で日本紙幣に兩替したこと、施存統自身も日本の社會主義文獻の翻譯原稿料として百圓をうけとったこと、また張太雷がその使命を完遂して歸國したのが一〇月一三日前後であることを詳細に證言している。

日本の共產主義運動とコミンテルンとの關係が、この「極東諸民族大會」への參加を契機に一舉に緊密化したことを考えれば、かれがこの密會にあずかったことの意味は大きいと言わざるを得まい。すなわち、かれはこの時期に日中間に存在した社會主義思想の連環と、共產主義運動の連攜を一身に體現する存在として、日本および中國の共產主義運動史に逸することのできない足跡を残したのである。だが、かれが中國共產主義運動の理論供給者として、あるいは日中共產主義運動の仲介者として活動しえた時期は長くは續かなかった。張太雷の來日から三カ月もせぬうちに、かれの留學生活は突如終わりを告げることになる。かれを待っていたのは、「赤化宣傳運動資金」の授受に關與した容疑による逮捕と、それに引

き續く強制歸國處分であつた。

施存統逮捕の引き金となつたのは、文書による反軍宣傳を容疑とする近藤榮藏の檢舉（一九二一年一月二五日）に始まるいわゆる「曉民共產黨事件」である。かねてより施存統の舉動に不信の念をつのらせていた日本の官憲にしてみれば、「曉民共產黨事件」の取り調べを通して、さきの近藤にたいする張太雷からの資金提供、そしてそれへの施存統の介在の事實をつかんだとき、捜査の手を施存統に及ぼすのはけだし當然の處置だつたらう。近藤の檢舉からひと月もせぬ一二月二〇日、はたして施存統は逮捕され、日比谷署に拘引される⁽⁴⁴⁾。そして、警視總監より内務大臣にその國外退去處分が申請された一二月二三日に、東京地方裁判所の「曉民共產黨事件」豫審廷に證人として引き出され、そこで日中共產主義運動史研究に極めて重要な意味をもつ證言を行うことになる。かれは法廷で、「十九才頃から「社會主義を」研究」してきた自らの思想的立場に關して、「元はアナキストであつたが今はコンミニunistであります即ちマルクス派に屬してゐます」という言葉を残したが、それは、アナキズムから最終的にマルクス主義への轉換をもたらした一年半の日本留學にたいする總括の言葉でもあつた。

一二月二七日、拘留中のかれに内務大臣より國外退去命令が下され⁽⁴⁵⁾、これをうけて翌日の新聞各紙は施存統の逮捕と國外退去處分を、かれの寫眞入りで大きく報じた。慌ただしく歸國準備をすませた施存統は、一二月二八日夕刻に二、三の友人に付き添われて横濱へむかい、神奈川県警の刑事の監視下に、「ありぞな丸」の三等雜居船室にはいる⁽⁴⁶⁾。新聞の傳えるところでは、詰め襟制服姿のかれは時々船窓より陸地を眺め、淋しさを漂わせていたという⁽⁴⁷⁾。かれと護送の警視廳警官二名を乗せた同船の解纜は翌二九日の午前八時半⁽⁴⁸⁾。途中神戸を経由した「ありぞな丸」が門司を離れたのは、年も改まつた一九二二年一月六日のこと⁽⁴⁹⁾。埠頭からかれを見送るものは、監視の任を與えられた福岡縣警の警察官のみであつた。

二 社會主義青年團の驍將

1 若き指導者

日本よりの國外退去處分をうけた施存統は、一九二二年一月七日に「ありぞな丸」で上海に送還された⁽³⁰⁾。不意の歸國であるから、埠頭にかれを迎える知友はいなかったかも知れないが、留學を世話してくれた恩人戴季陶は、當時すでに廣州に去っていた以上、かれが身を寄せる場所は、中共中央、すなわち陳獨秀のほかにはなかったはずである。

「赤化活動」による檢舉拘留、國外退去という「勳章」をつけて歸國した施存統に共產黨が與えたのは、黨の外郭組織である社會主義青年團の統括者という任務であった⁽³¹⁾。當時の社會主義青年團と中共は、實質的には半ば重なりあう組織であり、黨員はほぼ全員が青年團にも加入していたといわれる⁽³²⁾。したがって、かれは中共中央の意を受けて、團の任務にあたったのであった。結黨當時より非公然の状態にあった中共にたいし、社會主義青年團は半公然の組織であり、事實上は中共に代わっておもてだった活動を擔う重層組織兼實動部隊であった。一九二二年五月時點での團員數は公稱五千、むしろその數字は帳簿上のものであり、實際の活動に堪えうるものはその一部に過ぎなかった⁽³³⁾。二百に満たない同時期の中共の黨員數に比べれば、その動員力は黨を上回るものであったかも知れない。その意味では、かれに課された使命は、その團の上ののっていた黨本體の命運をも左右しかねない重要なものだった。

本章では、團の責任者となった施存統の事跡を検討していくことを通して、創立期中共黨史の大きな部分を占めていながら、黨史に比して著しく立ち遅れているいわゆる「團史」研究上のいくつかの問題を考察していくことにする⁽³⁴⁾。

中國の社會主義青年團は、中共の發起組（いわゆる上海共產主義小組）の組織にやや遅れて、一九二〇年八月二二日に

上海の八人の青年によって結成された「青年社會革命黨」(前掲高津論文によれば「青年社會黨」、「施存統證言」によれば、「社會主義青年黨」)を嚆矢とするといわれる(當時、施存統は日本留學中であり、その存在を知ってはいいたが、その發起に直接にあずかってはいない⁽³⁶⁾)。その後まもなく、北京、廣州、長沙、武昌等で類似の團體が誕生したが、一九二〇年後半に組織された社會主義青年團は、當時の思想状況を反映して、「アナ」「ボル」はおろか、「社會主義」と銘打つあらゆる雜派を糾合した烏合の團體に過ぎなかった。したがって、一九二一年初頭にそれら青年團の主導者であった張太雷と俞秀松が、相次いでモスクワでのコミンテルン大會、キム大會参加のために中國を離れてしまうと、全國の社會主義青年團の筆頭格であった上海の團は、多くの團員がモスクワに向かったことも手傳い、たちまち有名無實化してしまうことになる。すなわち、マーリンのコミンテルンあて報告によれば、「上海の青年組織は、一九二〇年から一九二一年にかけて二百人に達したが、一九二一年夏に急速に衰退し、知識人における活動は一時期、全く中斷した⁽³⁷⁾」とあり、また一九二二年五月に開かれた中國社會主義青年團の第一回全國代表大會の報告でも、「一九二二年五月にいたって、實際上運營していけないことがあきらかとなり、暫時解散を宣言せざるを得なかった⁽³⁸⁾」と述べられているのである。したがって、はからずもキムの第二回大會(一九二一年七月)に出席した俞秀松が中國社會主義青年團を代表して報告を行った時には、かれが代表していたはずの青年團は中國において解消されていたということになる。もっとも、青年團の兄貴分にあたる共產黨の方にしてからが、有力な資金提供者であったヴォイチンスキー(G. Voitinsky)が一九二一年の初めに歸國してしまうと、「黨の活動は資金缺乏のために、みな暫く停頓した⁽³⁹⁾」と言われているのだから、その弟分である青年團が一旦解消されてしまったとしても、それは無理からぬことだったのかもしれない。

こうして一旦解散状態になった社會主義青年團が再建されるのは、一九二二年一月(一説に一〇月⁽⁴⁰⁾)、すなわち「少年共產黨」を組織せよとのキムの指令を帯びた張椿年(張太雷)がモスクワから歸國(恐らくは八月ごろ)してのちだっ

た。張太雷は歸國後、この件をかつての團員に諮り、その結果、新組織の結成は舊青年團の内實刷新をとまう再建にかずとの合議のもと、上海社會主義青年團が恢復されたのだという⁽⁸⁾。上海の團の再建にさいしては、前轍を避けるべく、團の主旨をマルクス主義に確定し、團員の淘汰を圖ることが決められた。ついで、各地の青年團も順次それにならって再建された。

施存統が青年團の責任者に指名されたのは、こうした時期のことだった。おりから、團の再建指令を持ちかえった張太雷は、華南の視察に赴くマーリンの助手兼通譯として上海を離れており、キムの中國代表だった俞秀松もまだ歸國しておらず、再建なったばかりの社會主義青年團の數千の團員を束ねる重責はひとり施存統の肩の上にかかったのである。一九二二年初頭の社會主義青年團の活動としては、その年四月に北京で開催されることになっていた「世界キリスト教學生同盟」の大會に反對したいいわゆる「非基督教學生同盟」の運動⁽⁹⁾があるが、かれに課せられた當面の課題は、何よりも、各地の團組織を結集し、その存在を世に知らしめる中國社會主義青年團第一回全國代表大會（以下、團一大と略稱）の開催を準備することであった。

二月一二日、上海の施存統は「中國社會主義青年團代理書記」の名義で會議を開き、來るべき團一大の召集要項を決定し、二月二二日にそれを各地の團組織に通知した。大會開催の原案は、「一、會期は一週間、四月一日より。二、場所は□□⁽¹⁰⁾。三、代表は各區より二人、二百人を超える區はさらに代表一人を増派できる。四、代表の旅費は各區の自辨とする⁽¹¹⁾」というものであった。全國の代表の承認を得た正式の團中央が成立する以前であるから、かれの職名は「代理書記」なのであり、團中央の名稱は「臨時中央局」（あるいは「上海臨時中央局」というわけである。これ以後、各地の團組織と施存統の間には大會開催をめぐる多くの書簡のやりとりが行われた⁽¹²⁾。それによれば、當初、團一大は四月に上海で開催される豫定だったが、三月下旬には開催期日が五月に、場所が廣州に変更されている。この変更は、「大會の場所は廣

州に變えられればさらに結構です。比較的「自由ですから」という廣州の譚平山の提案によるものと考えられる。當時の廣州軍政府の社會主義運動にたいする比較的寛容な施政が、その提案の背後にあることは言うまでもないだろう。また、廣州で同時期に第一回全國勞働大會の開催が豫定されていたことも、團一大にとっては好都合だった。

かくして、『先驅』五號（一九二二年四月一日）に、團一大開催の手續きとして必要な「中國社會主義青年團臨時章程」が公表され、ついにマルクスの生誕日にあたる五月五日の午後一時、廣州は越秀南路東園において、團一大が開幕した。當日は開會式と並行してマルクス生誕記念大會と全國勞働代表歡迎大會が軍樂隊の参加もえて舉行され、つめかけた参加者は公稱一千五百人あまりに達したという。⁽⁶⁷⁾ 上海では半公開の青年團も、ここでは公開そのものであり、まさに全國團員五千を標榜する社會主義青年團の面目躍如たる盛會であつた。引き續き、翌六日より一〇日まで計八回の實質的な會議がもたれたが、参加したのは十五の地方團の代表二五人とほかに外國代表二名である。⁽⁶⁸⁾

それぞれの會議においては、大會終了時に發表されることになる四つの決議案と團の綱領、章程が討議され、最終日には臨時中央局と各地の代表による活動報告がなされたあと、第一期の中央執行委員（任期一年）の選舉が行われた。中央執行委員當選者は、高尚德（高君宇 十六票）、秀松（俞秀松 十五票）、方國昌（施存統 十四票）、張椿年（張太雷 十四票）、蔡和森（十三票）の五人、施存統がその五人の互選で、「事務を總理する」「書記」に選出され、引き續き團中央の最高責任者となった。⁽⁶⁹⁾ 創立時の中共とは違い、公開度の高い組織であつたためか、こうした人事の手續きがしつかり章程に基づいてなされたことは注目されてもよいだろう。

施存統が社會主義青年團の初代中央書記に選ばれたのは、もちろん團一大を準備した臨時中央局責任者としての実績が尊重されたものであつただろう。加えて、中國におけるマルクス主義紹介にかれが相當に貢獻していたことも、團が「マルクス主義を信奉する團體」⁽⁷⁰⁾であれば、なおさら重要視されたと見られる。この年初めの歸國から五月の大會までの間に、

かれは編譯書として、『社會經濟叢刊』（泰東圖書局、一九二二年一月）、『馬克思主義和達爾文主義』（商務印書館、一九二二年一月）、『馬克思學說概要』（商務印書館、一九二二年四月）、『勞働運動史』（人民出版社、一九二二年四月）を立て續けに刊行している。

これらの書籍はいずれも、河上肇、高島素之、堺利彦といった日本人社會主義者の著作や譯書の翻譯、重譯なのだが、當時の中國において發表されていたマルクス主義關係の單行書、論文の多くが譯書か、あるいは日本語の文獻を下敷きにした翻案なのだから、それは何ら怪しむには及ばない。むしろ、翻譯であろうとなかろうと、一冊でも多くのマルクス主義關係文獻が求められていた出版狀況⁽⁷⁾においては、それは歓迎さるべき美舉であつた。その意味では、「多くの同志はほとんどが、まず共產黨員になつてからマルクス・レーニン主義を勉強した」と評される當時の思想狀況のなかにあつて、かれが一頭地を抜く理論家的存在だつたことは確かである。わけでも、ボルシェヴィズムよりするアナキズム批判の論文を收録し、初期黨員、團員の必讀文獻ともなつた『社會主義討論集』（新青年社、一九二二年九月）に收められている施存統の論文數が陳獨秀に次ぐ五篇に達していることは、當時の共產主義運動におけるかれの理論面での貢獻のほどを物語つていよう。

2 團指導者の苦惱

團一大を成功裡に開催し、晴れて社會主義青年團の初代中央書記となつた施存統の次なる使命は、マルクス主義に宗旨を確定して再出發した（團一大の「中國社會主義青年團と中國の各團體との關係の議決案」⁽⁸⁾によれば、「革命的でないニセ社會主義團體」に對しては攻撃を加えるとしながらも、「無政府共產主義團體」とはなお「共同戰線を結成する」とし

ていた)とはいえ、なお散漫さを免れない團組織を、強固な信條的紐帶に基づく規律ある團體に育てることであった。むろん、團一大の後、團は青少年労働者への働きかけを通じた労働運動支援も行っている。しかし、かれの團中央書記在任一年餘の時間と精力は、もっぱら團の組織問題に費やされたといつてよい。それは、團が青年大衆を指導して何らかの表だった活動を展開する以前の問題、言葉を換えれば、團という組織が成立した時點ですでに解決されたかに見える問題である。だが、團の抱える本源的問題はそこにこそあった。それは二つの意味においてである。一つは、マルクス主義者に團員を限定したのをうけ、その規律を明確にして團の一體性を強化するという意味において、つまりは團のボルシェヴィキ化ということになる。そして、今一つは、團を團たらしめるといふ自明的、かつ同義反復的な事柄ながら、他方、團が黨たり得ず、あくまでも團であることを要求されることに起因するより根本的な存在意義の問題であった。つまり、團がボルシェヴィキ化すればするほど、團と黨の境目は不明瞭にならざるを得ないというジレンマである。特に後者の問題は、名目上、團が黨と別に存在する限り、のぞましい黨・團關係のあり方という形をとって、終始團にまわりつく難題であり續けた。

施存統が團の最高責任者として、上記二つの難題に取り組んだ孤軍奮闘の姿は、かれ自身の編集にかかる團中央の機關誌『先驅』(半月刊)に見ることが出来る。『先驅』は一九二二年一月一日の創刊からしばらくは、北京の團員(劉仁靜、鄧中夏)が編集の任にあた⁽⁴⁾ったが、第四號(一九二二年三月一日)からその終刊(第二五號、一九二三年八月一日)までは、三號の例外をのぞき、すべて施存統の編集になるものであった。かれは後年、同誌の編集時代のことを回想して、「わたし個人は當初は無給で、のちに一部分の原稿料を受け取ったが、しまいには原稿を書く時間さえなくなつてしまつたので、毎月三十元の生活費をもらった。當時、團中央で給料をもらっていたのはわたし一人だけで、雜誌『先驅』の出版活動は、原稿依頼、執筆、編集から校正、印刷所回りまで、すべて自分が一人でやつた⁽⁵⁾」と述べている。當時の黨幹部

の多くがなお、黨務のほかは職業や學籍を持ついわばアマチュアの革命家であったことを思えば、かれは黨生活者（あるいは職業革命家）の比較的早い例ということになる。もっともかれは、それに見合う重責を擔っていたし、そうでもしなければ團中央の存立自體が危うくなる深刻な狀況が團をおおっていたのであった。「解放」後のかれは、初期の社會主義青年團の一般的狀況について、もはや多くを語らないが、當時かれが直面していた困難（それはすなわち社會主義青年團の困難でもあるのだが）は、團中央責任者としての眞摯な告白「本團の問題」に率直に述べられている。

「本團の問題」⁽⁶⁾は、施存統が團一大の半年餘り後の一九二三年一月二五日から六月一二日まで、四カ月半にわたって延々と綴った三萬字を超す長大な團務報告であり、當時の團内事情と團中央書記たるかれの苦惱をつぶさに傳えてくれるものである。「本團の問題」は、「一 發端」「二 性質」「三 政策」「四 組織」「五 訓練」「六 工作」「七 宣傳」「八 經費」「九 中央地方及團員」「十 結束」の全一〇章からなるが、以下、「本團の問題」によりながら、そこからうかがわれる團の姿を検證していこう。

施存統の目に、何より深刻な問題として映ったのは、各地方團組織の散漫にして無規律な狀態が、團一大このかた、なら改善されていないことであつた。團中央は團一大をうけて、つとに各地の團組織に、團の章程にならつた改組と所屬團員の調査表提出、および「内部訓練」の徹底を團中央通告として命じていた。⁽⁷⁾「中國の青年無產階級の組織、すなわち無產階級の完全な解放のために奮闘する組織」として再出發した青年團が、實際の運動に取り組まんとした時、「あるることか同志の中には、第三者の立場で團體、あるいは執行委員會の是非を云々し、しかも大會において意見を出したり責任者に忠告したりするのではなく、二、三人の個人的談笑のタネにして済ます者がいる」ような團の現狀を前にして、ますます組織強化の必要があつたことは當然であつただろう。だが、各地方團の對應は必ずしも満足のいくものではなかつた。

かれは言う。

我々の中央など、言ってみればまことに憐れむべきであり、権力と言えるものなど全くと言っていいほどない。もし中央にまだ権力があるのなら、現在の各地方團など、とうの昔にきれいさっぱり除名されて然るべきである。試みに問う、現在の各地方團で、なお中央を眼中に入れているのはどれほどあるだろうか。……中央はこの一年來、全部で三九回の通告を出したが、實際に效力を生んだのは一體何回あるだろうか。もし、各地方の眼中になお中央があるのなら、どうして中央の通告に對してこんな態度をとるのだろうか。……中央が各地方に求めたほんの些細な報告ですら、各地方がそれに従って報告をよこしたことは一體何度あっただろうか。

事實、かれのもとに寄せられる各地方團からの報告の多くは、活動の報告というよりも、むしろ活動停滯の辯明であつた。

わたしは……過勞から目を病み、今になっても快癒していません。今でも、讀むことも書くこともままならず、ために全てのことがみな停頓してしまいました。……つまるところ、福州のSY「社會主義青年團」はわたしの同志十餘人だけで、これ以外にはまだ外に發展していませんので、詳しい報告もありません。(福州の青年團にかんする報告、一九二三年五月)⁽⁸⁾

「重慶の」SY自身は全く活動をしていません……當地のSYの最大の缺點は、何よりもまず方法のないことで、さらに何らかの方法を講じようとしているようにも見えません。ただ、いたずらにその名稱があるだけです。(重慶の青年團にかんする報告、一九二三年二月)⁽⁹⁾

こういった状況は、福建、四川といった團の後發地區だからまだやむを得ないでしょう。だが、多くの勞働者團員を有する湖北の團さえもが、陳獨秀の措置を不満として

〔中共〕中央書記がこういった態度で我らに對しているのに照らせば、我々〔武漢の青年團員〕は本來であれば離脱すべきであるが、萌芽時期にあつて大局を鑑みれば、また離脱するには忍びない。……我々の實情を理解し、これまでの中央の固執偏見、是非の武斷を改め、釋明に努めるならば、我々も以前の態度にもどるであらう⁽⁸¹⁾と、暗に關係斷絶をほめかすといった有様であれば、先の施存統の嘆きも致し方のないものであつた。

また、全國五千團員の過半を占めた廣東の團組織も、そこに駐在した最高幹部の一人張太雷が、「ポルトガルの事件」〔一九二二年五月末にマカオのポルトガル兵が中國人労働者を虐殺した事件〕が起こつてから、青年團はまだ何等の行動も起こしていません。わたし一人が督促していますが、まだ何の効果もありません。……廣東のことは中央局が来てくれれば何とかなるでしょうが、そうでなければ悲觀的です⁽⁸²⁾と告白していくらもたたないうちに、一千人以上もいたはずの肇慶の團組織が、「無形消滅」してしまふ體たらくだつた。

しかし、まがりなりにもこういつた「活動報告」を團員名簿とともに中央に送ることのできた廣東の團は、まだしも恵まれていたほうかもしれない。なぜなら、杭州、濟南といつた小規模の地方團は、報告を送る「郵便切手を買う金さえないほど窮したこともあつた」からである。これが全國團員五千と豪語した社會主義青年團の實情だつた。各地の支部の狀況がかかる以上、「中央はまったく權力のないことを感じ、號令は『都門』を一步も出ざる」状態に置かれたことは想像に難くない。その意味では、團中央委員會解散の噂がコミンテルン代表マーリンの耳にはいるのも、無理からぬことであつた。

當然のことながら、そうした支部組織の慘狀は、團の活動を支える資金の面にも及んでいく。團の章程によれば、團員は入團時に五角の入團費と、毎月一角の團費を納める（労働者は入團費免除）ものとされていたが、施存統にとつては、「映畫を見たり、公園に遊んだり、車に乗ったりする費用からどうして節約できないことがあるか」と考えられたその

一角すらなかなか納入されていないのが實情だった。「北京の地方團では、この一年間に一文の團費も納めていない同志が大半なのだ。そして、以前の地方執行委員會もそのことを忘れてしまっていたのである」と嘆く施存統にとって、「我々の命をかけた唯一の團體」にたいする團員の冷淡さは我慢のならないものであったにちがいない。かれに言わせれば、百五、六十人の團員を有する北京クラスの團なら、各人が毎月きちんと團費をおさめ、そのほか五角のカンパをすれば、「相當の活動ができるだけでなく、さらにそうした經費の中から一部分を割いて少なくとも一人の同志（例えば書記）の生活を維持し、團務に専念させることができるはず」なのだった。

ただし、團中央のお膝元である上海の團組織、およびかれ自身もその點においては、必ずしも褒められたものではないことをかれは率直に認めている。かれの悔悟を聞こう。

今の自分の團體にたいする熱意は、實に去年歸國したばかりの頃には及ばない（もとよりやむを得ない多くの理由があるのだが）し、とりわけ三年前にアナキズムを信奉していたころには及ばないと感じている。思い返せば、三年前、北京の工讀互助團が失敗に終わって上海にやってきた時には、三カ月の間に、友人に食住の世話をしてもらったものの、お金など使ったことはなかった。まとまったお金が入ったときには、すぐにそれをアナキズムの團體にカンパしてパンフレットを印刷したものである。電車に乗る金など使わず、「大世界」だって何度見物に行きたいと思ったか知れないが、幾ばくかの金は有用なところに使おうと志を立てていたので、ついぞ行ったことはなかった。わたしが慚愧、痛恨に堪えないのは、今の自分に、かつてアナキズムを信奉したときのような熱情と精神がないことである。……一人の熱心、忠實な共產主義者たんとするわたしが、あの頃のアナキストだったわたしを模範としなければならぬとは！

かかる告白をするかれはそれでも、苦境にある上海の團組織の會合を開き、特別カンパ三十五、六元を集めて何とか團

を維持し續けた熱意の人だった。だが、かれがほぼ一人で支えていた機關誌『先驅』は、第一六號（一九二三年二月）時點で七百元を超える負債をかかえ、第一九號ではそれが八百元餘りに膨らむとあつては、上海團の努力にも自ずから限界があった。かれによれば、「毫も情け容赦なく」購讀費を徴收し、購讀費未納の者には發送を停止し、雜誌の贈與、回覽の禁止を指示したものの、創刊以來、『先驅』の購讀料として中央に寄せられた金額は、總計でわずか三十餘元に過ぎなかったという。むろん、團の兄貴分である共產黨の預算規模は、組織は團より小さいとはいえ、一萬七千元餘り（うち九四％強にあたる一萬六千元餘りはコミンテルンよりの援助で、自己調達分は一千元——一九二二年六月時點）であつたら、一千元に満たない團機關誌の缺損を穴埋めするぐらいは不可能ではなかつただろう。だが、後に『先驅』が半ば資金難から停刊するに任されたことからも分かるように、施存統が團の窮狀を訴えるのは、當座の資金難を解決するためというよりも、むしろそのような事態を招いた根本原因である團員の無自覺、無責任を糾さんがためだった。はたして實現可能であつたかは大いに疑問ながら、施存統が團の經濟苦境を一舉に打開する策として、團費の強制徴收やカンパ強要とは別に、「非合法手段」による「經費調達」をあえて提案したのも、その眞意は團員の生死をかけた覺悟を求めることにあつたのではなかつたか。もっとも、その際かれは、「地方委員會、あるいは中央委員會は『特別財政委員會』を設け、もっぱら非合法手段によつて經費を調達すべきである。……少なくともその十分の一は中央に納めなければならない」としてその實施手順を明言し、「我々は共產主義者である以上、ブルジョア階級の法律、道德を遵守する義務や必要はないばかりか、努めてそれを撲滅すべきである」としてその理論的正當性も説明している以上、まんざらポーズだけではなかつたようであるが、團費さえろくに拂わぬ地方團にその實行をもとめるのは、いささか酷というものだった。現に、その決意を示した『先驅』そのものが、郵便事情と檢閲、沒收のために團員には行き渡つてはおらず、投稿途絶によつて『先驅』は存續の危機に瀕していたのであつた。

かくして連載を重ねるごとに「本團の問題」の『先驅』に占める比重は大きくなり、連載最終回には何と論説は「本團の問題」のみ、それも誌面の八分の七を占めるまでに至ったのだった。これが前述の、「雑誌『先驅』の出版活動は、原稿依頼、執筆、編集から校正、印刷所回りまで、すべて自分が一人でやった」ということの意味である。かれは言う。

各地方の通信員は、本来毎月一回は通信を寄せることになっている。しかるに實際には、衡州、太原、上海がそれぞれ一度通信をよこしたのを除けば、ほかは一文字一片すら送ってきいていない。中央は各地の同志の投稿を督促する正式の通告を二度も發したが、督促する者が督促するだけで、反應はもとのままである。最近では、張秋人、陳爲人の二同志が二篇の原稿を送ってくれた……ほかは、ほとんど一篇として同志の投稿を受け取っていない。……たとえ、懇ろに寄稿や雑誌代を求めるのが私人か友人だとしても、それに應えられない時には申し譯なく思うだろうに、ましてや寄稿を求め（今は命令とは言うまい）、雑誌代を求めているのが我々の命をかけたこの革命團體だしたら、一體どうなのだろう。我々の團體觀念は、はたして本當にこんなに薄弱であつてよいのだろうか。

いったん心中にわき起こった憤りは、かれが實直であるがゆえにおさまらない。當初、「我々の團體への加入に際しては、學問の有無を基準とするのではなく、覺悟〔施存統によればそれは「階級覺悟」〕の有無を基準とする」として、必ずしもマルクス主義に對する理論的修養を強くは求めていなかったかに見えるかれではあつたが、事ここに至り、かれは返す刀で「マルクス主義者の團體」となった青年團の「マルクス主義」にも苦言を呈す。さきの團一大に顔を見せた陳獨秀はその初日に、「マルクスの二大精神」と銘打って演説を行い、「およそ實際に活動のできるものこそが革命をなし得るのであつて、部屋の中で茶をすすり、煙草を吸いながらその「マルクス主義の」學理を研究して事足れりとしてはならない。……わたしは青年同志諸君に希望する、むしろマルクスの學說研究を少なくするも、マルクス革命運動を多くせざるべからず、と」⁽⁸⁾と述べていた。だが、施存統の目に映った中國のマルクス主義研究は、その實踐の以前に、まず研究の名に値

しないものだった。むろんかれは、自分自身のマルクス主義理解が充分ではないのを認める。だが、マルクス主義の研究が實踐へと轉化しなければならないのを承認した上でのかれの言は、

率直に言えば、我々の同志にあっては——本團の同志にあっては、マルクス主義に對して透徹した研究を行っている者は、ただの一人もないと言つてもよい。……簡略に言えば、我々の同志は、主義にたいする研究があまりにも幼稚であるがゆえに、主義に基づいて問題や事實を分析し、理解し、解決する能力に缺けているのである。……以前、コミンテルンやキムの代表はことあるごとに、本團の團員は研究室の中でのマルクス研究をするのみだ、と叱責したが、それは濡れ衣というものである。一體、どれほどの本團團員がしっかりしたマルクス主義研究の活動を行ったことがあろうか。本團にはマルクス主義を理解する團員がどれほどいるだろうか。

と容赦ない。かれと同じく日本留學の經驗を持ち、主に日本語の社會主義文獻からマルクス主義の何たるかを理解し、コミンテルンの代表マリーンをして「最も理論的修養をもつ」「理論幹部」と言わしめた李漢俊も、一九二二年六月に「わが中國では現在、マルクス學說に關する書籍は少ない」と嘆いているのだから、當時、マルクス主義の理論家を自任する者にとっては、同志たちの研究の「幼稚」さが齒がゆく見えてしかたなかったのだろう。

かくして、組織、經費、理論研究のどれをとつても、まるで體をなさない初期の社會主義青年團の病根をかれは、團員各人の、(一) 責任感の缺如、(二) 自由行動、(三) 規律の無視、の三點に集約してその是正を求める。「本團の問題」は、ふがない中央、地方團の具體的事例の紹介以外、全篇これそれらに對する、時として高踏的、かつ不敵ともいえるほど挑發的な、訓戒によって埋め盡くされているといつてよい。つまるところ、かれの意は、「我々の目下の最も重要な課題は、對外的な活動ではなく、自己を訓練することである」という言葉に盡きるのであった。

このほかにかれは、「本團の問題」において、當時、中共および社會主義青年團の大問題となっていた國共合作、とく

に國民黨への加入について、それを團の「變節」とする見方を糾し、「現時點では當然に社會革命の可能性はない」ことを論據として、それが「妥協や讓歩ではなく、まさしく進取であり闘争である」ことを説明している（かれは一九二二年七、八月頃に戴季陶、胡漢民、陳樹人の紹介で國民黨に加入していた⁽⁹⁵⁾）。また、共產主義組織の重要な組織原理でもある黨内民主主義、すなわち「民主集中制」にかんしても、要を得た解説を行っている。かれのいう「德謨克拉西^{デモクラシー}の中央集權」は、やや「絶對服從」に重きを置いてはいるものの、「鐵の規律」ばかりを強調し、その民主的側面にたいして全くといっていいほど言及しない當時の共產黨系知識人の中にあつては、まちがひなく異彩を放つ貴重な提言であつた⁽⁹⁶⁾。

「本團の問題」は、以上のように、當時にあつては相當に濃密な、そして過激な内容をもつものだった。筆者は中共、社會主義青年團の公開された文章において、かくも赤裸々な實情報告の例をほかには知らない。むろん、この文章に青年施存統の獨善性を指摘するのはたやすい。言わずもがなの呻吟や青臭さがあることも認めよう。しかし、それはロシア共產黨が革命を成し遂げ得た最大の理由を、「時々刻々努めて自己の誤りを發見し、大膽率直に自己の誤りを認め、機敏勇敢に自己の誤りを改めた」ことに求め、「この精神はロシア共產黨のもつとも重要な精神であると同時に、共產主義のもつとも重要な精神である。もし、この精神なく、日々自己の功績を喧傳するならば、それは全く革命の自殺である」と斷言する姿勢からなされたものであることを忘れてはなるまい。それはかれがその三年前、すなわちボルシェヴィズムに歸依する以前に發表した「二十二年來のわたしを振り返る」に見られる「我々が自己を改造するには『みながその眞の姿を赤裸々にさらけ出す』以外にはない⁽⁹⁷⁾」という使命感を何とよく引き繼いでいることか。そして、活動の眼目の一つに「懺悔」を掲げた覺悟社⁽⁹⁸⁾に代表される五四時期の青年たちの心性を何とよく繼承していることか。その意味で施存統はまぎれもなく、五四青年の課題と良心とを抱持して共產主義運動に轉じた人物であつた。

「本團の問題」は、「我々の團の最も重要な缺點をすべてさらけ出し、説明と是正を加えて我が親愛な同志諸君の注意をうながす。同志諸君にもし意見があれば、絶対に心中にとどめることなく、均しく實直に發表して團體の進歩を促してほしい」という前言を附して公表されたものだったが、その迫力と過激さに比べれば、返ってきた反響は必ずしもそれに十分に見合うものとはいえなかった。より正確にいえば、「本團の問題」にたいする反響が届きはじめたときには、それから議論の應酬が充分に展開される餘裕のないまま、『先驅』は間もなく開催される團の第二回全國代表大會（以下、團二大と略稱）を前に停刊を餘儀なくされていたのである。施存統自身も過勞による神經衰弱症と日本での拘留生活以來思わしくなかった健康状態⁽⁹⁾のために、それ以上『先驅』の編集を續けることはできなかった。總じていえば、かれの努力にもかかわらず、團一大以後一年間（とりわけ一九二三年二月のいわゆる「二・七慘案」によって武漢の組織が大きな打撃を受けて以降）の社會主義青年團は、かれが目指した堅固な組織と團員の規律において、「この一年の間のSYのメチャクチャ加減は隠しようもない⁽¹⁰⁾」と評される状況のまま、一九二三年八月の團二大を迎えることになったのだった。

このような團の不振の責任は、いやしくも團中央書記である以上、施存統にその一端が歸されることはやむを得まい。またあるいは、そうした紆餘曲折を、創立期の革命組織には避け難いエピソードとして済ましてしまうこともできないわけではない。しかし、創立時期の社會主義青年團の試行錯誤は、黨との間の構造的な半從屬關係に起因する根深い問題であった。停刊まぎわの『先驅』において、施存統が「本團と中國共產黨の關係は、具體的、實際的な問題のひとつであって、大いに議論の必要があると思う⁽¹¹⁾」として、團・黨關係を論ずる諸論文を發表したのはその故であった。

そもそも團は、その創立當初より、「本團の團員は大半が中國共產黨黨員であり、中國共產黨黨員も大半が本團の團員である⁽¹²⁾」と言われていたように、黨との間に明確な境のない組織であった。二十歳そこそこの青年黨員が多數を占めていた結黨當初の中共の黨員構成が兩者の違いを一層わかりにくくしていたであろう。事實、團一大で中央執行委員に選出さ

れた五人は、施存統も含め、みな中共黨員の肩書きをもつ者であり、施存統が團中央書記として黨中央の會議におおむね出席する一方、陳獨秀も團中央の會議にはたいがい出席していたのであった。⁽¹⁰⁾さらに、年齢の制限條項も團と黨とを分かつものではなかった。團は「一五歳から二八歳まで」という年齢制限を設けてはいたものの、二八歳を超えるものには「特別團員」の枠が設けられており、例えば長沙の毛澤東が二八歳を超えていながら「その働きが必要」⁽¹¹⁾との理由で團地方書記に選出されることを認める追加條項があつたからである。

とすれば、團と黨との違いとは、結局のところ中核組織とその外郭という從屬關係に過ぎないということになってしまふ。したがって、團と黨の關係を如何に規定するかということが團に求められるのは當然の成りゆきだった。一九二二年七月に開かれた中國共產黨第二回全國代表大會（施存統も團の代表として出席）の「少年運動問題に關する決議案」⁽¹²⁾を受ける形で、同年九月六日、團中央執行委員會は通告第一七號として「本團と中國共產黨の關係」⁽¹³⁾を布告した。同通告は、團と黨との關係について、「キムとコミンテルンの關係と同様に、政治面においては社會主義青年團は共產黨の主張に完全に服従すべきであるが」と斷りながらも、黨、團の兩中央執行委員會の聯席會議の合意として、

(一) 政治上の主張において、中國共產黨と協定を結ばねばならないのをのぞき、社會主義青年團は完全に自主の權を有する。(傍點引用者)

(二) 兩團體の各級執行委員會の會議には、相互に表決權を有する代表一名が出席できる。

という關係が確認されたと傳えている。本來、「服従」であるべきはずの政治面での關係が「協定」を結ぶという字句に改められていることから明らかなように、團の獨立性を強調したものである。この経緯を、施存統は團員にこう説明している。

當時、このような決定をしたのは、本團が三、四千名の團員を有しており、全國大會の議決を経ないまま、唐突に中

央執行委員會が「政策は絶対に中國共產黨に服従しなければならない」という決定を下せば、思わぬ誤解と反動が生まれないとは保證できなかったからである。中國共產黨中央委員會の諸同志もこの意を明察してそれ以上の要求を行わず、上述の決議に同意したのであった。⁽¹⁰⁾

この説明によれば、團の全國大會の議決を経るのであれば、政策面での「協定」關係を「服従」關係にすることには異存はないのであった。だが、かれは、政策以外の「活動と組織に關しては、絶対に獨立自主でなければならぬ⁽¹¹⁾」として、團と黨との間に明確な一線を劃することを主張する。それは、團と黨のメンバーの多くが重複している現状にあって、「本團の多くの重要な團員（すなわち共產黨員を兼ねている者）が中國共產黨によってほかの活動に従事させられているために、本團の活動が進展どころか後退している⁽¹²⁾」からであった。そしてその結果として、團員、黨員のあいだには、「本團を中國共產黨の預備學校（いわゆる『預科』）と見なし、未入黨の者は共產黨に『進級』することばかりを望み、すでに共產黨に『進級』した者は本團のことをすっかり忘れてしまつて、進學の目的がすでに叶えられたかのような氣でいる。かれらは共產黨に入ることの名譽とし、共產黨に入っていないのを耻辱をしているかのようなのである⁽¹³⁾」、あるいは「およそまじな分子はみなSYから選拔されて共產黨に加入しており、残りの多くは未熟な分子ばかりである⁽¹⁴⁾」という團にとっては悲しい現實が常態化していたからだった。

「黨の預備學校」たることを願わないとすれば、團にとって活動面と組織面で「獨立自主の權」を確立することは、まさに死活にかかわる課題だった。施存統はその組織的獨立を保持するために必要な具體的條件をいくつか提言したが、たちどころに「貴兄は北京で、SYは共產黨に對して獨立を宣告するというような主張をしたと聞いているが、それは封建督軍が中央政府に對して獨立を宣言するのと全く同様である。荒唐無稽、これに過ぎたるものはない。貴兄がとめてそれを改められるよう望む」という叱責が飛んできたように、團の組織的自立は、ただちに黨への反逆ととられかねない厄

介な問題だった。⁽¹⁴⁾

さかのぼって、一九二二年のコミンテルンの決議は、「〔共產主義青年組織が〕自己の政治的自主性を放棄するということは、決して組織上の自主性を斷念するということの意味しない」とうたってはいた。しかし、同決議が同時に、それが如何なる場合においても、本國の共產黨に反對できない旨を強調している以上、青年團の組織的獨立を貫徹することは、實際には極めて困難であった。ましてや、そういった青年團の原則にたいしても、「組織活動と政治活動は常にあい關連しており、したがって、組織上は獨立、政治上は黨の指導をうけるというキムの原則を絶對的に固守することは、一般的な共產主義運動にとって障害となるものである」とする決議案をのちに可決する中共の指導下にあつては、團の組織的獨立は畫餅にすらならなかった。團の組織的獨立をうたうことは、「社會主義青年團は依然として第二黨の様相を呈していると言わざるをえない」⁽¹⁵⁾という警告を受けることを意味したのである。かくして、團はその後、「隨時、黨に新たな活動人材を供給すべき」⁽¹⁶⁾存在、つまりは黨の「預備學校」的性格を脱することのできないまま、團員を擴大していくことになる。

3 團 二 大

團一大から一年あまり、施存統率いる社會主義青年團はこれといって目ぼしい成果をあげることなく第二回大會の日を迎えることになった。團二大は、一九二二年二月二十四日の團中央の通告⁽¹⁷⁾によれば、翌年の三月に開催されることになっており、開催地は、當初湖南が豫定されていたらしいが、最終的には一九二三年八月二〇日から二五日にかけて、南京の東南大學で祕密裡に開かれている。⁽¹⁸⁾施存統は團二大にさきだち、「率直にわたし個人の意見を言えば、今回の大會は開く必

要はない⁽¹²⁾」と述べていた。團の問題は團一大で定めた方針ではなく、その方針を實行できなかった散漫な團の状況にあるのだから、それはもう一回大會を開いたところで、容易には解決できないから、というのがかれの言い分だった。むろん、かれの一存で、團の章程に定められた年一回の大會を延期することはできなかったし、何といっても國民黨への全黨員の加入が同年六月に開かれた中共三大で決定されていた以上、團としても大會による決議でそれに足並みをそろえる必要があった。

各地よりの代表二十九人⁽¹³⁾が参加し、「インターナショナル」の歌聲とともに開會した大會では、冒頭で、團員が過去一年間に五千人から約二千人にまで減少したことが報告された。團一大で選出された五人の中央執行委員のうちでただ一人、團二大に出席した施存統はその責任を問われたことであろう。事實、「參會した各地の代表はいささかの遠慮もなく、中央執行委員會の過去の活動にたいして、厳しい批判を加えた⁽¹⁴⁾」という。むろん大會では、施存統が「本團の問題」でとりあげた團費の納入などの組織規律問題や、「主義の研究」の問題も討議された。また、團二大の最も大きな議題であった國民黨への全團員の加入については、若干の論争が戦わされたものの、團・黨關係がこの大會で「政策上は完全にCP〔中共〕に服従する⁽¹⁵⁾」と改定され、またそれに先だって開かれた中共三大が「社會主義青年團は、本黨第三回大會の國民運動と國民黨に關する議決案に基づいて極力國民運動に参加すべきである⁽¹⁶⁾」という決定をしていた以上、一部の反對を押し切って受け入れられることになった⁽¹⁷⁾。このほか、この大會では旅歐代表と長沙代表によって、「中國共產主義青年團」と改稱するよう提案がなされたようだが、否決されている⁽¹⁸⁾。

大會最終日に行われた役員の改選では、大會未出席者を含む七名の中央委員が選出され、團一大以來の活動不振に責任のあるはずの施存統も、中央委員に再選されている。だが、重い神經衰弱症を患っていることを理由に、かれは就任を辭退した。すでに「本團の問題」執筆時点で、「わたしには恐らくもう望みがない。團體改造の責任は諸君ら身體健全な人に

かかっている⁽²⁸⁾」として健康問題からも辭意を明らかにしていたかれにとっては、團中央委員への再選もその翻意を促すものではなかったようである。かくして、施存統の辭退によって缺員となった中央委員には、候補中央委員の中から惲代英が補充され、かれは一年半あまり心血を注いだ團中央の職務を後にすることになった。

かれが離れたあとの社會主義青年團中央が、はたしてかれを悩ませ続けた團の組織的退廢や團員の無規律現象を、その後には正し得たか否かを詳しく物語る資料はない。だが、『先驅』が廢刊されたあと、團の組織や團員の規律の實情を詳しく述べた（あるいは厳しく批判した）「本團の問題」の如き文章が、少なくとも公開の機關誌に載ることは二度となかった。團二大そのものが、團一大とはうって變わって祕密裡に開催されたように、そして團二大以後、團の機關誌が一般青年向けの『中國青年』と内部閱覽用の『團刊』に分けられたように、施存統が疾呼してやまなかった「時々刻々努めて自己の誤りを發見し、大膽率直に自己の誤りを認める」ために「團の最も重要な缺點をすべてさらけ出す⁽²⁹⁾」という姿勢が希薄になったことだけは確かである。そして、團二大の大會經過と議論の概要を簡単に紹介する報告さえもが、『中國青年』ではなく内部閱覽用の『團刊』に掲載されるようであれば、「同志の間では、赤裸々に、そして胸襟を開き、赤心もてあいまみゆる⁽³⁰⁾」べきだ、と書生じみた理屈をいう施存統の「本團の問題」の如き文章が、それ以後、一般の團員の目に觸れる形であられることはおこり得なかった。

その意味では、その後の團組織の擴充は、無規律現象の自發的克服というよりも、むしろ國共合作下の國民革命の飛躍的展開という追い風とそれに觸發された中國青年の大量加入により、施存統の意圖とは別の形で實現されたと言えるのである。

三 上海での黨員生活と私生活

1 上海大學

施存統をよく知る作家丁玲の初期の作品に、自傳的小説「韋護」⁽¹³⁾がある。丁玲みずからが、「『韋護』の中に出てくる人物は、ほとんどがみな、わたしの友人の化身である」⁽¹³⁾と語るように、それは彼女が一九二三年からその翌年にかけて、南京と上海で目にした實話を題材にして書かれたものであり、「韋護」とは小説の主人公にして、彼女自身も一時好意をもった共產主義者瞿秋白その人の化身である。小説は「珊瑚」(すなわち丁玲)と彼女を廣い世界に導いてくれた無二の親友「麗嘉」(同じく王劍虹)、およびその「韋護」の三人を中心にして、「麗嘉」と共產主義運動に献身せんとする「韋護」の戀愛關係を縦糸に、そして「革命と戀愛」の中で揺れ動く「韋護」の心情を横糸に書かれたものである。

丁玲がその晩年、瞿秋白の追憶文を書くにさいし、いみじくも、「韋護は生きていくようにというわけにはいかなかったが、それでもわたし自身の回憶のよすがとなるだけの面影は残しており、後の人が研究するときの參考資料にはなろう」と述べたように、小説に登場する様々な青年男女のモデルを同定することは難しいことではない。女性の前では調子のいい「柯君」とは「解放」後に共產黨上海市委第一書記兼上海市長にまでなる柯慶施(別名「柯怪君」)であり、革命家「韋護」の相談相手である「陳實同志」とは當時の共產黨の最高指導者の陳獨秀(號「實庵」)、「韋護」とことあるごとに衝突する同僚の「仲清」とは中國労働運動の輝ける指導者にして烈士となった鄧中夏(字「仲澥」)である。そして、小説の冒頭部分、その「韋護」「柯君」「仲清」らが南京で開いた「かれらの會議」こそは、施存統が團中央を去った團二大であり、そこにあらわれるもう一人の登場人物、すなわち小説「韋護」において、「韋護」と「麗嘉」の仲立ちをすることになる

眞面目人間「浮生」こそが、我らが施存統（すなわち小説發表時點での施復亮）にほかならない。

團二大で團中央を去った施存統、すなわち「浮生」のその後を、小説「韋護」に紹介してもらおう。

浮生はこのごろ苦勞していた。S大學では何時間かの社會科學の授業を擔當していた。それはかれには樂なことではなかった。かれはいい加減な人ではなかったから、豫め講義ノートを準備するのに教室の時間の三倍も四倍もかかったのである。

「S大學」とは、國民黨と共產黨の協力の下、一九二三年三月に上海で開學した上海大學である。⁽¹³⁵⁾ 一九二三年夏に團中央の仕事を離れたあと、施存統は國共合作の重要據點であつたこの上海大學で教鞭をとることになった。團中央の組織工作といった激務により心身を損なうことになったかれにとって、それは一時の休養を兼ねたものでもあつただろう。また、青年團の機關誌に社會科學關連の讀書案内が載ると、みずからも早速「社會科學研究をめぐって——わたしなりの圖書目錄」⁽¹³⁶⁾なる文章を書き、得意氣にマルクス主義文獻についての蘊蓄を傾けてしまふかれであれば、大學での教授生活はなによりふさわしいものだったはずである。

上海大學は、國民黨にとってみれば國民黨の「黨立大學」⁽¹³⁷⁾であつたが、共產黨は國共合作の據點として、そして共產黨員育成と黨勢擴大の場として上海大學を重視し、ここに多くの優秀な幹部黨員を送り込んだ。特に一九二三年四月に、校務長として共產黨員の鄧中夏が着任して以降、その夏に新設された社會學系は、學内で最大の系となり、系主任瞿秋白以下、蔡和森、張太雷、惲代英、彭述之らを教員に迎え、共產黨系の牙城となった。⁽¹³⁸⁾ むろん施存統もその一人である。かれの擔當科目は當初、社會運動史、社會思想史、社會問題の三つで、のち一九二四年一〇月に瞿秋白が大學を離れるにおよび、かれは社會學系の系主任に就任した。

むろん、上海大學の社會學系が共產黨の重要な據點である以上、かれは大學の教科書『社會科學講義』の執筆編集とい

った學務のみでなく、黨務、團務の責任も負わねばならなかった。⁽¹⁰⁾當時、上海大學の共產黨組織は上海の黨支部のうち、動員力と影響力の面でその筆頭にあたる中核組織であり、かれがその黨務を統括することは、中共中央の指示によるものだった。⁽¹¹⁾かれの上海大學での日々は、反共色を次第に鮮明にしていく大學内の國民黨としてのぎを削りつつ、上海における國民會議運動、ソ連承認運動などを指導していくことに費やされた。その奮闘ぶりは、中ソ交渉と外蒙古回收をめぐり、かれと『時事新報』との間で展開された論戦に認めることができる。また、その多忙な日々を縫って、かれは尊敬してやまなかった山川均の著書の翻譯（『資本制度淺説』上海書店、一九二五年二月）を行っているが、類書の少なかった當時にあってそれは貴重な業績であり、また同時にかれの關心の在處が、なお理論の探求に向けられていたことを示すものでもあった。

ただし、かれが理論探求に打ち込むことに批判がなかったわけではない。理論云々をいうよりもまず實踐があるべきだとする中共内部の青年には、學術研究のみに専念しているかに見える施存統ら上海大學内の風潮を苦々しく思っていた向きもあったようである。當時、黃埔軍校に在籍していた青年黨員張隱韜の日記（一九二四年七月二一日條）を引用しよう。

……適當に手にとってみたら『社會科教講義』（上海大學、黃埔軍校の教科書『社會科學講義』のこと）だった。數ページ讀むと、ある感想が生まれた。この本は、存齋（安體誠）、存統らの出版物であり、一般の人の注目と贊同を呼んだものである（確かにやっていることはすばらしい！）。わたしは以前、かれらと一緒に活動し、しばらく一緒に過ごしたが、わたしは彼らが無用と考える者である。なぜなら、わたしの人物評價の着眼點は、まず第一に實踐があるか否かを重視するものだからだ。かれらの實踐なるものの一斑をわたしは見てきた。たしかに、きらびやかな文章作れるがゆえに、筆をとって書くものは大層なものだ。一般の人は、その文章がすばらしいことばかりを見て賞賛しているが、わたしは本當に怒りがおさまらない。どうりで皆がそろって文學家になろうとするわけだ。――

——實行家たれんとする者はいふのだらうか。⁽¹⁴⁾

まさしく、創立期中共の「理論家」であつた李達が、「當時、黨内の人間の多くは實行を重んじ、研究には注意を拂つていなかった。さらには、『マルクスの如き實行家が求められているのであつて、マルクスの如き理論家は必要ない』というような警句さえあり、同時にわたしも、研究系（社會學說を研究する者を指して言うもの——原注）というレッテルを貼られた⁽¹⁵⁾」と振り返るような雰圍氣が、たしかに黨内には存在していたのであつた。國民革命の高まりを目のあたりにし、理論の消化といった段階を経る以前に「實行」という熱意につき動かされた青年が、大學して共產黨、社會主義青年團に加入していた中では、かれら古參の「理論家」の姿勢は、どうしても消極的、あるいは高踏的と見なされることを免れなかつた。

こうした中で一九二五年を迎えたかれに、黨員生活にとつても大きな打撃となつた私生活上の事件が持ち上がった。當時、上海の共產黨員の話題をさらつた妻王一知の出走である。

2 革命と戀愛

施存統がその妻となつた王一知と知り合つたのは、王が丁玲（當時の名は蔣冰之）とともに、前述の王劍虹の勧めで湖南の郷里を飛び出し、當時上海で設立された平民女學校へやつてきた⁽¹⁶⁾一九二二年前半のこと、すなわちかれが團中央の書記をしていたところと推測される。

王一知（一九〇一—一九九一、原名は楊代誠、またの名は月泉⁽¹⁶⁾）は、湖南省芷江縣に生まれ、桃源女子師範學校時期に「五四」によって目覺めたのち、一九二二年二月に親友である王劍虹、丁玲らとともに上海に行き、「共產黨がつくつた

最初の學校⁽⁴⁶⁾といわれる平民女學校に學んだ。平民女學校でのマルクス主義宣傳に違和感を覚えて南京に去った丁玲、王劍虹とは異なり、彼女は一九二二年の後半に社會主義青年團に入り、間もなく入黨した。平民女學校には、「講義といつても實際は演説⁽⁴⁸⁾」をするための共產黨員が出入りしており、施存統も「わたしの平民女學にたいする希望」(國昌「我對於平民女學之希望」『婦女聲』六期、一九二二年三月五日)なる一文を書いていることから見て、その平民女學校で二人は知り合い、同居にいたったのであろう⁽⁴⁹⁾。

かつて婚姻制度の廢止を公言したことのある施存統であるから、二人が正式の婚姻關係にあったかは疑問が残るが、一九二三年には女兒が生まれており、はた目には紛れもない仲睦まじい夫婦であった。王一知は上海大學の學生黨員でもあり、一九二三年から二五年にかけて、二人は黨組織の面でも、同じ上海大學の支部に屬している⁽⁵⁰⁾。その彼女が、突如愛兒を連れて出奔し、施存統の同志でもある張太雷のもとへ去ったのは、一九二五年のはじめのことであった⁽⁵¹⁾。張太雷はいうまでもなく、共產黨の創立時期から壯烈な死をとげた一九二七年の廣州蜂起にいたるまで、一貫して共產黨の中心的幹部であり續けた人であり、とりわけその拔き出した語學力により、マーリンやボロジン(M. Borodin)の片腕となった人物である。そして、施存統にとってみれば、當時同じ屋根の下で暮らし、ともに黨務、團務に精魂を傾けていた同志であるばかりか、かつて日本留學中には、かれをかくまうてやったことで逮捕、國外追放處分の憂き目にあったこともあるという因縁淺からぬ人でもあった。妻王一知が、こともあろうかその張太雷と密通し、出奔したのだから、施存統のうけた衝撃と痛苦のほどは、思い半ばに過ぎるものがある。

王一知は、はたして如何なる理由で施存統を捨てたのだろうか。彼女は張太雷の夫人、あるいはその未亡人として、比較的多くの回想録を残しているが、張との同居のいきさつについては、「上海の五三〇運動の高潮が一段落したあと、わたしは炎天下の夏に上海から廣州に行き、太雷の活動を助けた。その時からわたしは太雷と一緒に暮らすようになった」

と述べるだけで、前夫の施存統や當時の共產黨員の話題となった自身のスキャンダルについては、固く口を閉ざしたままこの世を去っている。むろん、彼女の後半生に求められたものが、あくまでも偉大なる烈士張太雷の伴侶であり続けることであつた以上、彼女には、ことさらにその出奔事件を取りあげて、烈士の名譽に要らぬ經歷をつけ加える必要はなかつた。ましてや途中で黨を離れるという「過ち」を犯した施存統との關係を云々することは、みずからにとって何ら益のないことであつただろう。また、張太雷の前妻として常州の家を守り、張の母とかが残した三人の子の世話をした陸靜華も、その娘である張西蕃も、一九二四年以降、時折仕送りをよこすだけで、二度と歸ってくることのなかつた張太雷に何があつたかを語つてはくれない。⁽¹³⁾

だが、施存統にしてみれば、王一知の出奔は、私生活上の一椿事としてはすまされない大事件であつた。かれは、そのために「憤りの餘り死なんとした程で……その頃上海に於ける工作は極めて緊張せる際であつたにも拘らず、王一知を捜す爲黨の許可を待たずして遠く長沙、青島一帯に行つた⁽¹⁴⁾」といわれ、最終的には、再婚に際して自分の名前を變えるほどだつたからである。

そもそも、共產黨員たる施存統と王一知の結婚生活（あるいは同居生活）はどのようなものだつたのだろうか。むろん、それを直接に記した資料などあるはずもない。ここでは、かれらの家庭生活をしのぶ唯一の手がかりとなる丁玲の回想と前述「韋護」の「浮生」と「雯」（すなわち「王一知」の化身）にあえて登場願ひ、丁玲の目に映つたかれらの人となりの一斷面をかいま見ることにする。⁽¹⁵⁾もとより實話とはいへ、小説である以上、脚色のあることは争えないが、おおよその雰囲気がかうことは許されよう。

丁玲の目に映つた施存統は、本稿の冒頭でも觸れたとおり、時として面白味のないほど「眞面目な人」であつた。小説「韋護」の「浮生」もその通りの人物、つまり、「邪心のない好人、人情の機微を知らない實直な人」である。もちろ

ん家庭内においても、「浮生」は「かれの奥さんに背くところがあるのを望まなかった。かれらはなお戀愛のただなかにあったので、かれは他の美しい肉體で、不道德な幻想を抱こうなどと思ったこともなかった」と描かれている。だが、そのあまりの生眞面目さゆえに、王劍華の化身である「麗嘉」によって、「かれは愛すべき人間だけど、絶対にあんな男を愛することはできない。……もしあれが愛人で、いつもあんな風にしていて人様に笑われるなら、耐えがたいわ」と一笑に附されるかれは、妻を喜ばせるには、あまりにも貧しく、そして家庭や育児をかえりみない「呆子」だった。妻との關係を描寫した一段は、「浮生」が「S大學」で如何に勤勉であつたかを述べたあとでこういう。

なのに給料といえは、全然充分ではなかった。かれが參考にする書籍は日々不足に感じられ、それは節約しようのないものであつた。他方、奥さんの方も、日々物入り——特に幼子のもの——が多く感じられていた。二人はしょっちゅうそうしたことで喧嘩した。……浮生は講義ノートを作るほかに、文章を翻譯してはそれを出版社に買ってもらつていたが、そうしていくばくかの金を得ては奥さんに喜んでもらおうと思つていたのだった。

だが、かれのそうした精一杯の氣遣いも、「いったん母親となるや見が狭くなり、いつもケチケチとして物質欲の満たされない」妻の「雯」の目には、不足であつた。「かれは奥さんと過ごす時間を恐ろしいまでに減らしていた」し、「可愛い子供」に對しても「冷淡」で、「子供をあやすことがあつても、嫌々なのがすぐにわかる」ほどだったからである。⁽⁸⁾

彼女には、「綺麗な取っ手と高價なレースの飾りのついた手押し車はおろか、粗末な籐とゴムタイヤの手押し車さえない」わが子が不憫でならなかった。なのに、「奥さんがデパートの帽子賣り場で飽かず眺めていれば、男の方は無理に引つ張つて来る、奥さんが可愛い子供のために吊り下げる揺籠が欲しいと何カ月も言っているのに、浮生はといえば、金が入ると、一言の相談もなしに、何冊かの本に換えてくるといった有り様だった。……だから、自分が愛しているのが彼女だけであり、彼女は永遠に自分の愛人であると浮生がどんなに自信を持つていても、雯の方はいつとも時々不満のようなも

のを感じないわけにはいかなかった」のは當然だったかもしれない。そこへ、慕爾鳴路彬興里三〇七號の施存統の家には、當時の黨員としては珍しく「いつも洋服を着」⁽⁹⁸⁾こなし、黨内で颯爽と活躍する張太雷が同居していたのだから、「ずいぶん人好きのする人」の王一知でなくても、かれに気持ちがあなびくのは當然のなりゆきというものである。張、王の逢瀬が上海の共產黨員に知れ渡るのに、さして時間はかからなかった。⁽⁹⁹⁾知らぬのは、お人好しの浮生こと、施存統一人のみだった。結局のところ、「革命」に献身する自分のことを「雯」はきつと理解してくれる、と「コミニストに屬する」「浮生」がいくら信じて、それは幻想にすぎなかったというわけである。

小説「韋護」は、「浮生」と「雯」のその後を書いてはいない。しかし、一九三〇年、すなわち王一知の出奔事件があったあとで書かれたこの小説は、大喧嘩をした「浮生」と「雯」の背後に、「ウェルテル」(すなわち人妻ロッセ)に戀してしまふ「若きウェルテル」の影を見ており、その後の二人の破局にもう一人の男性が關係していることをじゅうぶんに暗示するものであった。

施存統を「傷心痛哭、意氣消沈」に追いやった張と王の所行には、黨員の間でも倫理的非難の聲が絶えなかったという。⁽¹⁰⁰⁾むろん、施存統にとっても、「黨が與へた重要仕事を拋棄して、愛人の後を追つて、長沙・漢口・青島等へと赴いた」ことは、たとえその事情が如何なるものであれ、またそれがかりに噂であつたとしても、「無産階級の前衛闘士とは認め難い」⁽¹⁰¹⁾という指彈を招くものであった。そして、私生活上の問題から擴大したこうした「不面目」は、いったん風評となるや、「更に、上海大學教授たりし時、李季と社會學科主任を爭ひ、遂に李季を憤らせて上海大學を去らせ、上海大學をして停頓状態に陥らしめた」⁽¹⁰²⁾という形で、本來は無關係な公務上の落ち度に結びつけられ、その後のかれの黨内での立場を弱いものにしていったであらうことは、容易に想像される。

では、革命的共產主義者にとって、個人の戀愛は一體どのようなものでなければならなかったのだろうか。社會主義青年團より改稱した中國共產主義青年團の公開機關誌『中國青年』に掲載された「マルクス主義者と戀愛問題（通信）」（八二期、一九二五年七月一八日）は、共產主義者の持つべき戀愛觀を示している。すなわち、マルクス主義の信奉者であり、活動にも熱心な友人が、最近戀愛問題のために活動をかえりみないが、はたしてどうしたらよいものか、という「王永徳」なる讀者からの投書に對し、「無産階級聖人」の稱もあつた雑誌主編の惲代英はこう答えるのである。

君の友人が本當にマルクス主義の信奉者ならば、經濟制度が完全に改造されるまでは、うるわしい戀愛生活など有り得ないことを知っているはずである。マルクス主義者は決して戀愛に反對ではなく、一切を犠牲にして經濟制度の改造をはかり、すべての人がうるわしい戀愛のできることを願っている。しかし、マルクス主義者は、經濟制度を改造するために、時としてすべて（戀愛を含む）を犠牲にしなければならない。もしも活動において犠牲にしなければならないものをことごとく犠牲にできず、さらには何かの事物に戀々として逆にその人のなすべき活動を犠牲にするならば、その人は愚昧な小人に過ぎず、けつしてマルクス主義の信奉者と稱するには値しない。

この文章は、發表された時期からみても、また内容からみても、愛人出奔によつて黨務を怠つた施存統を念頭において書かれたものではないかと考えられる。少なくとも、一時上海の黨員、團員の格好の話題となつた施存統と王一知の一件を知っていた者は、この文章を施存統の「不祥事」と重ね合わせて讀んだはずである。實は、施存統は一九二〇年に「婚姻制度廢止」を論じたさい、これとまったく同じことを言つたことがある⁽¹⁶⁾のだが、今やその言葉は、そっくりそのままかれのもとに投げ返されることになったのだつた。いうなれば、かれはかつて机上で論じた尖鋭な舊倫理廢絶の議論を、もつとも衝撃的な形で自己體驗させられたのである。王一知が張太雷のもとに走つたとき、失意の底に沈んだかれが、はたしてかつての自論を反芻したかどうかはわからない。ここではただ、かれが、いかなる不條理をも甘受し、革命のために

は戀愛をふくむあらゆるものを犠牲にするという意味での鋼のごときマルクス主義者ではなかったということを言うに与えよう。社會改造と兩性の解放を二つながらに成就させんとした五四時期の理想は、すでに遠い彼方のものとなっていたのである。

愛妻王一知に去られ、失意に沈んだかれを力づけてくれたのは、黨員仲間の計らいで紹介された上海大學の教え子の鍾復光⁽¹⁷⁾であつた。一九二五年冬、かれは、おりから病床にあつた鍾復光を獻身的に見舞い、のちに多くの求愛の手紙を送る一方、みずからも鍾復光に合わせて名を「復亮」と改め、再婚の決意を示した⁽¹⁸⁾。翌一九二六年春、二人は結婚し、ついに終生の伴侶となつた。

3 「國共合作」下の上海で

私生活上のトラブルから一時、黨務を離れた施存統ではあつたが、「眞面目なコミュニスト」であるかれは、ほどなく黨活動を再開する。おりから勃發した五三〇運動において、かれが社會學系主任をつとめる上海大學は、一九二五年六月四日に工部局の巡捕によつて搜索、強制占據され、事態はかれが袖手傍觀することを許さなかつた。さらに、五三〇運動前後の上海での國共關係は、上海の國民黨が共產黨を排せんとする右派勢力の強い組織であつたこともあつて、日々緊張の度合いを強めており、理論的鬭争が避けられない情勢にあつた。理論家施存統の眞骨頂を示す時が來たのである。

上海大學の搜索、武装占據という事態をうけて、かれは、その翌日に上海大學を代表してそれへの抗議文を起草し、「いかなる暴威が自由を壓迫せんとも、いかなる暗黒が獨立を侵犯せんとも、我々師生は斷然一致協力してつとめてこれに抗し、決して退きはしない⁽¹⁹⁾」と決意のほどを示している。また、一時閉鎖という事態をうけて上海大學が刊行した『上大五

卅特刊』(週刊、一九二五年六月一日創刊、八月二六日停刊)には、ほぼ毎號にわたって、帝國主義打倒を呼號する文章を發表して勞働者のストライキを支持した。全篇これ激語に満ちているといつても過言ではないそれらの文章には、王一知を失つた悲しみのかけらも、またいかなる逡巡も見られない。だが、かれが理論家としての本領を發揮したのは、國家主義者(いわゆる『醒獅』派)への反駁であり、そしてなканずく、共產黨への敵意をあらわにした國民黨右派への駁論においてであつた。まずは、當時の上海における國民黨左右兩派の抗争狀況を瞥見しておこう。

國民黨にとって、廣東とならぶもう一つの重要據點は上海であつたが、一九二五年前後の國民黨上海執行部は、のちに「西山會議派」と呼ばれることになる右派によつて牛耳られていた。上海大學でいえば、國民黨右派の牙城は英文系であり、一九二四年秋に社會學系主任であつた瞿秋白の追い落としをはかつた(後任は施存統)のは英文系主任の何世楨(瞿秋白と痛み分けの形で同時に辭職)、そしてその背後にいたのは西山會議派の領袖として名を馳せた謝持、葉楚傖であつたと言われる⁽¹¹⁾。また、上海における國共の宣傳陣地である『民國日報』でも、その總編輯である右派の大物葉楚傖と共產黨系編集者とのあいだで、編集主導權をめぐる深刻な對立が進行して⁽¹²⁾いた。施存統も、共產黨の庇護者でもあつた邵力子のあとをうけ、同紙の副刊である『覺悟』欄の編集を擔當して⁽¹³⁾いたが、共產黨との嫌疑を受け、ほどなく卷き返に出た葉楚傖に排斥されることになる⁽¹⁴⁾。

こうした軋轢を決定的にしたのが、今や右派のイデオログと目されるに至つた戴季陶の『孫文主義の哲學的基礎』および『國民革命と中國國民黨』の出版と、それに續く「上海孫文主義學會」の旗揚げ、そして西山會議派國民黨中央による上海黨部の接收だつた。一九二五年の六月から七月にかけて相次いで刊行された戴季陶の二著の内容は多岐にわたるが、共產黨員の目には、「戴季陶のこうした理論および組織問題上の非難の目的はといへば、ただC P打倒にある⁽¹⁵⁾」と映つたことから明らかなように、「國民黨の最高原則」たる「純正三民主義」の徹底を掲げる戴季陶が三民主義の解釋權を獨占

することによって、國民黨の黨内黨と化している共產黨の「寄生政策」を痛烈に批判するものであった。そして、一二月には、その戴季陶の論や北京の西山會議に呼應して、「マルクス主義を信仰し、意は黨篡奪にある共產派」の加入を許さぬ「上海孫文主義學會」が結成され、つづいて西山會議派の中央黨部が國民黨上海執行部の事務所（環龍路四四號）を接收するにいたる（一二月一三日）。上海における國共對立は、すでに抜き差しならぬ状態になっていた。

これにたいして上海の共產黨中央は、陳獨秀、張國燾、瞿秋白がヴォイチンスキーの仲介で、西山派の孫科、邵元冲、葉楚傖と會談、全面的決裂を避けるための妥協をはかったが、組織的分裂の勢いを止めることはできなかった。すなわち、一九二六年の元日、惲代英ら共產黨系の人士によって、廣州の國民黨中央支持、上海の國民黨中央否認を掲げる「國民黨上海特別市黨部」の成立大會が上海大學で舉行され、かくて上海には國民黨上海特別市黨部を名乗る二つの團體が同時に存在するにいたったのである。ここにいたり、上海の國共分裂は誰の目にもあきらかとなった。兩者はそれぞれ新聞紙上に互いを否認する聲明を出し合ひ、三月一二日の孫文逝去一周年記念大會も、追悼に名を借りて左右兩派がそれぞれの正統性を訴える事實上の分裂開催となった。

こうした中、中共上海大學支部の責任者であり、また國民黨上海黨部の宣傳部宣傳指導幹事でもあった施存統に課せられた使命は、それら上海國民黨の右傾化にたいする理論的批判をおこなうことであつた。ここでは、かれが當時發表したいくつかの文章から二つをとりあげよう。そのひとつは、「戴季陶先生の中國革命觀を評す」（『中國青年』九一・九二期合併號、一九二五年九月一日）であり、いまひとつは、「中山主義研究がとるべき方法」（『中山主義週刊』一期、一九二五年一月二〇日）である。

前者において、かれは、階級闘争が戴季陶の好むと好まざるとにかかわらず必然的に發生するものであり、反帝闘争を内容とする國民革命の重要な構成要素であることを指摘する一方、國民黨が各階級の連合からなる革命黨であり、現に工農

階級の奮闘によって國民革命が進展している以上、また「容共」が孫文の遺志である以上、その最も革命的な分子である共產黨員を國民黨から排斥することはできないと力説した。その上で、かれは、戴季陶がいう「純粹の三民主義」によって黨内を強引に統一することは、孫文の掲げた「平均地權」「節制資本」の實現を逆に困難ならしめると訴えたのだった。

ただ附言すれば、施存統のこの戴季陶批判は、じつは苦澁に満ちたものだった。なぜなら、かれ自身がその文章で述べたように、ほかでもないその戴季陶こそが、かつてかれをアナキズムからマルクス主義に導いてくれた「一貫して敬愛する先輩」であり、かれの日本留學や國民黨入黨の後見人だったからである。かれが文章の冒頭で、二人の「個人的關係は、五、六年來、終始良好」なものであり、自分が戴季陶個人にたいして「何か不滿があるとは決して誤解しないでいただきたい」とわざわざことわり、全篇を通じて戴季陶を「先生」と呼んでいることに、かれの苦衷を察することができよう。

そして、上海の左右對立が熾烈になったあとでさえ、かれは戴季陶を、林森、鄒魯、謝持ら「反動派」とは區別して、「多くの誤りはあるものの、結局やはり革命的」な「右派」の「同志」と呼んでいるのである。⁽⁸⁾ むろん、それは施存統のまったく個人的見解ではなく、「左派」國民黨上海黨部の宣傳部門をおさえていた上海の共產黨組織の宣傳工作の方針でもあった。すなわち、戴季陶が西山會議派の猖獗をきわめる動きとは一線を劃していたため、かれをそれから引き離し、西山會議派の力を殺ごうというのが、當時の「左派」黨部の狙いだったのである。⁽⁹⁾ ただし、そうした組織戦略の思惑をこえた個人的親近感がかれと戴季陶のあいだにあったことはまちがいない。戴季陶が『孫文主義の哲學的基礎』の出版にさいし、施存統の意見を求めたことがそれをよく物語っているだろう。けだし、かれの「戴季陶先生の中國革命觀を評す」に見られる配慮は、いわゆる「戴季陶主義」に代表される右派理論にたいしては嚴然と批判しつつ、戴季陶個人を鞭打つことは控えるという施存統の微妙な心理をよくあらわすものだった。そしてそれは、右派の反共論を排しながらも、上海の西山派國民黨中央との全面的決裂をなんとか回避しようとしていた上海の共產黨組織の苦惱にあい通じるものでもあった。

といえるだろう。

上海の共産黨が、國民黨右派との決裂を回避しつつ、その反共論を封じようとするならば、そのよるべき論據は孫文三民主義に見いださねばならなかった。上海の國民黨右派がかれらの「三民主義」を盾に「共產派」の排除を叫んでいるとあれば、それはなおのこと避けては通れないことであつたはずである。施存統の「中山主義研究がとるべき方法」は、まさにそのために書かれたものだった。同論文は、國民黨右派による「上海孫文主義學會」結成の動きに對抗するために、上海大學の共産黨系師生が一九二五年一月一九日に結成した「中山主義研究會」の創立大會⁽¹⁸⁾での講演である。そのなかには、レーニンがマルクス主義を研究したような形で孫文三民主義を研究すべきであつて、カウツキーがマルクス主義研究を歪めたような形で三民主義を解釋してはならない、と述べる。かれの「カウツキーがマルクス主義研究を歪めた」云々が國民黨右派の三民主義解釋を指していることはいうまでもあるまい。この「中山主義研究會」の結成に如實にあらわれているように、國民黨に加入した共産黨員も三民主義に違背してはならない以上、かれを含む共産黨の側は金科玉條たる孫文の主義を自黨に引きつけるかたちで解釋し、その行動の正當性を強調することが求められたのである。

その意味では、かれが翌一九二六年三月一二日、すなわち孫文逝去一周年という時點で、國民黨上海特別市黨部（左派）青年部の刊行物である『總理週年紀念特刊』に、「中山先生の三大革命政策」を發表していることは注目に値する。なぜなら、判定者がいない以上、所詮泥沼に陥らざるを得ない孫文亡きあとの三民主義解釋の争いから一步踏みだし、積極的にかれの遺した重要政策を「三大政策」なりのスローガンに集約していくことは、國民黨右派からの攻撃に悩まされていた上海や廣東の共産黨にとって、その正當性主張のためにも、そして主導權獲得のためにも、なんとしても取り組んでいかねばならない急務であつたからである。⁽¹⁹⁾そして、施存統のその文章は「三大政策」を表題にしたものとしては、現在確認されるもののなかでは最も早い例なのである。そののちに廣東で登場した「三大政策」のスローガンが直接にこの施存統

の文章を受けて提起されたという形跡はないが、時あたかも、同じく國民黨右派の三民主義に名を借りた攻勢に直面して、廣東でも上海でも、それを打破するための共產黨員の苦心の營爲がなされていたことを知ることができよう。そしてそれは、共產黨員であると同時に三民主義を信奉する國民黨員であらねばならなかった施存統の苦心の營爲でもあった。

かれは、前述の共產黨系人士による國民黨上海特別市黨部の結成の當日には、寧波にあって同地の國民黨員大會に出席し、西山會議派の黨中央詐稱を激しく批判し、つづいて上海特別市黨部（左派）宣傳部の宣傳委員に就任する。むろん、左右兩派の暗闘がつづく上海大學において、かれに對する風當たりは強まる一方であった。瞿秋白、惲代英、鄧中夏といった歴戦の共產黨員が相次いで上海大學を離れたあとの一九二六年には、「共產派」の頭目と目されたかれにたいして、右派系の學生より公然と「施存統を打倒せよ」という聲があがったという。おりからかれは肺の持病が悪化しており、また上海を支配する孫傳芳によっても指名手配がなされていた。かくてかれは、一九二六年三月八日の上海婦女節大會での演説⁽¹⁸⁾と前述孫文逝去一周年記念大會を最後に上海を離れ、いったん郷里で靜養することになった。

四 「赤都」武漢

1 武漢軍校

郷里での靜養を終えた施存統は、いったん上海にもどり、つづいて一九二六年の秋に國民革命の本據地である廣州へ赴いた。⁽¹⁹⁾この廣州行は戴季陶の強い要請によるもので、當初はかれと連れだって歐州に遊學することが目的であった。中共中央もかれが戴季陶と出洋することに同意していたといわれる。⁽²⁰⁾だが、洋行を望んでいた戴季陶は、周圍の推學をうけい

れて廣州の中山大學校長に就任し、洋行を斷念、廣州に着いた施存統の歐州行きの話もそのあおりを受けて立ち消えとなつた。⁽¹⁸⁾

濕潤な廣州の氣候は施存統の身體には合わなかったようで、かれは上海にもどることを考えたが、再び戴季陶の慰留をうけ、戴の下で中山大學の政治訓育工作に参加することになる。⁽¹⁹⁾ 一九二六年一月に成立した中山大學の政治訓育部は、行政系統的には國民黨中央の直轄組織であり、主に三民主義教育を行う機關であつた。⁽²⁰⁾ 施存統は惲代英とともにその委員となり、「社會進化略史」と「中國國民黨の組織及訓練」の二科目を擔當した。⁽²¹⁾ 施が政治訓育部に籍をおいたのは、わずかにひと月ほどに過ぎないが、その間に同部の教科書である『中國國民黨の組織和訓練』を執筆、また公務のあいまを縫つて譯書『經濟科學大綱』（ボグダノフ原著であるが、日本語版「赤松克麿譯」）よりの重譯、新青年社、一九二七年一月）を刊行している。

北伐の銃後となつた廣州でも、國共兩黨の確執は激しさを増していたと思われるが、北伐の順調な進展はそれを上回るものがあつた。北伐の最前線はすでに湖北、江蘇、浙江へと前進しつつあり、國民政府自身も一九二七年初頭には武漢へ移動していた。國民革命の舞臺はすでに廣州を離れて武漢に移っていたのである。施存統に與えられた次なる使命は、その武漢に設立される武漢中央軍事政治學校（以下、武漢軍校と略稱）での工作であつた。かれを武漢に招聘することは、かれがまだ中山大學政治訓育部にいた一九二六年一月九日に、武漢軍校の政治科教務會議で決定されている。⁽²²⁾ かれが廣州を離れていったん上海にもどるのは一九二七年一月、夫人の鍾復光と生まれたばかりの女兒を伴つて革命の最前線たる武漢に赴任したのは二月はじめのことであつた。⁽²³⁾ この時、かれは武漢が自身の人生を大きく變える場所となることをまだ知らない。

武漢軍校とは、いわずと知れた黃埔軍校の分校であり、國共合作による國民革命に軍事、政治面の人材を供給するため

に一九二七年二月に開學した軍事政治學校であつた⁽²⁰⁾。學校は、その總責任者たる鄧演達（施存統夫妻は武漢到着後、しばらくの間、鄧のもとに寄寓した⁽²⁰⁾）以下、惲代英、周佛海らを各部門の責任者に据えていたが、施存統の屬する政治部の教官の多くが中共黨員によって占められていたように、實質的には武漢における中共の牙城であつた。施存統の職位は、當初は一政治教官に過ぎなかつたが、四月末には惲代英の後を襲つて政治總教官に就任⁽²⁰⁾、ついで五月には周佛海から政治部主任を引き繼いでそれを兼任し⁽²⁰⁾、まさに武漢軍校での中心的指導者となるにいたる。武漢軍校でのかれの活動は、教育工作、宣傳工作が中心であつたが、それはやはりかれの本領を發揮させるにはもつともふさわしいものだったらしい。演説上手であつたかれの姿は、この年四月の蔣介石の反共クーデターをうけて武漢で開催された反蔣大會での演説⁽²⁰⁾に明瞭である。

かれの武漢軍校での校務や黨務の實際の執務ぶりをうかがわせる資料は極めて少ないが、かの陳毅が中華人民共和國の外交部長の任にあつた一九六三年に、息子に語り傳えた革命教訓史の一段「賣名家施存統の墮落⁽²⁰⁾」はなかなか興味深い。かれは、まだ武漢軍校における施存統の下僚に過ぎなかつた一九二七年當時を振り返つてこう語っているのである。

一九二六年、北伐軍が武漢に達した時、黨はかれ「施存統」を武漢中央軍校に派遣して政治部主任に當たらせたが、かれはそれにはあまり満足していなかつた。一九二七年五月、わたしは黨委員會書記として軍校に派遣され、かれを知るようになった。……「わたしは武漢軍校の中共黨委員會書記の身分を祕匿したまま、表向きの仕事を割り當ててもらふことになり、惲代英は政治部の祕書が適當ではないかといった——引用者補」……施存統は當時、政治部の内部が複雑なので採用するのはむずかしいという言い譯をしたが、最後にはなんとか承知してくれた。その翌日、施存統は、祕書への採用では通らないので文書係にしようと言ひ出した。わたしは、革命の仕事なら何でも構わないと答えた。文書係と祕書とでは、それぞれ准尉相當と少佐相當なので、大きな違いがあるのだが、わたしは意に介しなかつた。

った。職につくと、その書記長はわたしに二日間、人名簿の筆寫をさせた。そこでわたしは施存統のところに行つて、これでは具合が悪い、一日中筆寫ばかりさせられては活動を進展させることなどできません、と訴えた。すると施存統はまたしても、わたしのところの組織科長は國民黨でもっぱらわたしを監視しているのだから、何ともできない、と言ひ逃れをした。だが實際には學校での左派の勢力は強大で、黨員、團員も多かったのに、かれはまだびくびくしていたのである。……〔武漢軍校の中共〕黨委員會では、惲代英はある毎にわたしに報告してくれたのに、施存統はそうではなく、政治部主任や共產黨の古參黨員という態度をひけらかしていた。

陳毅はこのほかに、施存統が葉鏞ら革命的人士の中共入黨を快く思っていなかったこと、陶希聖といった黨内の不純分子を過度に評價していたこと等々をとりあげるなど、甚だ辛辣である。むろんここに登場する施存統は、革命の試練をくぐり抜け、すでに功なった陳毅が息子に紹介した「變節」の教訓材料なのであって、そのマイナス面が強調されすぎている嫌いはある。だが、剛直をもつて聞こえ、恨み言とはこと無縁に見える陳毅をして、かかる言葉を吐かせるのだから、當時の施存統の幹部黨員としての態度には、それなりに尊大な風があつたのかもしれない。

2 出 陣

施存統がいささかの摩擦を引き起こしながらも、武漢軍校の實務に精勵していたころ、革命の都武漢をとりまく情勢は、激烈の度を加えていた。すなわち、上海、南京等での一九二七年四月の蔣介石による反共クーデターによって國民革命軍營内の分裂、つまり武漢と南京の對立は決定的となり、「赤い武漢」の國民政府は四面を敵對する勢力によって包圍される危機的状況に置かれていたのである。そして、こうした外からの壓迫のただ中にあつた武漢政權も、連日くりひろげら

れる労働者によるデモンストレーションや、街を埋め尽くさんばかりの革命ビラ、張り紙の過激な言辭とはうらはらに、深刻な内部對立を抱えていた。その典型的な例こそが、施存統と武漢軍校にとっての大きな試練となった湖北における夏斗寅の反亂事件である。

夏斗寅の率いる國民革命軍獨立第一四師は、武漢政府の支配地域である沙市、宜昌一帯にあって、本來は四川の敵對勢力である楊森部隊の東下を阻止するはずの部隊であった。それが、蔣介石の使簇をうけた楊森、および武漢政府麾下の一部將領と示し合わせた上で水路東下し、五月一三日に嘉魚に上陸するや共產黨の跋扈する武漢政府を討って「重建新政」することを宣言し、武漢めがけて進攻を始めたのである。五月一七日、夏斗寅部隊の先頭は武漢からわずか二〇キロほどの紙坊鎮に到達し、不意をつかれた武漢は恐慌状態に陥った。市中では銀元の兌換が停止され、恐怖にかられた市民が租界へ殺到したという⁽²⁰⁷⁾。武漢政府が頼みとする主力軍は北伐のために河南に展開中であり、いまさら武漢に呼びもどすことは不可能であった。かくて武漢の防衛はひとえに、武漢三鎮から急遽かき集められた葉挺の武漢衛戍部隊と武漢軍校及び農民運動講習所の師生からなる中央獨立師に委ねられた。「反蔣」運動における宣傳工作など、武漢において主に文筆と口舌によって活動していた施存統にとって、砲火の洗禮をうける機會がついにめぐってきたのである。すなわち、こうした混亂の渦中のさなかに、かれは周佛海から武漢軍校政治部主任の職を引き継いだのだった。「赤都」武漢を逃れた周佛海は、その経緯をこう述べている。

鄧演達は河南に行つてしまい、中央軍校も中央獨立師に改編されて出發の準備に追われていた。わたしはこの機に乗じれば逃げ出すことができると思い、そこで病氣にかこつけて施存統に政治部主任を代理してもらった。というのは、施存統は共產黨員ではあったが、わたしとは個人的に關係がよく、またかれは一般の共產黨員とはちがって比較的明朗で、かつまた穩健だからだった（共產黨はかれのことを呆子と呼んでいた——原注）。共產黨は早くから、比較的

重要な各軍の政治部主任には、みな共產黨員を就任させようとしていたので、わたしは施存統に代理をしてくれるよう頼んだのである。⁽²⁰⁸⁾

五月一八日夜、武漢軍校に動員令がくだり、臨時編成の中央獨立師の先發部隊がただちに武漢を發ち、翌日の午前一〇時には施存統を主任とする中央獨立師政治部の全員と女生徒を含む宣傳隊が軍校の所在地である兩湖書院を出發してそれぞれ南下した。⁽²⁰⁹⁾ 政治部の教官の中には、出發にさいして知人に遺言めいた言葉を遺した者や、周佛海のように動員令のさなかに「敵前逃亡」した者もいたくらいであるから、命令に従って前線へ赴くことが相當の覺悟を要したであろうとは容易に推測できる。施存統の行動は、その意味では、半ば死を覺悟したものであったかも知れない。

訓練不十分のまま初陣に臨んだ中央獨立師は、夏軍と砲火を交えるなかで一部に味方への誤射などの失態はあったものの、葉挺麾下の部隊と協同しておおむねよく奮戦し、戦意の振るわない反亂軍を撃退した。それは、ある意味で死の覺悟をもって出陣したにしては、あまりにあっけない勝利だった。武漢政府軍は二〇日には賀勝橋を、二一日には咸寧をそれぞれ奪回し、武漢の當面の危機は去った。施存統率いる中央獨立師政治部は、その後ひと月ほどのあいだ、夏軍を掃蕩する主力軍の後を追う形で、その蹂躪をうけた咸寧、蒲圻、嘉魚、新堤、沔陽の諸縣を巡回し、革命宣傳工作と農民運動等の善後處理にあたることになる。⁽²¹⁰⁾

長年もっぱら机上の革命家に甘んじてきたかれにとって、革命運動の經驗不足を補って餘りある情熱と正義感をもった男女の學徒兵と共に農民運動の實際を目の當たりにすることは、新鮮な體驗であつたことだろう。政治部所屬の若き學生達は、炎天下の行く先々から現地での活動を行軍日記風に仕立てて武漢に寄せているが、かれらの目に映った指導者施存統は、ユーモアを交えた訓辭で男女學生の戀愛談義を戒め、革命への獻身を求める實直な人であり、また執務室の入りに仁王立ちして遅刻者の部下に一喝を浴びせる嚴格な指導者だった。⁽²¹¹⁾ 政治部が折々に發行したビラの一字一句にさえ、施主

任は検討を怠らなかつたと伝える政治部學生の手記⁽²⁴⁾に、かれの謹嚴な人となりと當時の潑刺たる活動のさまがうかがえよう。

だが、そのひと月あまりの地方巡行の中で、施存統の目に深刻な問題として映つたものは、「マルクス學說に反對し、庇を借りて母屋を乗つ取る共產黨を打倒せよ」などといった張り紙を残していつた夏斗寅軍の暴虐の名残⁽²⁵⁾もさることながら、むしろ當時、武漢政府の「赤化」の證左としてさかんに喧傳され、かつ武漢での國共對立の焦點ともなつていた革命運動の「過火⁽²⁶⁾」の實態だった。

すでに、劉少奇が一九三七年に、大革命當時の武漢の勞働運動の激化を振り返って、

「勞働者は」企業を倒産させるという要求を掲げ、賃金を驚くべき水準に引き上げ、自主的に勞働時間を一日四時間以下に短縮していた（名目上は十時間以上であつたかもしれないが）。勝手に人を捕まえては法廷や監獄を作つたのみならず、汽船や汽車を臨檢し、勝手に交通を麻痺させ、工場や店舗を沒收、分配していた。こうしたことは、當時にあつては比較的ありふれたことであり、かつ極めて普通のことだった。勞働組合は第一の政府であつて、最も力があり、命令がもっとも行き渡る政府だった。その權力は時として正式の政府を上回つた⁽²⁶⁾。

と述べてその「左」傾を批判したように、武漢はすでに無秩序な勞働者の天國と化していた。そして、農村においても、「いわゆる土豪劣紳は、往々にしてその姓名を問われぬまま、高帽子をかぶせて街を引き回された。そして、その場で人民裁判にかけられてただちに銃殺されることもあつた⁽²⁷⁾」ばかりか、農民協會の恣意的な土地沒收が横行していた。低額、低率ながら佃租と債務利息の支拂を確認した共產黨第五回大會（一九二七年四月～五月）の「土地問題議決案⁽²⁸⁾」は、「小作料や利息の減額も農村において大きな問題ではなくなっている。地方によっては小作料や利息の不拂いに踏み切つたところもある⁽²⁹⁾」という現實を前にして、空文と化していたのである。いわんや、その共產黨の土地問題解決案にさえ難色を示

す武漢の國民黨首腦の目に、農村の激動が共產黨のたきつけた「過火」と映ったのも當然であつた。

當時、武漢にあつて『漢口民國日報』の編集にあたつていた茅盾は後年、當時を振り返つてこう述べている。

ちまたに喧傳されていたいわゆる「過火」行爲について、我々はそれを信ぜず、敵の流したデマだと思つていた。ただ、いくつかの風説には懸念もあつた。例えば、農民の家にまつられている先祖の位牌が叩き壊されているとか、女性髪を切られているとか、北伐軍の軍官の家族がつるし上げを受け、處刑されているとかである。⁽²⁰⁾

茅盾こと沈雁冰の編集していた『漢口民國日報』はそうした懸念を打ち拂うかのように、連日湖北農村での農民運動の「進展」を報じていたが、施存統がそこで見たものは、武漢での「共產黨指導者の報告に大きな疑問を抱かせ」る「民衆運動の幼稚さと誤り」が横行する現實だつた。農村をまわつたひと月ほどのあいだ、施存統の精力は、「左傾の小兒病を批判」した同行の黨代表惲代英（五月下旬に歸漢）とともに、もっぱら農民協會の行きすぎとその混亂状況を是正することに費やされたといつてよい。だがそれは、狂熱とどまる所を知らぬ現地農民協會員とそれに同調する一部の黨幹部の反發を買うことを意味した。當時施存統の祕書として地方に同行し、軍法處長を任されていた陶希聖（當時中共黨員）は「當時、施存統が軍校の政治部主任を接任していた。かれはわたしを祕書に任命し、主任の職務を代行させた。かれは軍に従つて、嘉魚縣で政治工作を指揮したのである。かれも、一部の農民運動の誤りと罪行を糾したが、同時に「わたしと」同じように、「軍閥」だと告發された⁽²¹⁾」と回想している。

この「革命」の實體驗が、かれの國共合作のあり方にたいする疑念の大きな契機になつたとは、かれ自らが認めており、疑問の餘地のないところだろう。武漢において國共の合意が形成されていないがゆえに、農民運動の様々な「過火」が共產黨の差し金と見られ（現に農民協會指導の任に應ずるものは中共黨員においてはかにはなかつた）、ひいては武漢政權の立場を危ういものになっている。かれの見所、それこそが國民革命の危機の本源であつた。かれはこの後、それまで抱い

ていた國共兩黨にたいする以下のような見方をさらに確信するにいたった。かれはいう。

廣州の中山大學や武漢中央軍事政治學校で働いていた時、多くの青年が國民黨は組織が良くなく訓練に缺けていると
いって、共產黨に加入できるよう紹介してほしいとわたしに求めてきた。わたしはそのたびにそれを斷り、かれらに
こう言ってやった。もしも國民黨が良くないなら、我々國民黨員は一人一人がそれを良くするように責任を持つべき
である。中國の目下の革命は一個の強大な國民黨を必要としているのであって、我々黨員は絶対に消極的な態度をと
ってはならない、と。さらにわたしは、再三にわたってかれらに革命における國民黨左派の位置の重要性を説き、か
れらが左派の黨員となって左派勢力を團結させるよう勸告した。⁽²²⁵⁾

この言は共產黨員としては明らかに當を失したものだろう。現に、當時武漢軍校の一女生徒であり、後に矛盾『虹』の
モデルともなったジャーナリストの胡蘭畦は、その回想録のなかで、軍校在學中に中共入黨を果たせなかったことについ
て、「指導員の鍾復光〔すなわち施存統夫人〕が一度わたしと話をしてくれたが、彼女はわたしに國民黨の新左派に加入
するよう勧めたのだった。かくしてわたしの入黨話もこれ以後立ち消えとなったのである」⁽²²⁶⁾と恨みがましいことを言っ
ている。

しかし、國共合作がそもそも「容共」を掲げて開始されたものであり、共產黨員たる者は國民黨員の名の下で活動しな
ければならなかった以上、そして國民黨「左派」との合作の堅持がコミンテルンからの至上命令であり、それからの離脱
が許されていなかった以上、共產黨の國民黨への働きかけが、原則の上ではあくまで「左派」の育成とその「左派」のさ
らなる左傾への誘導という域に止まらざるを得なかったのも事實なのである。共產黨が國民黨にとって代わることは許さ
れなかった。國民黨の「左派」さえしっかりしてくれば、という思いは一人施存統のものだけではなく、國共合作の貫
徹を繰り返し嚴命するスターリン・コミンテルンの意向でもあったのであり、そしてその命を實行するよりほかなかった

陳獨秀ら中共中央の切實な願いでもあった。問題はかれらが期待した國民黨の「左派」なるものが、一向に確立されなかった點にこそあったのだ⁽²⁷⁾。施存統の苦惱もつまるところはそれに起因していたといつてよいだろう。

かれがひと月あまりの轉戦を終え、中央獨立師とともに武漢に歸還したのは、六月下旬であつた⁽²⁸⁾。しかし、かれらを迎えた武漢はこの時、すでにひと月前にかれらを歡呼の聲のなかに送りだした武漢ではなく、かれらを待っていたのは中央獨立師の解散、ならびにその母體である武漢軍校がまもなく閉校されるという知らせだ⁽²⁹⁾。かれらが南方の諸縣を回っているあいだに、共產黨内では勞農運動の抑制を主張する陳獨秀ら黨首脳とそれに異議を唱える瞿秋白、毛澤東らとの間で激しい意見對立が進行していたのみならず、武漢の國共關係そのものが抜き差しならない破局へ向かっていたのである。以下に五月中旬から六月にかけての國共關係を一瞥しておこう。

共產黨は國民黨による「過火」批判がエスカレートする中、夏斗寅の反亂の直後に、公開の文章において、國民黨農民政綱の遵守による農民運動の「過火」の是正、および勞働組合の政治ストの自肅などを打ち出す一方、「中國共產黨は國民政府と共同歩調をとることを誠心より誓うとともに、中等階級との同盟を維持し、中等階級の利益を保障することを嚴かに聲明する⁽³⁰⁾」として、國民黨にたいする讓歩を通じて懸念に國共關係を維持せんとしていた。しかし、その一方で内部通達においては、「目下の情勢により國民黨の内部には階級分化が生じている。共產黨はこの過程を加速させると同時に、プチブル左派を取り込まねばならない。……それぞれの「左派軍閥」領袖間の矛盾を充分に利用すると同時に、革命は自己の武装力を創造しなければなら⁽³¹⁾ない」として、國共合作の重大原則をこえる姿勢も同時に見せていたのである⁽³²⁾。いくら共產黨が「左派」と呼ぼうとも、「容共」を前提とする國民黨側が警戒感を募らせるのは當然であつた。そして、國民黨によるボロジン解任（六月一七日）、馮玉祥の反共聲明（六月二二日）などの事態が進行していた中、六月下旬にコミンテルン代表のロイ(M.N. Roy)がコミンテルンの「五月指令」(①土地革命「下からの土地沒收」の實行、②武漢政府を改

組し、國民黨中央委員會に農民・労働者出身の指導者を参加させること、③中共黨員二萬、労働者・農民五萬の武装による独自の軍創設、④國民黨左派を長とし、共產黨が指導する革命法廷の設立、など）を汪精衛に見せるという行動に出る（235）
 におよび、武漢の國民黨は「分共」のための格好の名分を得ることになった。漢口駐留の三五軍軍長何鍵らが反共宣言を發表して労働組合を封鎖し、労働者糾察隊が自發的に武装を解いたのは、それから間もなくのことである。施存統率いる中央獨立師が歸ってきたのはこうした騒然たる武漢——すなわち當時武漢にあったロシア人バクーリンが日記に「どんどん南京のようになっていく」（236）と記した武漢——であった。

3 離黨——「悲痛の中の自白」

農村を回る中で抱いた國共關係破綻の豫感が、武漢において現實のものとなりつつあるのを見た施存統に、一つの打開策を提示したのは、名うての國民黨「左派」鄧演達であった。武漢にもどった施存統は、中央獨立師および武漢軍校の善後處理を検討するためにも、同校の責任者であった鄧とただちに話し合つたと見られるが、その中で鄧がかれに對して打診したのは、革命指導權の統一と革命勢力の結集を圖るための國民黨の第二次改組と共產黨組織の解散、および非資本主義への路を前進するための具體的綱領の確定という衝撃的な提案であった（237）。從來の鄧演達研究は、武漢政府時期のかれを一貫した國民黨「左派」とみなし、國民黨による共產黨排除に極力反對したことのみを強調している。しかし、武漢の國民黨の「分共」がこの時すでに秒読み段階にはいつており、共產黨の政策上の讓歩のみでは「分共」に齒止めがかからないことが誰の目にも明らかになっていた以上、かれが單に國民黨に向かつて「分共」反對を主張するのみならず、共產黨側にたいしてもその解黨をふくむ重大な決斷を求めたことは、眞摯な政治家として當然の判斷だっただろう（238）。そして、假

に共産黨がこの條件をのんだ時に國民黨の中央が第二次改組に踏み切れるだろうか、という施存統の問いにたいし、この時の鄧演達は、中央委員の多數がその提案に乗るだろうという讀みを示していた。⁽²⁹⁾

鄧の意見にたいして、施存統はただちに賛同した。かれによれば、現時の最重要課題は黨利、黨略をこえた國共兩革命勢力の分裂回避であり、「客觀的にいつて共産黨の存在が國民黨左派の發展を阻害している」以上、また湖北の農民運動の混亂を實見したかぎり「共産黨の名前は内地、特に鄉村では掲げられないばかりか、多くのわけのわからぬ誤解とデマを招くだけで、革命の進展を阻害しかねない」以上、「共産黨という看板は犠牲にできないわけではない」⁽²⁴⁾のだった。かれはいう。

わたしは黨というものが一種の手段であり、目的ではないことを承認する。我々は革命のために黨を組織し、民衆の利益のために黨に加入するのであって、決して黨のために革命をするのではなく、また黨のために民衆を抱き込むでもない。中國の目下の革命——國民革命において、革命の指導權を中國共産黨が統一することは不可能であり、中國國民黨のみがそれを統一し得るのである。⁽²⁴⁾

當時の共産黨内において、そして後世の革命史研究においても問題の焦點であり續けた國共合作における共産黨の指導權は、かれにおいてははっきりと放棄、あるいは否定されていた。ただし、さきに紹介した共産黨の黨内外にたいするあい矛盾する政略においても見てとれるように、共産黨が國民黨内にとどまって「黨内合作」を堅持し續けることとその中で指導權を握ることの關係は、コミンテルンの指令において理論的にいくら辻褄があつていたとしても、現實上、限りなく二者擇一に近いものであつたこともまた嚴然たる事實なのである。その意味ではかれの見解は、一面、共産黨員としての主體性をまったく喪失した論であるとの批判を免れがたいとしても、國共黨内合作の維持による革命戰線分裂回避を至上課題とする限り、それが極論であつたとしても、やはり提起され得べき性質のものだった。そして、むしろかれと鄧演

達が中共解黨を口にせざるを得なかったことにこそ、武漢政權最末期の國共兩黨をめぐる危機的状況と、さらにはさかのぼって、黨内合作という國共合作の枠組みそのものが當初より内包していた限界點を看取することができるのである。

だが、かれらにとって起死回生の策に見えたその苦澁の選擇は、到底現實のものとはなり得なかった。施存統は鄧との話し合いののち、ただちにその考えを中共總書記である陳獨秀に伝え、黨内で検討するよう求めたが、陳獨秀はその破天荒な意見に對して、中共はコミンテルンの支部である以上、中國一國で判斷を下し得る問題ではないとして、それを一言のもとに却下した。⁽²⁴⁾ 黨創立以來の古參黨員とはいえ、當時黨の中央委員ですらなかった施存統の意見が、陳獨秀ら黨中央を動かすことは不可能であつただろう。ましてや、その意見が黨組織の解消という禁忌に屬するものであればなおさらである。

また他方、施存統が頼みとした鄧演達のほうも、當時、急速に國民黨内での影響力を失っており、いくらかれが國民黨中央の「第二次改組」に自信を示そうとも、その實現は難しかった。すなわち、六月二〇日の國民黨中央政治委員會會議において、郭沫若を第四集團軍第二方面軍の黨代表に任命するよう求めたかれの提案は汪精衛の反對にあつており、⁽²⁵⁾ 武漢政權が頼みにした馮玉祥も、鄧が「共產黨の道具になっている」ことを理由に、武漢にたいしてかれを「出洋」させるよう強く求めていたのである。⁽²⁶⁾ かくて鄧演達は、六月二九日の國民黨中央政治委員會會議に出席するのを最後に公式の場から姿を消し、まもなく施存統にも告げぬまま、祕密裡に武漢を離れたのであつた。

七月にはいり、共產黨の度重なる讓歩にもかかわらず、國共分裂は最終局面にはいった。武漢軍校は六月三〇日をもつて中央獨立師の名稱を取り消され、もとの軍校組織にもどったが、中共黨員の多い同校は武漢の反共派にとっては喉に刺さったトゲであり、その解體は避けられなかった。武漢の國民黨が正式に共產黨との決別を宣言することになる七月五日の早朝、武漢軍校には突如野外演習の命令がくだる。⁽²⁷⁾ その動員令は、演習を名目にして學徒兵を誘い出し、一網打盡に

せんとした唐生智の陰謀であつたが、「左派」の將領として唐と對抗關係にあつた張發奎が葉劍英を通じてそれを掣肘したため軍校學生は九死に一生を得、最終的には張軍の教導團に改編されたと言われている。⁽²⁴⁾ 内容は不明ながら、施存統が張發奎とともに學生に激烈なる演説をし、激昂のあまり昏倒してしまったと言われているのはこの時のことである。⁽²⁵⁾

この間の経緯は今日でも不明な點が多く、施存統が如何なる意圖で、そしてどの程度まで軍校の改編にあずかつていたのかはわからない。そもそも、中共中央にしてからが、武漢政府の「分共」宣言をうけて幹部連が次々と姿をかくすなど、混亂のただ中であつたのであつて、その中央が軍校の處理にかんして施存統に明確な方針を傳えていたとは考えにくいのである。當時、わけもわからぬままその臨時演習に動員された學生の一人は、「その間、惲代英や施存統といった指導者は何度も我々に演説をしたが、終始我々に時局の真相をあかしてはくれなかった」と述べているが、かれら軍校の指導者すらも明確な方針をたずねあぐねていたというのが本當のところではなかったか。しかし、當時の張發奎率いる第二方面軍が多くの共產黨員を有し、少なくとも八月一日のいわゆる南昌蜂起の直前までは中共がもっとも期待を寄せる軍隊であつたことは紛れもない事實なのであり（南昌蜂起直前の中共内の激論は、まさに張發奎に信をおくか否かをめぐって戦わされたものだった）、施存統がかかわつた軍校師生の張軍への改編は、なお「國民黨」の看板をおろそうとせず、何とか張軍を取り込もうとしていた共產黨中央の意向を何らかの形で實現しようとしたものではなかったかと推測される。⁽²⁶⁾ 少なくともそれは、周恩來が後年、「軍校は張發奎によって解散させられてしまった」と總括したような單純なものではなかったことは確かである。

七月一八日、武漢軍校の第五期生の卒業式が舉行され、施存統とともに軍校指導の任にあつた惲代英は、そこでの講話を最後に慌ただしく地下にもぐつた。施存統も、軍校教官の未拂い分給與の分配などの殘務整理を済ませ、軍校解散（胡蘭畦によれば、七月二五日⁽²⁷⁾）の前後に、身分を隠して武昌に潜伏した。これ以後、かれは共產黨との組織的連絡を絶つこと

になる。⁽²⁵³⁾ ちなみにこの時、病氣のかれは、一歳に満たない女兒と身重の妻鍾復光、そして年老いた鍾の母をかかえていた。⁽²⁵⁴⁾ かれは、病氣療養につとめたその後のひと月ほどの間、「外界とは全く關係を絶った」⁽²⁵⁵⁾と述べているが、實際には、李漢俊やかつての下僚であつた陶希聖ら武漢に残つた國民黨の「左派」系人士と接觸を保つていたようである。⁽²⁵⁶⁾ 陶希聖はいう。わたしは中央日報副刊に原稿を送り、「分共のち、今まで通り革命をする」というスローガンを打ちだした。それに眞つ先に呼應したのは施存統だつた。かれは共產黨の「八七會議」のち、肅清された一人である。わたしは、かれに福壽菴「武昌にあつた陶の住まい」に話にくるよう誘つた。かれはそこではじめてこう話してくれた。「共產黨はこれまで君を入党させることはしなかったが、それは左派として残しておき、黨外でかれらと合作させようとしていたのだ」。かれはさらに言つた。「もし、共產黨が君に入党を迫っていたら、君の今の命がどうなっていたかはわからない」。わたしはその話を聞いて、背筋が寒くなつた。⁽²⁵⁷⁾

かれがこのほかに、武漢において如何なる人と接觸し、如何なる活動をしていたかはわからない。おそらくは療養のかたわら、なおも革命勢力再結集の最後の可能性を模索しつつ、新聞紙上に喧傳されていた南昌蜂起軍敗走の報に苦悶を重ねていたはずである。そして、南昌蜂起軍がなおも「國民黨革命委員會」の旗を掲げたまま江西省南部を轉戦していた八月三〇日、かれはついに、「病床でのひと月あまりの慎重な考慮を重ねたのち、わたしはついに中國共產黨を脱退することを決定し、一人の單純な、そして革命的な國民黨員たらんと決意した。しかし、これはわたしにとって、實に沈痛な決意である」という一節で始まる「悲痛の中の自白」⁽²⁵⁸⁾なる離黨聲明を武漢の『中央副刊』に發表した。

離黨にあつたつてのかれの心情は、「悲痛の中の自白」というその題名が示すごとく、悲壯なものであつた。いうまでもなく、かれこそは共產黨の齡に等しい黨歴をもつた古參黨員であり、「自ら數年にわたつて共產黨員の看板を掲げ、その看板に對してすでに絶ち難い感情」を持つていたからである。そのかれがあえて共產黨を去る決意をしたのは、先に紹介

した鄧演達の中共解體論にかれが共鳴したその理由からであった。すなわち、かれによれば、①國民革命の分裂をくい止め、革命指導權を統一するためには、共產黨の組織を犠牲にして強力な革命的國民黨を組織するよりほかなく、②事實上、共產黨の存在が國民黨左派の發展を阻害しており、③また、特に農村においては共產黨の名が「過火」を助長し、無用な誤解とデマを招いており、逆に革命の進展を阻んでいる以上、國民革命の繼續を第一義とするならば、共產黨はその看板をおろし、革命的な國民黨を再組織するよりほかないのだった。

共產黨を離黨し、國民黨にのみとどまることを決意した以上、かれのよるべき政治規範は孫文の三民主義以外にはありえないことになる。かれは國民黨のあるべき姿を、「一階級の黨ではなく、全中國のすべての被壓迫民衆の共同の黨」として、「總理のいうところの「國際平等」「政治平等」「經濟平等」という非資本主義の三民主義社會を實現する」ものと規定し、その上で孫文三民主義と自身が奉じるマルクス主義の關係を次のように説明している。

わたしが子細に検討した結果によれば、總理の三民主義は、けっしてマルクス主義に反對するものではない。マルクス主義全體に反對する理由というものをわたしは今に至るまで見いだすことはできない。三民主義は反帝國主義であり、反資本主義であるということができるのであり、それが反マルクス主義であるということとはできない。中國共產黨は過去において確かに誤りがあったが、その誤りはマルクス主義を應用したことによる誤りなのではなく、マルクス主義をよく應用できなかったことによる誤りなのである。我々は、中國共產黨に反對するからといって、やみくもにマルクス主義に反對したり、あるいはマルクス主義研究を禁止したりしてはならない。わたしの見るところ、マルクス主義こそはもっとも客觀的事實を重視しているのであって、社會問題の解決のためには事實を重んずべきであり理想を重んじてはならないという總理の言との間に別には違いはないのである。

國民革命時期のかれにとって、共產主義者たる自己の奉ずるマルクス主義と國民黨員たるものの信條である三民主義と

の接合が如何に重大な問題であり續けたかを知ることができるであろう。そして、それは一人施存統にのみのしかかっていた問題ではなかった。すなわちそれは、單なる便宜として國民黨員の假面をかぶった者でないかぎり、すべての共產黨員にとつても何らかの形で解決されねばならない難題だったのである。共產黨員にとつて國共の黨内合作は、單に組織上の内包關係を意味していたのみならず、三民主義という名の犯しがたい思想的桎梏を受け入れることを餘儀なくさせたのだった。⁽²⁹⁾そして、その桎梏は、眞摯な共產黨員が國共合作の原則に忠實であらうとすればするほど、かれらを悩ますことになったであらう。

その意味では「悲痛の中の自白」は、どこまでもその原則に忠實たらんとした文章であつた。すなわち、共產黨からの離黨という語句さえ除けば、この文章の理論的根幹は國共合作初期の共產黨の公式見解をそのまま踏襲したものにはかならないのである。施存統のいう三民主義の遵奉、國民黨の主導權の承認、一切の非抑壓階級の連合による反帝國主義運動等々は、いずれも國共合作の出發時點で共產黨の側が確認した原則ではなかつたか。⁽³⁰⁾さればこそかれは、この離黨聲明から十年ののち、自身の離黨を後悔しながらも、なお「一九二三年に共產黨が正式に國民黨との合作を決定してから一九二七年に國共兩黨が完全に分裂するまで、わたしは國共兩黨の合作をもつとも忠實に最後まで擁護した人間であつた⁽³¹⁾」と自負してゆずらなかつたのである。つまり、かれの「悲痛の中の自白」が示唆するところのものは、國共合作の當初の精神を堅持することが一九二七年においては、共產黨からの離黨を意味したということであらう。國共合作のもとに勢力を擴大し、國民黨と革命の主導權を爭うまでに成長した共產黨の地位とその革命理論は、一九二七年にいたつてついに國共合作の當初の枠組みを超え、そしてその枠組みをあくまで固守せんとした施存統の思惑を超えたのである。その結果、理論家たるかれが苦惱のはてにたずねあてた出口は、政治的には共產黨からの離黨であり、思想的にはマルクス主義を護持した上での三民主義への回歸、あるいは三民主義への歸順だつた。

國共分裂ののち、國民黨による苛烈な彈壓を受けた共產黨は、國民黨を不倶戴天の敵とする立場から孫文三民主義にたいするそれまでの見解を一變させ、

孫中山の説には多くの衝突や矛盾があるのみならず、その中には革命的意義のある中身はごくわずかしき見いだせない……かれ自身の一生は、そもそも東西の新奇な學説をいくつか適當に寄せ集めて民衆をだましただけに過ぎず、さらにかれは、知ってか知らずか、いたるところでその封建落後の思想を表出させている。⁽²⁸⁾

と激しく批判するにいたるが、それは、國共合作時點で共產黨が確認した原則をあくまでも貫いたことをもって誇りとする施存統が受け入れられるものではなかったであろう。かれにとっては、共產黨の側、あるいは國民黨の側からもなされるであろう「あらゆる譏笑と謾罵を勇氣と堅忍をもって受け入れる」ことが、かつて共產黨員として國共合作を高唱した者のけじめであった。⁽²⁹⁾

本章を結ぶにあたり、中國共產黨における「離黨」、あるいは「轉向」問題について一言をつけ加えておこう。しばしば取り上げられることだが、一九二二年七月の中共第一回大會に顔を揃えた十三人の中共黨員のうち、四九年一〇月一日に天安門樓上で「開國典禮」を見届けることのできた者は、わずかに毛澤東と董必武の二人に過ぎない。この一事のみをもつてしても、その間に中共黨員がたどった曲折の道のりと拂った犠牲の大きさを推し量ることができよう。ちなみに毛澤東、董必武をのぞいた十一人のその後をたどれば、共產黨の革命運動に殉じたもの三名、病死一名、そして共產黨を離れたものは七名、すなわち一大代表の半數を超える。

當然といえは當然だが、これまでそれら離黨者にたいする言及は黨史上の挿話とはなり得ても、その離黨、「轉向」そのものが研究の對象とはなつてこなかった観がある。日本の『共同研究 轉向』に類する研究が中國共產黨員を對象にし

て成立していないことは、「轉向」ということ自體が思想問題として考えられていないことに由來しているといえるだろう。⁽²⁶⁾ いうなれば、中國の共產黨は革命事業をまがりなりにも達成したため——つまりは、壊滅—再建をくりかえした戦前期日本共產黨とは異なり——、黨員の離黨や「轉向」、「叛變」は、出世主義、日和見主義、あるいは黨内闘争での敗北等の「不純」なる個人的資質に還元され、思想上のテーマとして獨自に扱われることはきわめて少なかったのである。だが、中共一大の十三人のうち半数以上がその後離黨しているという事實を前にするとき、かりにその全てが理論的思索の末に離黨したとはいえないにしても、かれらの離黨の背後にあったものを探る試みは、やはり避けては通れない問題なのではないだろうか。そして、中共において最初の大規模な離黨現象が起こったのは、まさに施存統の離黨した一九二七年であつた。

本稿で取り上げた施存統は、あまたの中共離黨者の一例にすぎない。したがって、そのみをもつて、離黨者一般の思想問題にまで敷衍することが危険であることはいうまでもあるまい。だが、中共を革命事業のすべての中心とする從來の黨史一般の暗黙の了解事項や、「離黨」とはすなわち「轉向」であり、さらには「叛變」であるとする正統觀念を、一度かたわらに置いてみるならば、そこには「離黨」に關するまったく別の思想史的地平が見えてくるのではあるまいか。

魯迅はかつて三〇年代において、中國に「轉向」の「自首」をする者が多いのは、中國の「淫刑」が他國に比べて甚だしいからだと言へたことがある。⁽²⁶⁾ むろん、それは事實の一面を伝えるものではあろう。身體の抹殺をとまなう國民黨の苛烈な反共彈壓が、共產主義者の「轉向」を生んだことはたしかである。だが、施存統の離黨は、過酷な反共彈壓に屈した逃避ではなく、また國共分裂當時、盛んに新聞紙上を賑わした末端黨員の離黨聲明の常套句たる「マルクス主義の盲信」「共產主義に對する無知」を理由とする輕薄なものでもなかった。その離黨は、かれがそれまで研究してきたマルクス主義にのつとつた理論的思惟によるものだったのである。

まず確認しておかねばならないのは、施存統がその離黨宣言のなかで表明したのは、あくまでも「暴動主義」に轉じた共產黨よりの離黨であつて、それまでの信念の放棄ではなかつたということである。マルクス主義が「眞理」であること、國共合作による國民革命の推進がマルクス主義に照らしても矛盾のないこと、そして孫文三民主義を革命的に解釋することによつて、革命における非資本主義的發展を目指すことが可能であることも、かれはそれまでの信念を改めてはいなかつた。この考えを堅持することが最終的に離黨に行き着いたとすれば、「轉向」したのはむしろ中共の側であつたということも可能なのである。周知のように中共が最終的に國民黨の旗を降ろすのは、武漢の分共の二カ月も後の一九二七年九月のことであり、かれが離黨聲明を發表した八月末の時点において、中共はなおも「國民黨」の姿を借り、「國民革命」における正統性護持の立場から暴動路線を實行していたのであつた。つまり、施存統の選擇は、中共の主體性の放棄という一點を除けば、それまでの中共の國民革命にかんする原則論を共產黨以上に堅持したものでしたのである。むしろ、中共の主體性の放棄の是非こそが「革命的」か否かを分かつ究極の分岐點であるとの見解もありえよう。だが、變轉つねない黨中央の政策にあくまでも忠實たることをもつて「革命的共產主義者」の指標とする通念は、その後に形づくられた呪縛であることを看過してはならない。その呪縛が、中共による革命成就という結果によつてさらに犯し難いものになつたこととは言うまでもなからう。かれは後年、確かにおのれの離黨を「悔悟」するに至るが、かれをして「悔悟」の念を生じせしめたものは、離黨そのものと言うよりは、むしろ「離黨」をもつてただちにマイナス評價の「轉向」「叛變」ならしめてきたその後の中國革命史における正統性イデオロギーの呪縛なのである。

さらに附言すれば、マルクス主義研究家施存統の離黨には、黨内でのマルクス主義研究が置かれていたある種の不遇状態が影を落としていたように思われる。かれの半生の事業となつた本格的なマルクス主義研究が黨を離れることによつて可能になつたことは、それを側面から物語つていよう。共產黨は、「マルクス主義をなおも奉じる」としたかれの離黨宣

言をうけて、離黨しながらマルクス主義を「信仰」するとはマルクス主義と共產黨員にたいする「侮辱」であると罵るにいたる。⁽²⁶⁾だが、皮肉にもその後の中國におけるマルクス主義研究（マルクス著作の翻譯、解説）を支えたのは、「スターリンの蓄音機」⁽²⁷⁾、つづいて「百パーセントのボルシェヴィキ」と稱された中共中央の宣傳活動よりも、むしろ黨の外に位置していた人たちであった。中國における最初のマルクス主義哲學書と稱される李達の『社會學大綱』、陳啓修の手になる『資本論』第一卷の最初の全譯漢譯本、郭大力、王亞南によって行われた『資本論』全三卷の全譯、許德珩によるマルクス『哲學の貧困』の翻譯などの學術的著譯は、いずれも當時の非黨員によるものである。一九二八年以降、陸續と刊行された施存統のマルクス主義研究も同じ系統につらなるものであることはいうまでもなからう。

むろん、當時の中共の側が、苛烈な反共彈壓と極左路線遂行のなかにあって、これらマルクス、エンゲルスの經典の翻譯、解説にまったく意を拂っていなかったわけではない。しかし、マルクスよりもレーニンの、そしてレーニンよりもスターリンの「革命理論」をもって共產主義理論の精髓としていた中共においては、それはせいぜいが黨員の「業餘」の活動成果であって、それ以上のものではなかった。國民革命の高まりを迎えんとしていた中共内部において、つとに理論探求への没頭を必ずしもよしとしない雰圍氣がすでに存在していたことは、さきに引用した張隱韜の日記や李達の回想において見たとおりだが、理論とは指導者（もしくはモスクワ）のものであり、一般黨員の使命はその指令を忠實に實行に移すことにはかならないという「鐵の規律」論が、二〇年代末から三〇年代はじめにかけて全黨を支配するにおよび、マルクスに立ち返った理論研究が歡迎される餘地はもはや残ってはいなかった。「社會科學を研究するにあたっては、まず理論より手をつけるべきである。少なくとも理論を主とすべきである」⁽²⁸⁾と主張して譲らない施存統にとって、黨生活を離れることは、マルクス主義の理論的研究に専心するためにも避けられない選擇だったのでなからうか。いうなれば、マルクス主義が共產黨の「專有物」とされたその瞬間、マルクス主義の學術的研究は、いささか逆説的ながら、その黨の拘束

を離れて一個人となることによって始めて可能になったのであった。

主として日本のマルクス主義研究を攝取し、その理論的體系に「眞理」を見いだして中共を結成した李漢俊、李達、陳望道、周佛海らの初期幹部は、その後まもなく離黨を餘儀なくされている。むろん、その離黨のすべてが、かれらの求めた理論探求と黨が求めた組織的實踐との齟齬によるとは言えまい。だが、かれらの望んだ黨によるマルクス主義の理論研究が結局のところ、「運動」への傾斜を強めた黨において、花開くことのなかったのはまぎれもない事實なのである。おもに日本語文獻によってマルクス主義の何たるかを知り、初期の黨中央において重きをなした二大巨頭たる李大釗、陳獨秀も、一九二七年八月において、前述の李漢俊、李達らと理由は異なるものの、同じく黨中央にはいなかった。そして、日本語のマルクス主義文獻に哺育されて中共成立に立ち合った理論家は、施存統の離黨を最後に、ことごとく黨中央から姿を消したのである。

五 離黨その後

施存統の離黨聲明は、大きな反響を呼んだ。中共の創立にあずかりながらも離黨したものは、李漢俊、李達、陳望道、周佛海、陳公博等々決して少なくはないが、公開の離黨聲明を大々的に発表したのはこの施存統が最初だからである。そして、おりもおり、國共分裂という事態により中共黨員に動搖が廣がっていたさなかであっただけに、それはなおさらだった。共產黨の指導者であった李立三が一九三〇年に行った「黨史報告」は、國共分裂時の脱黨者の第一として施存統の名を挙げ、こう述べている。

まず黨を裏切ったのは施存統であり、かれは黨を裏切った最初の一人だった。かれは「黨の」歴史上の早い時期の人

である。かれの裏切りが黨に與えた影響は大きい、特にかれは新聞紙上に自分の論を公表したのである。こうした情勢のもと、武漢の多くの同志がおおやけに黨を離脱することを宣言した。その人数は一日一日と増加し、はじめは一人一人が新聞で離脱を聲明したが、しばらくすると、まとまって離脱するようになった。⁽²⁷⁾

事實、『漢口民國日報』には共產黨員の離黨聲明が踵を接して掲載され、それは新聞側がその掲載を制限するほどであった。⁽²⁸⁾ むろん、そのすべてが施存統の影響であったとは言えないとしても、古參黨員であるかれの離黨聲明が白色テロにおびえる多くの一般黨員に離黨の格好の口實を與えたこと——すなわち「當時の遊動分子は殆んど施存統の「悲痛中的自白」を一種の護符として紛々脱黨を聲明し」たという状況があったということ——は間違いないまい。そして他方、反共派國民黨の手に落ちた『漢口民國日報』が、かれの聲明の二日後にさっそく「施存統同志の歸來を歓迎する」と題する社論を掲げたように、その離黨聲明がかれの微妙な眞意を離れて一人歩きし、反共派の格好の宣傳材料になったのも事實だった。

そして、かれが豫測した共產黨側からの「譏笑と謾罵」がかれを見舞う。名もない一般黨員ならいざ知らず、「非孝」以來の勇名を引つ提げて中共に重きをなし、黨の齡と等しい黨歴を持つかれの「變節」に、中共側が激しい批判を加えることになるのは當然であった。やや長くなるが、その年一〇月の中共機關誌『布爾塞維克』^{ボルシェヴィキ}の編集者の言を引こう。

施存統らが共產黨からの退出を聲明したが、我々はそれを惜しまないのみならず、むしろ歡送すべきである。國民黨が反動に轉じて以來、新聞で共產黨退出を表明した「共產黨員」は數百人にのぼる。……むろん施存統は、新聞で共產黨退出を表明したこれらの「共產黨員」と自分とは異なる點があると言うだろう。つまり、第一にかれは「老黨員」だからであり、第二にかれは離黨した後にも引き續きマルクス主義を「信仰」しているからである。だがその實、施存統はやはり新聞で共產黨退出を表明した他の人間と同様に耻知らずなのだ。かれは中國共產黨員があらゆる反動派の

拘禁、指名手配、殺戮を被っているのを見るや、公然と共產黨を退出して汪精衛、陳公博、顧孟餘ら革命の叛徒に投降し、中央日報の主筆におさまろうと願っているのだ。このような人間——すなわちなおも「老黨員」を自稱し、依然としてマルクス主義を「信仰」することによって共產黨員とマルクス主義を侮辱している人間——は、他の誰にも増して下劣であり、耻知らずだと言えよう。⁽²⁷⁾

このほかに、かれの離黨聲明を聲高に罵る言辭は、あるいは「施存統が其革命的人格を賣つた廣告」、あるいは「革命轉變中の共產黨にとつて最も耻づべき文獻⁽²⁸⁾」と例に事缺かない。

むろん、かれの離黨聲明は、そうした罵倒を浴びせられることを承知のうえでなされたものであった。さればこそかれは、その聲明において、豫想されるそうした「譏笑と謾罵」にたいして、「わたしは文章で論争したり辯明したりしようとは思わない。すべてはみな、行動によってあきらかにするよりほかにはない」と述べ、國民黨「左派」への革命勢力再結集をもって己が任とすることを表明したのであった。そして、かれはそれを實行すべく、九月に李漢俊、胡蘭畦らの手引きで武漢を離れて上海にむかい、上海において邵力子、陳望道の資助で一時糊口をしのいだのち、一九二九年にかけて、國民黨の改組を標榜して行われたいくつかの政治運動に身を投じることになる。

だが、共產黨脱黨者であるかれを待っていたのは失意の連續でしかなかった。すなわち、一九二七年一〇月の廣東行(張發奎、黃琪翔の要請を受けたもの)では、國民黨左派と共產黨による「黨外合作」を提案したものの、受け入れられず、結局悄然と上海にもどらざるを得なかったし、また一九二八年に左袒した國民黨「改組派」の運動にあつても、同派の『革命評論』等において、「國民黨の一三年の改組の精神にたち返れ」と訴える文章をいくつかの發表して、「改組派」の理論家として活躍したものの、汪精衛派による蔣介石批判という内訌の域を出ない「改組派」の政治運動とはけっきょく袂を分かつたざるを得なかったのである。⁽²⁹⁾ けだし、中共離黨後のかれにまわりついたのは、國民黨の側からは「共產黨の外に

ありながら共產黨に同情している」という猜疑の目であり、共產黨の側からは「投機主義者」「叛徒」「ブルジョアジーの走狗」というレッテルだった。離黨のつけはあまりにも高かったのである。

一九二九年初頭に國民黨「改組派」から脱退したのちも、かれにたいする追い打ちはやまなかった。かれを追いだした「改組派」の小報には有ること無いことを書きたてた讒言が「施存統傳」なる題名のもとに掲載されたという。⁽²⁷⁾また、かれが「改組派」を離れたことにかんしても、共產黨に復歸したのだ、あるいは南京に出仕したのだという憶測が、さかんに吹聴されたという。⁽²⁸⁾だが、かれにとつて最も痛烈な批判として胸にこたえたものは、長年肩を並べて活動してきた惲代英が共產黨員の立場からおこなった痛罵であつただろう。一九二二年以來、社會主義青年團、上海大學、國民黨上海特別市黨部、中山大學、そして武漢軍校と、一貫して施存統とともに活動し、かれのもっとも親密な同志であつた惲代英が、四萬字にのぼる「施存統の中國革命に對する理論」⁽²⁹⁾を發表したのは、施存統が憤然として國民黨改組派を脱退した一九二九年初めのことであつた。

惲代英の「施存統の中國革命に對する理論」は、『革命評論』等に發表された施存統の一連の主張とそれに先立つ離黨聲明を取り上げ、逐一批判を加えた上で、かれが理論的には國民黨「左派」どころか、もはや蔣介石の御用學者に成り下がっていると批判したものだった。孫文の三民主義にすら價値を認めない惲代英にとっては、蔣介石ら國民黨の領袖がいずれも孫文三民主義の繼承者をもつて自任しているのだから、施存統がそれをいくら革命的に解釋しようとも、三民主義という言葉にしがみついている限り、蔣介石らと同じ穴の貉だと批判したのは當然であつただろう。その一方、施存統が「暴動主義」と批判した共產黨の盲動傾向について、惲代英は「暴動政策についていうならば、今日に至るまで、それは確かに共產黨があくまでも堅持している革命政策である。ただこの一年來、共產黨の下級の黨部がなおこの政策を正しく運用できなかったことは確かである。しかし最近、各地〔の黨〕はこの政策の運用において顯著な進歩を見せている」と抗⁽³⁰⁾

辯するのみならず、それら下級の黨部が黨中央の正しい指導を實行しえなかったのは、施存統の擁護する國民黨が共產黨の側の宣傳文書、訓練資料の傳播を禁止しているからだ、と反論したのだった。⁽²⁸⁵⁾

共產黨員時代の施存統を誰よりよく知る惲代英だけに、勢いその批判は施存統個人への人身攻撃にも向かわざるを得なかった。かれはいう。

武漢を離れる以前、わたしはすでに施存統の精神状態がおかしいのではないかといぶかっていた。とりわけ不思議なのは、中央軍事政治學校が閉校になった時、かれが政治總教官の肩書きで政治教官全員の給料一千元あまりを残らず代收してしまったことである。……わたしはこの事に氣づく、かれのそのやり方はおかしいと考え、軍事委員會の責任者に、この種の火事場泥棒的な不正行爲は徹底的に糾明すべきであると嚴重に要求した。その後、わたしは武漢を離れてしまったが、その結末はどうなったのだろうか。わたしは、舊知の友である施存統にそれまで相當の敬意を抱いていたが、その一件に及んでかれの人格に一種の疑問を持つようになった。⁽²⁸⁶⁾

かくて施存統は、單にその離黨や理論が誤りであっただけでなく、人格にも問題ありという烙印をおされてしまったのである。そして、惲代英はかれに對し、「施存統よ、媚びるがいい。勞農貧民はすでに現在、『刀を研ぎすまし猪羊を片づける』べく準備しているのだ。我々は容赦はしない⁽²⁸⁷⁾」とただならぬ決意を示し、「我々は勞農貧民の民主革命が迅速に成功するよう努めるまでである。時到来ば、必ずやかれらブルジョア階級の走狗どもを『清算』する日が来るであろう」として文を結んだのだった。一説によれば、この恫喝に近い批判文を読んで恐怖にかられた施存統は、しばらくの間、外出をひかえたという。⁽²⁸⁸⁾その眞偽のほどはさだかではないが、かれがそのような恐怖におびえても不思議ではないほどの迫りと凄みが惲代英の文章に滿ちあふれていたのは事實であつた。かれを終生苦しめた共產黨による評價の原型はここに確定されたといつてよいだろう。

施存統は一九二九年初頭に「改組派」と袂を分かつてより、一切の黨派活動から身を引いた。そして、惲代英のものを含めて一切の批判にたいして口をつぐんだまま、著述生活に引きこもることになる。かれによれば、「學究式」生活こそが到底「革命的政治家」にはなり得ぬかれ、つまり「書呆子」には、もっともふさわしい生き方なのであった。⁽²⁶⁷⁾ こうして一九二九年から數年の間、かれは猛烈な勢いでマルクス主義、および社會科學關連の日本書の翻譯を中心とする著述活動に没頭する。その間に出版されたかれの譯著は、單行本だけでも二〇冊以上に達している（注末の「施存統著作繫年目錄初稿」参照）。さらには、共產黨でさえ着手していなかった中國語版『マルクス・エンゲルス全集』の出版さえ企圖したという。⁽²⁶⁸⁾ それはあたかも、革命勢力の再結集による國民革命の再生という夢が全くついた時、離黨聲明で述べた決意としてかれに残された最後の信念——共產黨を離れたマルクス主義研究は存在し得る——を懸命に確認するかのようであった。そして、また同時に、それら著述への没頭は、かれがいみじくも『中國現代經濟史』（一九三二年）の序言で、「この三年來、一面において自分の過去の思想の誤りを反省、懺悔して、基礎的研究の仕事へ専念し、他方自分の能力の及ぶ範圍でいくらかの譯述紹介の仕事をして、多少なりとも過去の罪過を贖おうとしてきた」と表白したように、日増しにのつていく罪惡感との葛藤の歩みでもあった。

共產黨離黨から十年を経た一九三七年一月、かれは再度ひとつの聲明を執筆する。一九二九年以來、外界の批判、中傷にたいして一貫して沈黙を守ってきたかれが、その間の心境を率直に吐露した「ある誠實な聲明」⁽²⁶⁹⁾である。そこでかれは、惲代英による「公金横領」批判や共產黨離黨のちに關わったいくつかの黨派活動にまつわる誹謗、中傷に、はじめて反論するとともに、離黨後十年のはてに行き着いた心情を次のように語っている。

この八、九年來、わたしは常に良心の呵責にさいなまされてきた。かつて艱難辛苦を共にした友人や學友たちは革命のために犠牲になったのに、耻ずかしくもわたしはなおこの世にあって、いたずらに生をむさぼっている。わたしは

一時の認識の誤りから革命に徹することができず、かれらのように勇敢に壮烈な犠牲を遂げることがなかった。わたしは慚愧と不安の念を感じるよりほかなく、むしろ如何なる攻撃、中傷を甘受しようとも、恨みとはしない。

一九二七年の國共分裂からこの文章が書かれた一九三七年——すなわち日本の侵略に直面して第二次國共合作がようやく形成された時——までの間、あまりにも多くの共產黨員が革命に殉じてこの世を去っていた。かれの妻を奪った張太雷は一九二七年一二月の無謀とも言える廣州蜂起で壮烈な最期を遂げ、上海大學でともに教壇に立った「章護」こと瞿秋白も一九三五年に國民黨によって逮捕され、「多餘的話」の一文を残して處刑されている。社會主義青年團時代に論争を戦わせた蔡和森、鄧中夏はそれぞれ一九三一年、一九三三年に刑死、また武漢で親しかった國民黨「左派」の李漢俊、鄧演達もそれぞれ一九二七年、一九三一年に革命活動のゆえをもって殺害されていた。そして、かれの離黨をもっとも痛烈に批判したかつての最も親密な同志惲代英も、「施存統の中國革命に對する理論」の發表から二年餘り後、南京雨花臺の刑場に於て三十六歳の命を散らしており、この時すでにこの世の人ではなかった。

その後、施存統は民主諸黨派のひとつである民主建國會の中心的存在として活動し、中國革命における第三の道を模索しつつも、次第に共產黨の統一戦線に合流する形で一九四九年の「解放」を迎える。⁽²⁹⁾かれがその離黨聲明のなかで、「すべての革命勢力を結集し、革命指導權を統一する責任を擔うことは決してできない」と斷言したその共產黨は、いまやかれら民主諸黨派を結集し、強力な指導權をもって中華人民共和國を打ち立てたのである。「解放」後の施存統に残された道は、共產黨に比べればあまりにも無力な民主諸黨派の一指導者として、そして罪惡感にさいなまされる一人の脱黨経験者として、妻の鍾復光ともども共產黨につき従っていくこと以外にはなかった。

つとに、共產黨が中國政治の一方の雄として不動の地位を確立しつつあった一九四五年九月、重慶の中國婦女界代表者

として毛澤東の接見を受けた鍾復光（施存統とともに一九二七年に離黨）は、毛澤東と握手をした際、かれに「存統は元氣にしているか」という言葉をかけられて、涙ながらに「元氣です」と答え、その厚恩に感激しなければならなかった。⁽²⁾ また、施存統自身も、共產黨による内戦勝利が誰の目にもあきらかとなった一九四九年五月の南京において、もはやすっかり地位の逆轉してしまったかつての部下陳毅（當時、華東軍區の最高責任者）にたいして、卑屈とも言える態度をとらざるをえなかったし、陳毅の態度もまたすっかりかれを見下した者のそれであった。陳毅はいう。

一九四九年五月、我々が南京を解放すると一團の民主人士が南下し、我々に従って上海にはいることになった。我々は南京でその歡迎會を開いたが、その中に施存統がいたのである。歡迎會でのわたしの講話が終わると、かれはすぐさまおだての發言をして、すばらしいお話でしたとか、共產黨は偉大です、毛主席は偉大ですとか褒めそやした。かれはその上、わたしのところへやって来て、當時逃亡したのは耻づべきことだったが、それは病氣が原因で、また逃亡してから反共的なことはやっていないと自分の經歷を辯解した。かれはさらに、「憚」代英が英雄的な最期を遂げたことは敬服すべきことだが、代英が新聞で暴露したかれの公金持ち逃げは決して事實ではないと言って、ひとしきり自己辯護した。わたしが「昔のことはもう持ち出さなくていい。これからの君はどうするつもりだ」と言っていると、かれはこう答えた。「ブルジョア階級の中で、いくらかの仕事ができるはずです。もうマルクス・レーニン主義のことはできませんし、やったところで誰もわたしの言うことなど聞いてはくれないでしょう。わたしはブルジョア階級に働きかけて、かれらに共產黨の言うことに従い、共產黨について行くよう促します」。わたしは「それもいいが、やはり人民のために眞面目に盡くすことだ」と言ってやった。⁽³⁾

人民共和國成立以後にかれが送った歳月は、かつて黨を裏切ったがゆえに、どこまでも共產黨に忠實たらねばならなかった贖罪の日々であったといつてよい。共產黨の計らいによって、一九四九年一〇月から一九五四年まで中央政府の勞働

部副部長のポストをあてがわれたかれにできることは、「偉大なる革命統一戦線」の一員として共産黨の政策を宣傳する一方、新聞に掲載される共産黨の經濟政策、勞資政策關係記事を丹念に切りとってはひたすら學習に勵むことだった。⁽²⁸⁾だが、新中國において、かつて離黨という過ちを犯したことの汚點は、かれがいくら人民のために奉仕しようと、到底ぬぐい去ることのできない過誤としてかれにまわり續けた。朝鮮戦争、河北の水害、ベトナム戦争等々、國家の危機のたびに數千元、數萬元の貯えを供出し、過勞から來る中風で半身不隨になるほど、文字どおり政務に粉骨碎身したにもかかわらず、「歴史問題」をかかえる兩親をもった息子施光南（一九四〇～一九九〇）の共産主義青年團への入團申請は、ついに受理されることはなかったのである。⁽²⁹⁾

一九五四年に半身不隨となって勞働部副部長を辭してのち、晩年のかれは病床での生活を餘儀なくされた。今日、かれの文章として我々が目にしうる最後のものは、その病床より黨指導者の李立三、李維漢に宛てた以下の書簡である。

一九二七年以前、わたしはあなた方と艱難をともにしたものの、一九二七年八月より後、自身の認識の誤りと意志の薄弱さから、道半ばで革命を離れてしまいました。あなた方は面と向かってわたしを責めることはなさりませんでしたが、わたしは今に至るまで氣がとがめております。解放後、あなた方はわたしにすばらしい仕事の機會を與えて下さいました。しかし、わたしは、自分のあまりにもわずかな仕事に比してあまりにも多くのものを與えていただいていることに、常に申し譯ない氣持ちでいっぱいです。⁽³⁰⁾

一九六六年より始まった文化大革命はかれに最後の打撃を加えることになった。かれとともに共産黨創立に參預し、間もなくひそかに離黨した陳望道、李達といった舊友が、その過ちを許されて再入黨していたにも関わらず粗暴な批判を受けざるを得なかった以上、かれらよりも惡質な過ち（公開聲明による離黨、汪精衛ら國民黨「改組派」への加擔）を犯した施存統の一家に文化大革命の暴風が及ばないはずはなかった。紅衛兵によってかれの住まいはたびたび手荒い家捜しを

うけ、一九六七年一月には夫人の鍾復光がつるし上げの対象になった⁽²⁶⁾。かつて惲代英がかれに突きつけた恫喝——「勞農貧民はすでに現在、『刀を研ぎすまし猪羊を片づける』べく準備しているのだ。我々は容赦はしない——」がついに現實のものとなったのである。病床に伏したきりのかれ自身はそれ以上の屈辱を免れたようだが、すでに若き作曲家としての頭角をあらわしていた最愛の息子施光南は「叛徒、變節分子の狗崽子⁽²⁷⁾」のレッテルを貼られ、大港油田に「改造」に送られるのみならず、その作品は上演、放送を禁じられたという。

一九七〇年一月二九日、かれは病狀の惡化により、北京で七十一年の生涯をとじた。後年「人民音樂家」の稱を得ることになる施光南の名を不朽のものにした「祝酒歌」が大流行したのは、「四人組」が打倒されて後のこと、そしてその父が「民主革命時期の英勇戰士」として認められたのは、没後十餘年のことである。だが、文革終結のち名譽回復された李達、陳望道の歴史的業績がそれぞれ『李達文集』『陳望道文集』の刊行という形で顯彰されている今日、施存統の業績にも同じような配慮がされている形跡は、いまだにないようである。

注

- (1) 丁玲「我所認識的瞿秋白同志——回憶與隨想」(『丁玲文集』第五卷、湖南人民出版社、一九八四年、八四、八八頁)。
- (2) 中國における施存統の略傳としては以下のものがある。王水湘等「施存統」(『中共黨史人物傳』第四四卷、陝西人民出版社、一九九〇年)、齊衛平「施復亮傳」(『中國各民主黨派史人物傳』第一卷、華夏出版社、一九九一年)。また、施存統の初期思想、およびかれと共產黨の創立の關係を論じたものとしては、陶水木「施存統對馬克思主義早期傳播的貢獻」(『杭州師範學院學報』一九九一年四期)、陳紹康「論早期團的領導人俞秀松和施存統」(『上海革命史資料與研究』第一輯、開明出版社、一九九二年)、梁妙珍「施存統與中國共產黨的創建」(同上)等がある。
- (3) 『東洋史研究』五三卷二號(一九九四年九月)。
- (4) 存統「回頭看二十二年來的我」(『民國日報』「覺悟」一九二〇年九月二〇〜二四日。なお、この文章は、一部分が嵯峨隆等編譯「中國アナキズム運動の回想」(總和社、一九九二年)一四八〜一五三頁に翻譯されている)。以下、特に斷らぬ限り、日本留學に至るまでの事情は同文章による。
- (5) 「非孝」事件の概要については、齊衛平「施存統著『非孝』引起一場軒然大波」(『民國春秋』一九九〇年一期)も参照。
- (6) 小野信爾「五四時期の理想主義——惲代英のばあい」(『東洋史研究』三八卷二號、一九七九年九月)、砂山幸雄「五四」の青年像——惲代英とアナキズム」(『アジア研究』三五卷二號、一九八九年二月)、狹間直樹「五四運動の精神的前提——惲代英のアナキズムの時代性」(『東方學報』京都、第六一冊、一九八九年三月)参照。
- (7) 「浙江一師風潮」の顛末については、坂井洋史「五四時期の學生運動斷面——『陳昌標日記』に見る「一師風潮」」(『言語文化』二六號、一九八九年十二月)が、當時の浙江一師學生陳昌標の日記をもとに詳細に論じている。
- (8) 「俞秀松烈士日記」(『上海革命史資料與研究』第一輯、開明出版社、一九九二年所收)の一九二〇年六月二七日條にいう。「我從今年一月一日脫離杭州第一師範學校以來……」。
- (9) 獨秀「浙江新潮——少年」(『新青年』七卷二號、一九二〇年一月)。
- (10) 「俞秀松の家人あて書簡 一九二〇年三月四日」(『紅旗飄飄』第三一集、中國青年出版社、一九九〇年、二三三頁)。
- (11) 北京の工讀互助團に集った青年男女の「自由戀愛」觀については、清水賢一郎「革命と戀愛のユートピア——胡適の『ハイプセン主義』と工讀互助團——」(『中國研究月報』五七三號、一九九五年十一月)が詳しく論述している。
- (12) 存統「工讀互助團」底實驗和教訓」(『星期評論』四八號、一九二〇年五月一日)。
- (13) 「俞秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年三月」「同 四月四日」(前掲『紅旗飄飄』第三一集、二三四〜二三七頁)。
- (14) 海隅孤客(梁冰弦)「解放別錄」(近代中國史料叢刊 第一九輯、文海出版社、一九六八年所收)の第六章「新秀才造反」、および「劉石心的回憶(一九八一年七、八月)」(中國社會科學院現代史研究室・中國革命博物館黨史研究室選編『一大前後』(三)、人民出版社、一九八四年)。
- (15) 玄廬「學生與文化運動」(『星期評論』三九號、一九二〇年二月二九日)。なお、杭州で印刷できなくなった『浙江新潮』第三號は、沈玄廬、戴季陶の援助によって星期評論社が印刷をひきうけたという(倪維熊「『浙江新潮』的回憶」(中國社會科學院近代史研究所編『五四運動回憶錄』下、中國社會科學出版社、一九七九年、七三八〜七三九頁)。
- (16) 沈仲九の經歷については不明な點が多いが、坂井洋史「山鹿泰治と中國——『たそがれ日記』に見る日中アナキストの交流」(『猫頭鷹』二號、一九八三年十二月)に觸れるところがある。

- (17) 當時の星期評論社同人の生活は、前掲「俞秀松烈士日記」がいきいきと傳えている。
- (18) 「俞秀松の駱致襄あて書簡 一九二〇年四月四日」(前掲『紅旗飄飄』第三集、二三六―二三七頁)。
- (19) 「施存統證言」(注末「附錄 二」)。
- (20) 季陶「我對於工讀互助團の一考察」(『星期評論』四二號、一九二〇年三月二二日)。
- (21) 存統「『工讀互助團』底實驗和教訓」(『星期評論』四八號、一九二〇年五月一日)。
- (22) 中國共產黨の母體となつたいわゆる「上海共產主義小組」の結成とそれへの施存統の關與にかんしては、前掲拙稿「若き日の施存統——中國共產黨創立期の「日本小組」を論じてその建黨問題におよぶ——」に詳しく述べたので、ここではくりかえさない。
- (23) 存統「青年應自己增加工作」(『民國日報』「覺悟」一九二〇年八月二六日)。
- (24) 存統「對於抄近路求學的朋友底忠告」(『民國日報』「覺悟」一九二一年一月二七日)。
- (25) 前掲存統「青年應自己增加工作」、同「對於抄近路求學的朋友底忠告」。
- (26) (27) 前掲存統「青年應自己增加工作」。
- (28) 注末「附錄 一 A—1」。
- (29) 注末「附錄 一 A—2」。
- (30) 存統「改革底要件」(『民國日報』「覺悟」一九二一年一月一〇日)。
- (31) 高「支那に於けるボルセウイキ運動」(『勞働運動』(第二次)一三號、一九二一年六月)。
- (32) 高津が「支那に於けるボルセウイキ運動」と對にして發表した「支那に於ける無政府主義運動」(『勞働運動』(第二次)八號、一九二一年四月)には「この稿を草するに當つて、C・T「施存統の筆名」引用者注」君の御助言を受けた事を感謝する」とあるところから見て、
- (33) 「支那に於けるボルセウイキ運動」も施存統からの情報をもとに書かれたことは間違いない。
- (34) 注末「附錄 一 A—4、A—5」。
- (35) 注末「附錄 一 A—6」。
- (36) 注末「附錄 一 A—7」。
- (37) 光亮「一封答覆「中國式的無政府主義」者的信」(『民國日報』「覺悟」一九二二年七月一五五)。
- (38) 光亮「再與太朴論主義底選擇」(『民國日報』「覺悟」一九二二年七月三一日)。
- (39) 「施存統の太朴あて書簡」(注末「附錄 一 A—8」)。
- (40) C T「介紹『社會主義研究』」(『民國日報』「覺悟」一九二二年九月二七日)。
- (41) 施存統の「無政府主義論戰」での理論的貢獻は、莊福齡主編『中國馬克思主義哲學傳播史』(中國人民大學出版社、一九八八年、一五六―一六二頁)や、李其駒、王炯華、張耀先主編『馬克思主義哲學在中國』(上海人民出版社、一九九一年、一二一―一二九頁)でも高く評價されている。
- (42) 注末「附錄 一 A—4」。
- (43) 「施存統證言」(注末「附錄 二」)。なお、張太雷來日の経緯とその期日の考證にかんしては、前掲拙稿を参照されたい。
- (44) 『讀賣新聞』一九二二年二月二八日。
- (45) 注末「附錄 一 C—3」。
- (46) (47) 『東京朝日新聞』一九二二年二月三〇日。
- (48) 注末「附錄 一 C—6」。
- (49) 注末「附錄 一 C—7」。
- (50) 「大阪商船配船記録」(大阪商船三井船舶株式會社所藏)。
- (51) 施復亮「一九二〇到一九二三年的中國社會主義青年團」(『青運史研究資料』一九八〇年三期、原載は『團内通訊』二六期、一九五七年五月)。

なお、この文章は「中國社會主義青年團成立前後の一些情況」と題を改めて『一大前後』（二）（第二版、人民出版社、一九八五年）に収録されている。

(52) 光亮「本團與中國共產黨之關係」（「先驅」二三號、一九二三年七月）、および前掲施復亮「一九二〇到一九二三年的中國社會主義青年團」。

(53) 團の公稱團員数は、「中國社會主義青年團第一次全國大會」（「先驅」八號、一九二二年五月）による。黨員数は、「中共中央執行委員會書記陳獨秀給共產國際的報告 一九二二年六月三〇日」（中央檔案館編『中共中央文件選集』第一冊、中共中央黨校出版社、一九八九年、四七頁）による。

(54) 例えば、日本において、眞に検証にたえうる團史研究と呼べるものは、森時彦「旅歐中國共產主義青年團の成立」（『東方學報』京都、第五二冊、一九八〇年三月）ぐらいしかない。

(55) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」、および「キム第二回大會（一九二二年七月九日〜二三日）での中國社會主義青年團代表の報告」（共青團中央青運史研究室・中國社會科學院現代史研究室編『青年共產國際與中國青年運動』中國青年出版社、一九八五年、五二頁）。

(56) 上海で社會主義青年團が結成されたとき、施存統はすでに日本に留學中であつた。ただし、かれが社會主義青年團の存在を知っていたことは、「施存統證言」、および前掲高「支那に於けるボルセヴィキ運動」にあきらかである。

(57) 「マリーンのコミンテルン執行委員會への報告（一九二二年七月一日）」（李玉貞主編『馬林與第一次國共合作』光明日報出版社、一九八九年、六三頁）。なお、同書に収められているマリーンの關係文書は、共に同文書の整理にあつたトニー・セイチ氏によつても英譯、刊行されてゐる（Tony Saich, *The Origins of the First United Front in China: The Role of Sneevliet (Alias Maring)*, Leiden, (1991), pp. 310.）

(58) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」。

(59) キムの第二回大會の中國代表は、俞秀松と張太雷が考えられるが、そこで報告（注55参照）を行つたのは俞秀松であつた。その詳しい考證は、任武雄「一篇重要報告的作者考——兼談中國社會主義青年團中央成立時間」（『中國青年研究』一九九一年四期）を参照。

(60) 「李達自傳（節錄）」（『黨史研究資料』一九八〇年八期）。

(61) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」は、社會主義青年團の再建を一九二二年一月と傳えているが、當時廣東で團の再建にあつてゐた譚平山、彭侃はそれを二〇月とする（彭侃より譚平山あて書簡『青年週刊』三號、一九二二年三月一二日、「譚平山答詞」『青年週刊』四號、一九二二年三月二二日）。

(62) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」。

(63) 拙稿「一九二〇年代中國における「信仰」のゆくえ——一九二二年の反キリスト教運動の意味するもの——」（『狹間直樹編『一九二〇年代の中國』汲古書院、一九九五年）参照。

(64) 「中國社會主義青年團的重要通訊」（『青年週刊』二號、一九二二年三月七日）。なお、この通知では大會開催場所は空白になっているが、當初は上海で開催する豫定であつたという（趙朴「中國社會主義青年團第一次全國代表大會及其前後的若干問題」（共青團中央青運史研究室編『中國社會主義青年團創建問題論文集』一九八四年）。

(65) 近年中國各省の檔案館が中央檔案館と協同して編集し、それぞれの省名、地區名を冠して刊行した『革命歷史文件彙集』には、團創立時期に上海の施存統と各地の青年團との間で交わされた書簡が相當數收録されている。團一大の開催時期、場所をめぐる書簡の應酬の多くは、前掲趙朴「中國社會主義青年團第一次全國代表大會及其前後的若干問題」にまとめられている。

(66) 「平山（譚平山）より國昌（施存統）あて書簡 一九二二年三月六日」（中央檔案館・廣東省檔案館編『廣東革命歷史文件彙集』甲1、廣東人民出版社、一九八七年、二頁）。

- (67) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」、および「馬克斯誕日之紀念會 中國社會主義青年團第一次全國大會」(『廣東群報』一九二二年五月八日)。
- (68) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」。煩雜になるのでその考證は省くが、目下のところ推定できる二人の代表の顔ぶれは以下の通りである。施存統(團中央代表、鄧中夏、金家鳳(以上、北京代表)、許白昊(上海中國勞動組合書記部總部代表、俞秀松(杭州代表?)、易禮容、陳子博(以上、長沙代表)、王仲一(濟南代表?)、莫耀明(南京代表)、樹彝(唐山代表)、呂一鳴(天津代表)、王仲強、譚平山、譚植棠、梁復然、陳公博(以上、廣東代表)、張仲毅(保定代表)、張紹康(武漢代表)、蔡和森、張太雷、張繼武(以上、代表地不明)。二名いたとされる外國代表は、キムより派遣されてきたダーリン(S.A. Dain)と、朝鮮人の太洪(?)ではないかと思われる。
- (69) 前掲趙朴「中國社會主義青年團第一次全國代表大會及其前後的若干問題」、および趙朴「青年團的組織史資料」(中國社會科學院青少年研究所青運史研究室編刊『青運史資料與研究』第一集、一九八二年)。
- (70) 前掲「中國社會主義青年團第一次全國大會」。
- (71) 中共成立前後の中國におけるマルクス主義の傳播にかんしては、拙稿「マルクス主義の傳播と中國共產黨の成立」(狹間直樹編『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年)参照。
- (72) 『包惠僧回憶錄』(人民出版社、一九八三年)一八頁。
- (73) 『先驅』八號、一九二二年五月。
- (74) 劉仁靜は『先驅』編集にたずさわった経緯を、『先驅』の發行も誰かと相談した上でやったのではなかった。わたしは鄧中夏と二人でその雑誌をやったが、誰かと相談した覚えはなく、情熱のみに驅られてやったようなものである」と述べている(劉仁靜談社會主義青年團早期情況「前掲『青運史資料與研究』第一集」。創刊後數號の『先驅』が社會主義青年團の名義をまったく掲げていないことから見ても、ど
- うやら發刊當初の『先驅』は、明確に社會主義青年團の雑誌とは考えられていなかったようである。
- (75) 施復亮「一九二〇到一九二三年的中國社會主義青年團」(『青運史研究資料』一九八〇年三期)。
- (76) 存統「本團の問題」(『先驅』一六號、一九二三年二月一號、一九二三年六月)。以下、本節の引用は、特に斷らない限りこの文章のものである。
- (77) 「中央執行委員會通告 第一號(一九二二年五月六日)」同 第二號(五月二七日)、『先驅』二二號、一九二二年一〇月。
- (78) 「中國社會主義青年團綱領」(『先驅』八號、一九二二年五月)。
- (79) 「任民より存統あて書簡(一九二三年五月三日)」(中央檔案館・福建省檔案館編『福建革命歷史文件彙集』甲1、福建人民出版社、一九八七年、三七頁)。
- (80) 「惲代英より施存統あて書簡(一九二三年二月)」(中央檔案館・四川省檔案館編『四川革命歷史文件彙集』甲1、四川人民出版社、一九八七年、五七頁)。
- (81) 「春光(張春光)より×××あて書簡(一九二二年二月二〇日)」(中央檔案館・湖北省檔案館編『湖北革命歷史文件彙集』甲1、湖北人民出版社、一九八七年、三五頁)。この武漢組織の分裂騒動は、その當事者の一人であった包惠僧によれば、武漢におけるいわゆる張國燾派を抑制せんとしたために起こったものであったという(前掲『包惠僧回憶錄』一〇〇―一〇一頁)。また、マーリンがコミンテルン宛に送った報告書でも、武漢の分裂傾向が指摘されている(前掲『馬林與第一次國共合作』一九二頁, Sach. ob. cf., pp. 539-540.)。
- (82) 「春木(張太雷)より和森(蔡和森)、秀松(俞秀松)、國昌(施存統)あて書簡(一九二二年六月一〇日)」(前掲『廣東革命歷史文件彙集』甲1、七〇八頁)。
- (83) 「マーリン工作記錄(一九二二年一〇月一四日―一一月一日)」(前掲

- (84) 『馬林與第一次國共合作』八七頁、Saich, *op. cit.*, pp. 345.)
 (85) 「中國社會主義青年團章程」(『先驅』八號、一九二二年五月)。
 (86) 「本報特別啓事」(『先驅』一六號、一九二三年二月)。
 (87) 光亮「本團的問題」(七)宣傳(『先驅』二〇號、一九二三年六月)。
 (88) 前掲「本報特別啓事」。
 (89) 「中共中央執行委員會書記陳獨秀給共產國際的報告 一九二二年六月三〇日」(前掲『中共中央文件選集』第一冊、四七頁)。なお、社會主義青年團の預算規模については不明であるが、たとえば「團上海地方執行委員會より團中央あて書簡(一九二二年七月二日)」(中央檔案館・上海市檔案館編刊『上海革命歷史文件彙集』甲8、一九八七年、一〇二頁)によれば、團の上海執行委員會は、共產黨より毎月數十元の補助を得るほか、キムの代表であったダーリンより隨時資金提供を受けていた模様である。
 (90) 「鍾復光同志談施存統(一九八〇年二月九日)」(未刊稿)。
 (91) 『先驅』の正確な發行部数は不明であるが、数千の規模であったと推定される。上海より各地に郵送された『先驅』が検閲により沒收されていたことは、各省の『革命歷史文件彙集』所收の書簡でたびたび言及されている。また印刷されても郵送されないままに放置されていたこともあったようである。マーリンの報告によれば、例えば『先驅』一二號(一九二二年一〇月)時點では、五千部が未發送のままだったという(前掲『馬林與第一次國共合作』八七頁、Saich, *op. cit.*, pp. 345.)。
 (92) 「中央執行委員會通告 第五號」(『先驅』一二號、一九二二年一〇月)によれば、各地方の『先驅』通信員には寄稿の義務があった。
 (93) 陳獨秀「馬克思的兩大精神」(『廣東群報』一九二二年五月二三日)。
 (94) 前掲『馬林與第一次國共合作』一九一頁、Saich, *op. cit.*, pp. 539。
 (95) 漢俊「研究馬克思學說的必要及我們現在入手的方法」(『民國日報』「覺悟」一九二二年六月六日)。
 (96) 施存統「悲痛中的自白」(『中央副刊』一九二七年八月三〇日)。
 (97) 初期共產黨における黨内民主主義にかんする議論とその實態については、江田憲治「中國共產黨の黨内民主主義——一九二〇年代の黨内論争を中心に——」(『史林』七七卷六號、一九九四年一月)が詳しい。
 (98) 存統「回頭看二十二年來的我(續)」(『民國日報』「覺悟」一九二〇年九月二十四日)。
 (99) 金冲及主編『周恩來傳 一八九八—一九四九』(人民出版社・中央文獻出版社、一九八九年)四五頁(邦譯：狹間直樹監譯『周恩來傳 一八九八—一九四九』上、阿吽社、一九九二年、六八頁)。
 (100) 鍾復光によれば、施存統は日本での拘留生活によって一層健康狀態が悪化したという(前掲「鍾復光同志談施存統(一九八〇年二月九日)」)。
 (101) 「中夏(鄧中夏)より存統(施存統)あて書簡(一九二三年六月三日)」(討論本團此後進行的方針)『先驅』二二號、一九二三年七月。
 (102) 「討論本團此後進行的方針」『先驅』二二號、一九二三年七月。
 (103) 施復亮「一九二〇到一九二三年的中國社會主義青年團」(『青運史研究資料』一九八〇年三期)。
 (104) 「中國社會主義青年團章程」(『先驅』八號、一九二二年五月)。
 (105) 「毛澤東より國昌(施存統)兄および中局諸兄あて書簡(一九二二年六月二〇日)」(前掲『青運史資料與研究』第一集、九四頁)。
 (106) 同決議案では、共產黨と社會主義青年團の關係を次のように規定していた。「青年労働者のあらゆる經濟、および教育の利益のために奮闘する面においては、中國社會主義青年團は獨立した團體であるべきである。一般の政治運動に關する面においては、中國社會主義青年團はつねに團と中國共產黨との協定の下に拘束されなければならない」(前掲『中共中央文件選集』第一冊、八六頁)。
 (107) 「中央執行委員會通告 第一七號」(『先驅』一六號、一九二三年二月)。
 (108) 「中央執行委員會通告 第一七號」(『先驅』一六號、一九二三年二月)。
 (109) 「中央執行委員會通告 第一七號」(『先驅』一六號、一九二三年二月)。
 (110) 前掲光亮「本團與中國共產黨之關係」。

- (112) 前掲「中夏より存統あて書簡（一九二三年六月三日）」。
- (113) かれの掲げる條件のうち、主要なものは以下の通りである（前掲光亮「本團與中國共產黨之關係」）。
- ・ 團と黨の兩方に加わっている者で、實際に團に服務することのできないものは、一律に退團させるか除名する。
 - ・ 黨は、團の各種職員となつてゐる黨員を絶対に自由に配置がえしてはならない。やむを得ず必要な場合は、團中央委員會の同意を必要とする。
 - ・ 黨は、若年の團員で、黨に加入する必要のないものを無理に入黨させない。
 - ・ 本團の各種職員は絶対に、團を黨の附屬機關と見なし、黨員の資格で團の活動をおこなつてはならない。
- (114) 前掲「中夏より存統あて書簡（一九二三年六月三日）」。「また蔡和森「中國共產黨史的發展（提綱）」——中國共產黨的發展及其使命（一九二六年）」は、青年團の第二回大會時點で、團には獨立傾向が生じていたと叱責している（中央檔案館編『中國黨史報告選編』中共中央黨校出版社、一九八二年、五四頁）。
- (115) コミンテルン第三回大會における「共產主義インタナショナルと共產主義的青年運動についての決議」（村田陽一編譯『コミンテルン資料集』第一巻、大月書店、一九七八年、五〇四頁）。
- (116) 中共第四回大會（一九二五年一月）における「青年運動にたいする議決案」（前掲『中共中央文件選集』第一冊、三六五頁）。
- (118) 中共第五回大會（一九二七年四月五月）における「共產主義青年團の活動にたいする議決案」（前掲『中共中央文件選集』第三冊、九二頁）。
- (119) 「中央執行委員會通告 第二八號」（『先驅』一六號、一九二三年二月）。
- (120) 趙朴「中國社會主義青年團第二次全國代表大會補充資料」（『青運史研究』一九八三年一期）。
- (121) 團二大の經過については、以下の資料による。前掲施復亮「一九二〇到一九二三年的中國社會主義青年團」、前掲「中國社會主義青年團第二次全國代表大會補充資料」、「青年團的組織史資料（之二）」（前掲『青運史資料與研究』第二集、一九八三年）、「第二次全國代表大會的經過」（『青運史研究』一九八四年三期、原載は『團刊』中國社會主義青年團中央執行委員會印行、一號、一九二三年一〇月一〇日）。
- (122) 光亮「對於本屆全國大會的感想」（『先驅』一九號、一九二三年六月）。煩雜になるのでその考證は省くが、出席の確實視される二八人の代表の顔ぶれは以下の通りである。施存統、賀昌（以上、團中央、劉仁靜、瞿秋白（以上、キム代表、戴曉雲、林育英（以上、長沙、戴は西歐代表を兼任）、吳華梓、袁士貴（以上、安源）、丁勤生（常德、劉東生（水口山）、劉昌群（武昌）、林育南（徐家棚）、趙醒儼（南昌）、彭習梅、張人亞、張秋人、鄧中夏（以上、上海）、唐公憲（杭州）、謝遠定（南京）、王擔甫（蕪湖）、柯慶施（安慶）、賈迺甫（濟南）、黃日葵（北京）、李毓棠（太原）、張國棟（石家莊）、梁鵬雲（唐山）、卜世崎（モスクワ）、馬念一（日本）。
- (124) 其類「中國共產主義青年團五年來的奮鬥」（『中國青年』九三・九四期、一九二五年九月）。
- (125) 前掲「第二次全國代表大會的經過」。
- (126) 中共第三回大會（一九二三年六月）における「青年運動議決案」（前掲『中共中央文件選集』第一冊、一五三頁）。
- (127) 團二大で採擇された九決議は、「中國社會主義青年團第二次全國代表大會文件」として『青運史資料與研究』第二集に收録されている。ただし、このほかに大會では「軍人運動議決案」も採擇されたが、それだけは公表されなかったという（前掲「第二次全國代表大會的經過」）。附言すれば、この大會で採擇された國民黨加入にかんする決議案のうち、「本團團員は國民黨において、（一）中國共產黨員の主張に贊助し、言動はこれと完全に一致すべきである（二）本團は獨立にして嚴密な組織を保持すべきである」等の字句は、のちに國民黨内における共

- 産黨員の分派活動の證左とされ、國民黨右派による彈劾の口實に使われることになる（『中央監察委員會彈劾共產黨案』（羅家倫編『革命文獻』第九輯、中央文物供應社、一九五五年、七二―八〇頁）。
- (128) 前掲『第二次全國代表大會の經過』。改稱が否決された理由はあきらかでない。ちなみに、のち團の第三回大會（一九二五年一月）で團の名稱を「中國共產主義青年團」と改めることが決定されている。
- (129) (131) 存統「本團的問題」（『先驅』二二號、一九二三年六月）。
- (130) 存統「本團的問題」（『先驅』一六號、一九二三年二月）。
- (132) 丁玲「韋護」（『小説月報』二二卷一號、一九三〇年一月五號、同五月連載。後に『丁玲文集』第一卷、湖南人民出版社、一九八三年に收録。「韋護」は『丁玲文集』收録にあたって、多くの削除、加筆がなされている。したがって、本稿で引用する場合には『小説月報』發表時のものを用いる。
- (133) 丁玲「我的自白」（一九三一年）（前掲『丁玲文集』第五卷、三〇〇頁）。
- (134) 丁玲「我所認識的瞿秋白同志——回憶與隨想」（前掲『丁玲文集』第五卷、一〇二頁）。譯文は、中島みどり編譯『丁玲の自傳的回想』（朝日選書、朝日新聞社、一九八二年）六七頁による。
- (135) 上海大學については、黃美眞、石源華、張雲編『上海大學史料』（復旦大學出版社、一九八四年）、王家貴、蔡錫瑤編著『上海大學（一九二二—一九二七年）』（上海社會科學院出版社、一九八六年）の二種類の資料集が刊行されている。以下、特に断らない限り、上海大學での施存統の學務についてはこの二書による。また、大學設立の経緯とその概要については、陳正釀『上海大學時期の瞿秋白について（上）』（『茨城大學人文學部紀要 人文學科論集』二六號、一九九三年三月）が詳しい。
- (136) 存統「略談研究社會科學——也是一個書目録」（『中國青年』二六期、一九二四年四月）。
- (137) 「中國國民黨第一次全國代表大會會議錄 第一一號」（中國第二歴史檔案館編『中國國民黨第一、二次全國代表大會會議史料』上、江蘇古籍出版社、一九八六年、四四頁）。ただし、國民黨からの援助額は月額千元に過ぎず、黨目標の財政難からそれすらも滞りがちであった（廣州國民政府關於上海大學被英軍占據飭財政部撥款補助的令文（一九二五年九月七日）（前掲『上海大學（一九二二—一九二七年）』二六五頁）。
- (138) 施存統の招聘期日は前掲『上海大學（一九二二—一九二七年）』一四二頁では「一九二三年六月」だが、前掲『上海大學史料』五三頁では「一九二三年秋」となっている。
- (139) 施存統は團二大をもって團中央を離れたが、その後もしばらくの間、上海の團組織を統括しようである。團二大のと間もなく、團中央委員が所在地の地方團組織に屬するか否か、所在地の地方團を中央委員として直接に指導できるか否か、をめぐって團内に紛争がもちあがった時、團上海組織の責任者であった施存統は、當時の團中央委員長であった劉仁靜と、全國の團を巻き込んだ激しい論争をしている。この経過については、「劉仁靜談社會主義青年團早期情况」（前掲『青運史資料與研究』第一集、「青年團的組織史資料（之二）」（前掲『青運史資料與研究』第二集）、および「團上海地委告各地團組織書（一九二四年一月一八日）」（前掲『上海革命歷史文件彙集』甲8、七五―八五頁。ただし、この書簡の日附は一九二三年一月一八日とすべきである）参照。
- (140) 「任弼時より羅亦農、王一飛あて書簡（一九二五年二月一八日）」（『黨的文獻』一九九三年五期）。
- (141) 一九二四年三月、ソ連の影響下に獨立色を強める外蒙古の處遇をめぐって、ソ連と北京政府の國交樹立交渉が暗礁にのりあげると、『時事新報』は北京政府による外蒙古回收を支持する論説を掲げた。これに對して、施存統は『民國日報』の週刊附録である『評論之評論』に數篇の論文を發表して外蒙古の意思による歸屬決定を主張し、『時事新

- 報」との論戦をおこなった。『評論之評論』所載の論文は未見であるが、施論文への反駁である曾友豪「崇拜蘇俄與斷送蒙古——答評論之評論」(『時事新報』一九二四年三月二七、二八日)、同「論反對中國現存政府收回外蒙的主張」(同四月八日)、藍孕歐「反對親俄派」(同四月二日)、同「再斥袒俄者」(同四月一〇日)、同「斥袒俄者之末次」(同四月一六日)により論戦の概要が知れる。
- (142) 「張隱帆烈士日記」一九二四年七月一日條(在黃埔)(『黨史研究資料』一九八八年九期)。
- (143) 李達「中國所需要的革命」(『現代中國』二卷一號、一九二八年七月)。ちなみにこの回想に出てくる「研究系」とは、梁啓超を首領に戴き、政界、言論界に大きな影響力を有していた一派の名稱をもじったものである。
- (144) 王一知「回憶太雷」(『回憶張太雷』人民出版社、一九八四年、八〇九頁)、同「走向革命——五四回憶」(前掲『五四運動回憶錄』上、五一二頁)。
- (145) 王一知の原名、別名は、丁玲「我怎樣飛向了自由的天地」(前掲『丁玲文集』第五卷、三二三頁)、同「我所認識的瞿秋白同志——回憶與隨想」(前掲『丁玲文集』第五卷、八四頁)、および王中忱、尙俠「丁玲生活與文學的道路」(吉林人民出版社、一九八二年)所收の王一知の談話記録(一四〇—一五頁)による。
- (146) 矛盾「我走過的道路」上(人民文學出版社、一九八一年)二二四頁。
- (147) 平民女學校については、小林二男「上海平民女學校について」(『中國研究』一三六號、一九八二年六月)が現在のところ、もっとも詳細な研究である。
- (149) 許德良「關於早期上海地方黨內部的一些情況」(『上海黨史資料通訊』二期、一九八二年三月)は、上海平民女學校でしばしば施存統と王一知を目にしたと述べている。
- (150) 施存統は一九二〇年に上海の『星期評論』社に身を置いていた頃、アナキズムの立場から『民國日報』に「婚姻制度打破」を高唱する文章をさかんに寄せていた。例えば、「辨論的態度和廢除婚姻制」(『民國日報』「覺悟」一九二〇年五月二二日)、「廢除婚姻問題」(同五月二五日)など。
- (151) 中共上海市委組織部等編『中國共產黨上海市組織史資料』(一九二〇・八—一九八七・一〇)(上海人民出版社、一九九一年)一三〇—一三七、二三〇—二四頁。なお、一九二四年一月に行われた中共上海地委兼區委の改選では、施存統が委員長に選出(ただし、実際には着任せず)されている(同書、一二頁)。
- (152) 鄭超麟「戀愛與政治」(手稿本「一九四五年までにはほぼ完成していた鄭氏の回想録は、一九八六年にようやく『鄭超麟回憶錄』(内部發行本)として現代史料編刊社より出版されたが、そのうち「戀愛與政治」の一章のみは削除された。本手稿は、愛知大學法學部の緒形康氏より提供して頂いたものである)、小島「支那の社會科學作家(二)」(『滿鐵支那月誌』第九年八・九・一〇合併號、一九三二年一〇月)、大塚令三「支那共產黨史」上(生活社、一九四一年)七二頁。
- (153) 王一知「回憶太雷」(前掲『回憶張太雷』一五頁)。ただし、鄭超麟の回想録によれば、張と王は一九二五年初頭に上海ですでに同居していたという(前掲「戀愛與政治」)。
- (154) 張西蕃「父親的英勇業績和革命精神鼓舞着我前進!」、陸靜華「回憶張太雷同志」(ともに前掲『回憶張太雷』所收)。
- (155) 前掲小島「支那の社會科學作家(二)」。
- (156) 鍾復光「火熱的青春歲月」(『文史資料選輯』「全國」總一〇三輯、文史資料出版社、一九八五年、一五九—一六〇頁)。ただし、鍾との結婚のちも、しばらくは「施存統」の名前で活動、執筆をしている。
- (157) 以下、特に断らない限り、施存統と王一知の關係については、丁玲「章護」による。ただし、注(132)で述べたように、「丁玲文集」所收の

「韋護」には修正が施されているため、引用は『小説月報』連載のものから行う。

(158) これに對し、張太雷は王一知との間に生まれた子供にはあたる限りの愛情を注いだかのである。王一知は、張太雷が「生まれたばかりの子供のために、身體をさすってやつたり、オムツを換えたりしてくれた」と賞賛している（王一知「憶太雷」『南方日報』一九五七年二月一日）。

(159) 王一知「回憶太雷」（前掲『回憶張太雷』一〇頁）。一九二四年二月當時、慕爾鳴路彬興里三〇七號の施存統の居宅には、張太雷、蔣光慈、劉含初らが同居していた（工部局「警務日報」一九二四年二月二日）（『上海社會科學院歷史研究所編『五卅運動史料』第一卷、上海人民出版社、一九八一年、二六九頁）。

(160) 前掲鄭超麟「戀愛與政治」、及び雙秋「施存統失妻記」（『現代史料』第一集、海天出版社、一九三三年）。

(161) 楊子烈「張國燾夫人回憶錄」（自聯出版社、一九七〇年）一八一—一八二頁、及び前掲鄭超麟「戀愛與政治」。鄭氏によれば、この一件で非難を浴びた張太雷は就任したばかりの團中央總書記の職務が遂行できなくなり、あやうく左遷されかけたが、瞿秋白のとりなしで廣州に派遣され、ボロジンの助手兼通譯をすることになったという。これを裏附けるのが、蔡和森のコミンテルンでの報告である。蔡は一九二六年二月のその報告の「青年（共青團）における工作」の中で、一九二五年初頭に黨より團中央に三人の同志が派遣されたが、「この三人の同志のうち×××（編集者によって削除）同志はブライベートなことに夢になつて、活動をかえりみないようになつてしまつたため、その團務を取り消されてしまつた」と述べている（蔡和森「關於中國共產黨的組織和黨內生活向共產國際的報告（一九二六年二月一日）」『中央檔案館叢刊』一九八七年二期）。編集者の配慮によって伏せ字にされた「×××同志」が、一九二五年一月の團三大で團中央總書記に選

出されながら、ほどなくその職を辭した張太雷であることは論をまつまい。また、張太雷はこの頃、「團體の規律を犯した」として黨内處分を受けている（『團廣州地委特別報告 第六號（一九二五年八月二一日）」（前掲『廣東革命歷史文件彙集』甲2、三三七—三三八頁）が、それが王一知との一件によるものかは不明である。附言すれば、黨員間の戀愛トラブルは、王一知の出奔事件にとどまらず、その後も上海の黨組織を悩ませ續けた問題だったようで、黨の上海地區委員會は一九二六年前半に、二度にわたつて特に黨員の戀愛問題に關する通告を出し、男女黨員の「輕率な離合」を戒めている（『上海區委通告 樞字第四十三號（一九二六年三月七日）」、「同 樞字第五十一號（一九二六年四月二七日）」（前掲『上海革命歷史文件彙集』甲1、一四一—一四二、一六三—一六四頁）。なお、共產黨幹部の戀愛問題とその政治面への影響については、前掲鄭超麟「戀愛與政治」と王健民「從「往事如煙」看紅色男女」（『傳記文學』二〇卷四期、一九七二年四月）がいくつかの事例をあげている。

(162) (163) (164) (165) 前掲大塚令三『支那共產黨史』上、七二—七三頁。大塚は、「當時、私は上海大學に居たから、その詳細を知悉して居る」（同七三頁）と語っている。なお、施の社會學系主任就任の事情は注（171）も参照のこと。

(166) 存統「青年所應受的兩重苦痛」（『民國日報』「覺悟」一九二〇年五月二二日）、同「改造家和愛情」（同五月二七日）など。
(167) 鍾復光（一九〇三—）四川省江津縣に生まれる。一九一九年に重慶の省立第二女子師範學校に入學、五四運動に参加したのち、文質彬らと一九二二年春に南京へ行く。一九二三年初めに北京女高師の補習科にはいったが、肺を患い正式入學には至らず。一九二四年春に鄧中夏の勧めもあり、上海に出て上海大學社會學系に入學、まもなく向警子と鄧中夏の紹介で入黨。一時、北京で活動したが、まもなく上海にもどり、一九二五年の五三〇運動に参加。その年の冬に再び咯血して入

- 院したが、それ以前に施存統の求愛を受け、一九二六年春に結婚、その年の冬に女兒をもうける。一九二七年に施存統とともに離黨。その後、翻譯、出版の仕事に従事し、一九四五年に施存統とともに民主建國會に参加。「解放」後は、上海第一女子中學校長、民建總會副處長、勞動學院副秘書長、北京經濟學院辦公室主任等を歴任し、一九八六年に再入黨。
- (168) 鍾復光「火熱の青春歲月」(前掲『文史資料選輯』(全國)總一〇三輯、一五九—一六〇頁)。
- (169) 「武裝解散學校訊 上大全體宣言」(『民國日報』一九二五年六月八日)、および前掲『上海大學』(一九二—一九二七年)一三〇頁。
- (170) 「瞿秋白よりボロジンあて書簡(一九二四年一〇月二日)」(『瞿秋白文集(政治理論編)』第二卷、人民出版社、一九八八年、六七六頁)。
- (171) 前掲「瞿秋白よりボロジンあて書簡(一九二四年一〇月二日)」、「陽翰笙同志的回忆」(前掲『上海大學』(一九二—一九二七年)八三頁)、および周永祥「瞿秋白年譜新編」(學林出版社、一九九二年)一三六頁。なお、瞿秋白の社會學系主任辭職は、系主任の座をねらっていた施存統のめぐらした陰謀によるという説もある(『鄭超麟回憶錄』現代史料編刊社、一九八六年、八九頁)。
- (172) 「瞿秋白よりボロジンあて書簡(一九二四年一〇月八日)」(同(一九二四年一〇月二日))、前掲「瞿秋白文集(政治理論編)』第二卷、六四八—六四九、六七五—六七七頁)によれば、共產黨は、國民黨右派に牛耳られていた『民國日報』の編集權を奪取するため、新聞發行の資金不足に苦しむ葉楚傖に資助打ち切り措置を突きつける形でかれを追いつき、共產黨に近い邵力子を通じて、一九二四年一〇月に一旦は同紙の編集權を握ったようである。『民國日報』をめぐる左右兩派の暗闘については、前掲「鄭超麟回憶錄」八八—八九頁、及び張廷瀛「回憶國民黨上海執行部」(『黨史資料叢刊』一九八四年一期)も参照のこと。
- (173) 平導「上海民國日報之黑幕」(『廣州民國日報』一九二五年二月一日)。
- (174) 瞿秋白「中國國民革命與戴季陶主義」(一九二五年八月)(『瞿秋白文集(政治理論編)』第三卷、人民出版社、一九八九年、三三四頁)。
- (175) 「上海孫文主義學會成立大會」(『孫文主義學會要聞聲明』(『民國日報』一九二五年二月七日、九日)。
- (176) 「邵元沖日記」(上海人民出版社、一九九〇年)二一九頁。
- (177) 前掲「邵元沖日記」二二三—二四頁、および張國燾「我的回憶」第二冊(明報月刊出版社、一九七三年)四六三—四六四頁。
- (178) 「國民黨上海特別市黨部成立大會」(『申報』一九二六年一月四日)、「上海特別市黨部成立大會紀」(『中國國民』二二期、一九二六年一月一日)。
- (179) 左派國民黨の聲明としては、「中國國民黨上海特別市黨部通告」(中國國民黨上海市各區黨部聯席會通告)(ともに『申報』一九二六年一月三日)、右派國民黨の聲明としては「中國國民黨上海特別市初選代表聯合啓事」(『民國日報』一九二六年一月三日)等。
- (180) 「昨日孫中山先生周年紀念大會記」(『申報』一九二六年三月一日)、「全埠市民冒雨追悼孫先生」(『民國日報』同日)。同記事は國民黨の分裂、抗爭には觸れていないが、柳亞子の書簡では、それが對立による分裂開催であったことが述べられている(『柳亞子文集 書信輯錄』上海人民出版社、一九八五年、六七頁)。
- (181) 「國民黨上海執行部第一次至第四次執委會會議記錄」(『黨史研究資料』一九八三年二期)。
- (182) 「施存統同志在寧波市黨員大會之演講詞(一九二六年元日)」(『中國國民』二四期、一九二六年一月二五日)。
- (183) 上海國民黨左派の雜誌『中國國民』の「記者」(沈雁冰と推定される)は、鏡西「今昔之玄廬季陶」(『中國國民』一七期、一九二六年一月四日)。

- (日)にたいするコメントのなかで、「季陶同志は今回、郷魯らにはめられたのである。……現在、季陶同志は日食を終えた太陽のように、本来の輝きをとりもどしている」として、戴季陶を右派から切り離していた。同様の意向は、雁冰(沈雁冰)「季陶同志無恙」(『中國國民』一五期、一二月二九日)にもあきらかである。
- (184) 存統「評戴季陶先生的中國革命觀」(『中國青年』九一・九二期合併號、一九二五年九月一日)。
- (185) 「成立大會紀要」(『中山主義週刊』一期、一九二五年二月二〇日、前掲『上海大學』(一九二二—一九二七年)所收、二二〇—二二二頁)。
- (186) 「三大政策」スローガンの登場とその意義については、狭間直樹「三大政策」と黄埔軍校」(『東洋史研究』四六卷二號、一九八七年九月)参照。
- (187) 惲代英は、廣東の「三大政策」が中山艦事件のうちに、周恩來によって黄埔軍校の左派のために「製造」されたものであった、と述べている(代英「施存統對中國革命的理論」(『布爾塞維克』二卷四期、一九二九年二月)第四章)。
- (188) 「施存統同志在寧波市黨員大會之演講詞」(『中國國民』二四期、一九二六年一月二五日)、「市黨部各部聯席會議錄 宣傳部秘書報告下週工作計劃」(『中國國民』二二期、一九二六年一月一九日)。
- (189) 「周文在同志的回憶」(前掲『上海大學』(一九二二—一九二七年)一〇〇頁)。
- (190) 「昨日婦女界紀念三八節」(『時報』一九二六年三月九日)。
- (191) 「鍾復光同志談施存統」(一九八〇年二月九日)(未刊稿)。
- (192) 鍾復光「我走過的生活道路」(『江津文史資料選輯』第二輯、一九八五年、八六頁)。一説によれば、その廣州行は八月で、陳獨秀の直接の推舉により、戴季陶の中山大學校長就任以前には、校務や教材の決定等は施存統がとりしきったという(王水湘「施存統」(『浙江省青運史研究資料』一九八四年四期))。
- (193) (195) 施存統「自序」(『中國國民黨的組織和訓練』眞美書社、一九二六年二月?)。
- (194) 「鍾復光同志談施存統」(一九八〇年二月九日)(未刊稿)。
- (197) 黃福慶「近代中國高等教育研究 國立中山大學」(一九二四—一九三七)(中央研究院近代史研究所、一九八八年)一七一—一七二頁。
- (198) 前掲黃福慶「近代中國高等教育研究 國立中山大學」(一九二四—一九三七)一七一頁、および施存統「自序」(前掲『中國國民黨的組織和訓練』)。
- (199) 張光宇「武漢中央軍事政治學校」(湖北人民出版社、一九八七年)三五頁。
- (200) (202) 鍾復光「我走過的生活道路」(前掲『江津文史資料選輯』第二輯、八六—八七頁)。
- (201) 武漢軍校の概略については、前掲張光宇「武漢中央軍事政治學校」、および袁繼成、劉繼增、毛磊「大革命時期的武漢軍校和中央獨立師」(『黨史研究資料』一九八二年一期)参照。
- (203) (204) 前掲張光宇「武漢中央軍事政治學校」三〇、一八頁。
- (205) 施存統講、王燦奎記「反蔣運動」(『革命生活』一九二七年四月二日、前掲張光宇「武漢中央軍事政治學校」所收、一九一—一九三頁)。
- (206) 「革命重堅定 永作座右銘——陳老總和兒子的四次談話」(『中國青年報』一九八一年二月二二、一四日)。「中國青年報」の附記は、この四回の談話が近く刊行される『陳毅早年的回憶和文稿』に收録豫定であると説明しているが、實際に刊行された『陳毅早年的回憶和文稿』(四川人民出版社、一九八一年三月)では、四回分の談話のうち、離黨者を厳しく批判した「一九六三年八月二十二日の談話」(施存統に言及した部分を含む)だけが削除されている。
- (207) 蔣永敬「鮑羅廷與武漢政權」(傳記文學出版社、一九七二年)三三三—三四頁。
- (208) 周佛海「逃出了赤都武漢」(蔣永敬輯『北伐時期的政治史料』一九

- 二七年的中國』正中書局、一九八一年所收、三〇四頁。
- (209) 施存統『中央獨立師政治部報告』(『漢口民國日報』一九二七年五月二三日)。
- (210) 陶希聖『潮流與點滴』(傳記文學出版社、一九六四年)九二頁。
- (211) 『中國國民黨中央執行委員會政治委員會第二三次會議』(一九二七年五月二三日)での高語罕報告』(同會議速記録)。
- (212) 施存統『悲痛中的自白』(『中央副刊』一九二七年八月三〇日)、同『第三黨問題』(施存統『中國革命底理論問題』現代中國社、一九二八年所收)。
- (213) 林可彝『從武昌到新堤』(『中央副刊』一九二七年六月二〇日)。
- (214) 可彝『從武昌到新堤』(『中央副刊』一九二七年六月二九日)。
- (215) 符號『我所記得的』(『中央副刊』一九二七年六月一〇日)。
- (216) 『劉少奇より洛甫』(張聞天)あて書簡(一九三七年二月二六日)、『關於大革命歷史教訓中的一個問題』として『黨史研究資料』一九八〇年五期に收録。
- (217) 胡愈之『早年同茅盾在一起的日子裏』(『人民日報』一九八一年四月二五日)。なお、國民革命時期の民衆運動の『過火』については、任全才『關於大革命時期工農運動中的『左』傾錯誤問題之管見』(『四川師範大學學報(社科版)』一九八八年二期)、および易飛先『一戰時期農民運動中『左』傾錯誤初探』(『黨的文獻』一九八九年一期)が、それをやむを得ないものとする従來の大陸での一般的見解に異議を唱え、それが國共分裂の大きな原因の一つであったと明確に指摘している。
- (218) 前掲『中共中央文件選集』第三冊、六〇〇七二頁。
- (219) 血『最近湖北農民運動概況』(『漢口民國日報』一九二七年五月二七日)。
- (220) 前掲茅盾『我走過的道路』上、三三八頁。
- (221) 施存統『悲痛中的自白』(『中央副刊』一九二七年八月三〇日)、同『第三黨問題』(施存統『中國革命底理論問題』現代中國社、一九二八年所收)。
- (222) 符號『我所記得的』(『中央副刊』一九二七年六月一〇日)。
- (223) 前掲陶希聖『潮流與點滴』九六頁。
- (225) 前掲施存統『悲痛中的自白』。
- (226) 『胡蘭畦回憶錄』一九〇一—一九三六年』(四川人民出版社、一九八五年)一六〇頁。
- (227) 華崗『中國大革命史』一九二五—一九二七』(文史資料出版社重印版、一九八二年)の『眞の國民黨左派とはこうした共產黨員のことであつた』という言葉が『左派』の實體を象徴的に示している(二三三頁)。
- (228) 施存統の武漢歸還の期日は明確にし得ないが、かれにつき従っていた林可彝の從軍記録が六月二四日の武漢歸還をもって終わっている(從武昌到新堤』(『中央副刊』一九二七年六月三〇日)ことからして、かれもその前後に歸着したと考えられる。
- (229) 『漢口民國日報』一九二七年七月二日の『中央軍事政治學校啓事』によれば、六月三〇日をもって『中央獨立師』の名稱を取り消すとある。
- (230) 武漢『分共』直前の中共の黨内論争については、江田憲治『瞿秋白と國民革命』(狹間直樹編『中國國民革命の研究』京都大學人文科學研究所、一九九二年)、および最近の中共黨史に關する勞作である緒形康『危機のディスクール 中國革命一九二六—一九二九』(新評論、一九九五年)の第五、六章を参照。
- (231) 『中國共產黨對夏斗寅叛變告民衆書』(一九二七年五月一八日) (前掲『中共中央文件選集』第三冊、一二八—一三三頁)、『工人政治行動議決案』(一九二七年五月二五日) (同、一三四—一三五頁)。
- (232) 前掲『中國共產黨對夏斗寅叛變告民衆書』(一九二七年五月一八日)。
- (233) 『關於湖南事變以後的當前策略的決議』(一九二七年五月二六日) (前掲『中共中央文件選集』第三冊、一三九—一四〇頁)。
- (234) 共產黨側の独自の軍隊創設という方針は、それよりさき、中共第五回大會の『政治形勢與黨的任務議決案』において提起されていた。同決議案のうち、独自の軍隊創設に關する條項は中共の公式文書において

伏せられてはいたが、その後の党内通達では繼承されていたわけである。該決議案の版本間の異同、およびこの間の中共の方針（農民運動、革命指導権、武裝問題）の推移と國共合作の枠組みの破綻については、狭間直樹「武漢時期國共兩黨關係與孫中山思想」（『近代史研究』一九五五年一期）が檢證を加えている。

(235) 「五月指令」の内容は、日本國際問題研究所中國部會編『中國共產黨史料集』第三卷（勳草書房、一九七一年）一四三頁、前掲『コミンテルン資料集』第四卷、一九八一年、二〇七〜二〇八頁、および前掲『北伐時期的政治史料——一九二七年的中國』四三〜四三六頁による。ロイが「五月指令」を汪精衛に手交した時期は、これまで一九二七年六月上旬（六月一日説、五日説等がある）とされてきたが、楊奎松「關於蘇聯、共產國際與中國大革命關係的幾個問題」（『近代史研究』一九九二年一期）は、各種資料によつて、それが六月二日以降（特に二三日から二五日の間）であることを檢證している。本稿はこれに従う。なお、同論文は、「五月指令」が武漢の中共、あるいはロイ、ボロジンのもとに届いたのは、六月四日、ないしは五日であったとする。中共の「五月指令」に對する對應については、史略、趙雲雲「陳獨秀是怎样拒絕共產國際「五月緊急指示」的？」（『中央檔案館叢刊』一九八七年二期）も參照のこと。

(236) A. B. 巴庫林著、鄭厚安等譯『中國大革命武漢時期見聞錄』（中國社會科學出版社、一九八五年）一八五頁。

(237) 施存統「悲痛中的自白」（『中央副刊』一九二七年八月三〇日）。鄧演達が共產黨の解散による革命勢力再結集を口にしていたことは、このほかに、蔡和森「黨的機會主義史」（前掲『中共黨史報告選編』一二九頁）にも見える。同様の構想は、共產黨幹部である譚平山も持っていたとされる（『政治規律決議案（一九二七年十一月一日）』（前掲『中共中央文件選集』第三冊、四八二頁）、および前掲緒形康「危機のディスクール 中國革命一九二六〜一九二九」一〇二〜一〇九、二

五七頁）が、施存統とのかかわりについては不明である。

(239) (240) (241) 前掲施存統「悲痛中的自白」。

(242) 施存統「第三黨問題」（前掲『中國革命底理論問題』所收）。

(243) 「中國國民黨中央執行委員會政治委員會第三次會議（一九二七年六月二〇日）速記録」。

(244) 丘挺、郭曉春「鄧演達生平與思想」（甘肅人民出版社、一九八五年）一二〇頁。

(245) (246) 前掲張光宇『武漢中央軍事政治學校』一二五、一二五〜一二六頁。

(247) (248) 吳忠亞「討平楊、夏叛亂的戰場實況」（『武漢文史資料』一九八三年四期、九四〜九五頁）。

(249) 南昌蜂起直前に、張發奎信任の可否をめぐる中共内部に論争のあったことは、「張國燾より中央臨時政治局、ならびに擴大會議あて書簡（一九二七年一月八日）」（南昌八一紀念館編『南昌起義』中共黨史資料出版社、一九八七年、六八〜七五頁）、李立三「黨史報告（一九三〇年二月一日）」（前掲『中共黨史報告選編』二六七〜二六八頁）に見える。また、武漢軍校の學生であつた林昌熾が一九二七年八月六日に武漢國民黨中央に送つた上書は、中共中央の意を受けた軍校指導者の惲代英らが、軍校師生を張發奎軍に編入すべく、張と再三交渉していたと指摘している（林昌熾上武漢中央執行委員會報告共產黨把持軍校破壞國民革命事實函）（羅家倫編『革命文獻』第一六輯、中央文物供應社、一九五七年、「寧漢分裂與合作」七二頁）が、張發奎は回想の中で、確かにその事實があつたことを認めている（楊天石「張發奎談南昌起義」（『檔案與史學』一九九五年二期）。なお、共產黨は七月初旬にも軍校師生に動員令を下し、國民黨への對抗姿勢を示そうとしたことがあつたという（蔡和森「黨的機會主義史」（前掲『中共黨史報告選編』一二九頁）、王唯廉「南昌暴動史」（前掲『現代史料』第一集）。周恩來「關於黨的「六大」的研究（一九四四年三月三、四日）」（周

- (251) 恩來選集」上、人民出版社、一九八〇年、一六九頁。
- (252) 「中央軍校舉行畢業式」(『漢口民國日報』一九二七年七月一九日)。
- (253) 前掲『胡蘭畦回憶錄』一九〇一—一九三六年、一七四—一七五頁。
- (254) 鍾復光「我走過的生活道路」(前掲『江津文史資料選輯』第二輯、八七頁)。
- (255) 代英「施存統對中國革命的理論」(『布爾塞維克』二卷五期、一九二九年三月)第六章。
- (256) 前掲陶希聖『潮流與點滴』一〇〇頁。陶は自分が共產黨員ではなかった様に記しているが、矛盾はかれが黨員であったと述べている(前掲『我走過的道路』上、三一八頁)。
- (257) 本章の以下の引用はとくに斷らないかぎり、施存統「悲痛中的自白」(『中央副刊』一九二七年八月三〇日)による。
- (258) 國共合作時期において、施存統は孫文三民主義を徹底的に批判する文章を書いたことがあったが、それは黨の意向によって公表されなかったという(代英「施存統對中國革命的理論」(『布爾塞維克』二卷四期、一九二九年二月)第一章)。少なくとも、原則的には中共の理論家も、三民主義の枠組みを越えることは許されていなかったことが知れる。
- (259) 國共合作發足當初の中共の公式見解は、「李大釗對共產分子加入國民黨之聲明」(前掲『革命文獻』第九輯、三七—四八頁)参照。同文章は、「北京代表李大釗意見書(一九二四年一月)」として『李大釗文集』下(人民出版社、一九八四年)七〇三—七〇六頁にも收録されている。
- (260) 施復亮「一個誠實的聲明」(『民主抗戰論』進化書局、一九三七年所收)。
- (261) 代英「施存統對中國革命的理論」(『布爾塞維克』二卷四期、一九二九年二月)第二章。なお、共產黨による三民主義評價の轉換は、秋白「馬克思主義還是民生主義?」(『布爾塞維克』二期、一九二七年十二月)によって、これより先にすでに始まっていた(藤井昇三「一九三〇年代の中國共產黨と三民主義」(藤井編『一九三〇年代中國の研究』アジア經濟研究所、一九七五年))。
- (262) 施存統の離黨聲明が、それなりに眞摯なものとして受けとめられたことについて、徐善輔「共產黨分裂史」(『中國共產黨發起人分裂史料』(龍文書店、一九六八年、五五頁))は、「この生死禍福に關わる文章は、とりわけ慟哭を誘うものであり、その態度の謹直さ、情感の深さは、たとえ冷酷無情な人間が讀んでも感動せざるを得なかった」と述べている。
- (263) 例えば、思想の科學研究會編『共同研究 轉向』(改訂増補版)(平凡社、一九七八年)の下巻が収める「現代世界と轉向へ共同討議」において、參加者の一人で、中國に關するコメントを求められていた竹内好は、中國での轉向問題について、ほとんど何も語っていない。管見の限りでは、新島淳良「日本と中國における共產主義運動」(『日本文化と中國』(『中國文化叢書』一〇)大修館書店、一九六八年)が、三〇年代中國の偽裝轉向について、日本と比較しながら若干の概説的説明をしているのは唯一の例である。いうまでもなく、中共黨員における離黨問題が「轉向」問題として検討されないのは、三〇年代半ばに一時日本語の影響で使われた中國語の「轉向」概念が、ほどなく強烈な正統・異端意識に支えられた「叛變」によって代わられてしまったというイデオロギッシュな要因にもよるだろう。
- (264) 「魯迅より曹聚仁あて書簡(一九三三年六月一八日)」(『魯迅全集』第二卷、人民文學出版社、一九八一年、一八五頁)。
- (265) 「讀者的迴聲」(『布爾塞維克』二期、一九二七年一〇月)。
- (266) 陳獨秀「告全黨同志書(一九二九年二月一〇日)」(『陳獨秀著作選』第三卷、上海人民出版社、一九九三年、一〇二頁)。
- (267) 存統「略談研究社會科學——也是一個書目錄」(『中國青年』二六期、一九二四年四月)。
- (268) 蔡和森は、李漢俊が結黨當初においては黨内有數の理論家であったものの、かれは實踐よりも研究を重視する「合法的マルクス主義派、經

- 濟派、少數派^{ジョウショウハ}」であつて、そのゆゑに間もなく黨を追われたと激しく批判している（蔡和森「中國共產黨史的發展（提綱）——中國共產黨的發展及其使命（一九二六年）」（前掲『中共黨史報告選編』二七、三三頁）。
- (270) 李立三「黨史報告（一九三〇年二月一日）」（前掲『中共黨史報告選編』二六二頁）。
- (271) 「本報緊要啓事」（『漢口民國日報』一九二七年九月一日）。
- (272) 小島「支那の社會科學作家（二）」（『滿鐵支那月誌』第九年八・九・一〇合併號、一九三二年一〇月）。
- (273) 「讀者的迴聲」（『布爾塞維克』二期、一九二七年一〇月）。
- (274) 前掲小島「支那の社會科學作家（二）」。
- (275) 前掲施復亮「一個誠實的聲明」。
- (276) 當時、改組派の雜誌に發表されたかれの文章は、施存統「目前中國革命問題」（復旦書店、一九二八年）、同「中國革命與三民主義」（復旦書店、一九二八年）同「中國革命底理論問題」（現代中國社、一九二八年）に收められている。
- (277) 前掲施復亮「一個誠實的聲明」。
- (278) 陳公博「改組派的史實」（查建瑜編『國民黨改組派資料選編』湖南人民出版社、一九八六年、四四頁）。
- (279) 前掲施復亮「一個誠實的聲明」。
- (280) 代英「施存統對中國革命的理論」（『布爾塞維克』二卷四、五期、一九二九年二、三月）。
- (281) 前掲代英「施存統對中國革命的理論」第五章。
- (282) 前掲代英「施存統對中國革命的理論」第六章。
- (283) 李昂「朱其華」（『紅色舞臺』（勝利出版社、一九四六年北平版）八八頁）。
- (284) 前掲施復亮「一個誠實的聲明」。
- (285) 鍾復光「我走過的生活道路」（前掲『江津文史資料選輯』第二輯、八八頁）。
- (290) 施存統の「中間路線」、あるいは民主諸黨派時期の活動については、以下の先行研究がある。平野正「施復亮と中間路線論」（『中國の知識人と民主主義思想』研文出版、一九八七年）、齊衛平「論施復亮與抗戰勝利後的中間路線」（『近代史研究』一九八八年三期）、水羽信男「施復亮の「中間派」論とその批判をめぐって」（今永清二編『アジアの地域と社會』勁草書房、一九九四年）。
- (291) 鍾復光「我走過的生活道路」（前掲『江津文史資料選輯』第二輯、八九頁）。
- (292) 「革命重堅定 永作座右銘——陳老總和兒子的四次談話」（『中國青年報』一九八一年二月一四日）。
- (293) 齊衛平「施復亮傳」（『中國各民主黨派史人物傳』第一卷、華夏出版社、一九九一年、三四一頁）。
- (294) 蘇夏「施光南和他的音樂」（『音樂研究』一九九一年四期）。
- (295) 胡厥文等「民主革命時期的英勇戰士施復亮同志」（『人民日報』一九八二年六月一七日）より再引用。
- (296) 齊衛平「施復亮傳」（前掲『中國各民主黨派史人物傳』第一卷、三四一頁）。
- (297) 前掲蘇夏「施光南和他的音樂」。

附錄 一 外務省外交史料館所藏資料

本附録は、外務省外交史料館所藏の外交史料のうち、日本留學時期の施存統、および創立時期中國共產黨に關する未發表文書を掲げる。配列は文書の綴りごとにし、同一綴りの文書内では、時期順とする。採録にあたっては、行がえ等の技術的加工をおこなったほかは誤字、脱字もふくめて原文書にはまったく手を加えていない。ただし、必要と思われる箇所にのみ「」を用いて注を附した。また、本稿注の引用の便のために各文書の冒頭にアルファベットを附した。この資料の發表を許して下さった外交史料館に感謝する。

A

「過激派其他危險主義者取締關係雜件 外國人ノ部 支那國人」(分類項目四—三—二—二—二—二—二—二)

【A—1】

大正拾年壹月拾壹日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外秘乙第一九號 大正十年一月十日

無政府主義宣傳雜誌「自由」ノ通信者ニ關スル件

支那上海ニ於テ發行スル無政府主義宣傳雜誌「自由」第一號(九年十二月號)ニ在日本通信所トシテ東京市神田中國青年會謝晉青及東京府高田村一五五六、三崎館存統ト記載シアルヲ以テ右存統ナルモノヲ内偵スルニ前記三崎館方ニ昨年七月頃ヨリ支那浙江省金華縣生施存統ナルモノノ下宿シ東京同文書院ニ在學旁常ニ宮崎滔天方ニ出入シ猶支那新聞雜誌ヲ講讀シ居ルモノ、外存統ト稱スルモノナク或ハ施存統ナルモノニ非ラサヤト認メラル、ニ依リ引續キ行動内偵中ナリ
追テ右存統ハ「非孝」ト題スル出版物ニ孝ハ一種ノ奴隸道德ニシテ孝子ハ奴

隸ノ別名ナリ忠ハ專制君主ガ政策上利用シタルモノニ過キサルモノナリトノ極端ナル儒教排斥忠孝否認論ヲ掲ケ以テ之ガ宣傳ニ努メツ、アルモノナリ
(了)

【A—2】

大正拾年壹月拾七日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外秘乙第五二號 大正十年一月十五日

「アナーキズム」宣傳文書ノ件

昨十四日東京府下高田村一五五六番地三崎館施存統宛ニ中華民國安徽蕪湖ヨリ左記ノ如キ「アナーキズム」宣傳文書ヲ送付シ來レルヲ發見シタルニヨリ目下右施存統ノ言動ニ付嚴密内偵中ナリ

追テ該文書中ニ「安社」トアルハ秘密結社ト認メラル

尙右施存統ニ關シテハ本月十日外秘乙第一九號ヲ以テ既報ノ通無政府主義宣傳雜誌「自由」又ハ「非孝」等ノ出版物ヲ以テ之ガ宣傳ヲ爲ス要注意人物ニシテ昨年六月頃宮崎滔天ナルモノ本邦ニ同伴シタルモノ、趣ナリ〔注〕

左記(原漢文)

安社

我等ノ宗旨(目的)

- 1、「アナーキズム」ノ眞理ヲ傳播スルコト
 - 2、各地同志ノ活動的消息ヲ紹介スルコト
 - 3、同志ト聯絡シ社會革命の事業ヲ起スコト
- 我等ノ組織

- 1、社員タルニハ社員一人ノ紹介ニ由ル
- 2、「アナーキズム」ニ關スル書類ヲ販賣ス
- 3、本社ノ事務ハ各社員ノ自由擔任トス
- 4、社費ハ社員各自ノ力量ニ應ジ醸出ス

現在社員

剛佛 天眞 水心 昨非 是我 悟眞
通信處—暫ク蕪湖第五中學呂天眞宛代收

以上鐵筆

若シ「アナキズム」ニ關スル書籍アラバ請フ其ノ書名ヲ通知アレ

以上自筆

(了)

〔注〕「昨年六月頃宮崎滔天ナルモノ本邦ニ同伴シタルモノ、趣ナリ」とあるが、當時宮崎滔天、および宮崎龍介ともに上海には行っていない。

ただし、施存統の「致諸位朋友信」(『民國日報』「覺悟」一九二〇年六月二〇日)は、自身が肺病療養のため、日本に赴くので、以後の施あての通信は「日本東京市外高田村目白二六三六」(東京の宮崎邸は「高田村目白三六二六」)に送られたいと通告しているところからみて、當初より宮崎親子のもとに暫時寄寓する手はずだったらしい。なお官憲側の資料は、施存統の來日を七月一〇日とし(附録「C-1」同「C-2」)、「施存統證言」(附録「二」)は七月一四日とするが、宮崎親子のもとに着いたのは、六月二六日である(宮崎龍介より伊藤燐子あて書簡(一九二〇年六月二六日)「宮崎智雄氏所藏」)。

【A-3】

大正拾年四月廿五日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外祕乙第五二三號 大正十年四月二十三日

要注意支那人施存統ノ行動

府下高田村高田一五五六、三崎館止宿要注意支那人施存統ノ行動ニ關シテハ本年一月十日外祕乙第一九號ヲ以テ既報ノ通り全人ハ東京同文書院ニ通學ノ

傍ラ無政府共產主義ヲ研究シ且支那内地ニ於ケル全主義者ト連絡ヲ採リ之カ宣傳ヲ爲シ居レル疑ヒアリ全人ハ目下所在不明ニシテ全主義者ト認メラル漢俊(號?)ナルモノト共ニ我國社會主義者堺利彦、高津正道、山崎今朝彌等ト交通シ彼等ノ著述ニ係ル全主義宣傳雜誌其ノ他ノ印刷物等ヲ翻譯ノ上支那内地人ニ紹介シ居ル疑ヒアルノミナラス全人ハ在上海鶴某〔注1〕ナル全主義者ト共ニ我社會主義者ト相謀リ之カ宣傳方法ヲ講スヘク近ク上海ニ於テ秘密會ヲ開催スル〔注2〕疑ヒアリ而シテ前記鶴ヨリ全人ニ送レル近信ニ依レハ日本社會主義者ト目下秘密出版物ヲ發行スヘク準備中ナル趣ニシテ該出版物ノ送附方申越セシ事實アル等ヨリ目下右漢俊ナルモノ、所在内偵中ナルト共ニ存統ノ行動ニ就テハ嚴密注意内偵中ナリ

〔注1〕「鶴」は李達の筆名である。

〔注2〕「近ク上海ニ於テ秘密會ヲ開催スル」とは中國共產黨第一次全國代表大會ではなく、極東各國の共產主義者を集めて、コミンテルンとの連絡、資金の授受のために開かれた會合(日本には朝鮮人林某(李増林?)がその連絡員として二、三月ごろに來訪し、これを受けていわゆる「日本共產黨暫定執行委員會」が結成され、代表として近藤榮藏が五月に上海に渡った)のことを指すものである。

【A-4】

大正拾年四月卅日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外祕乙第五六〇號 大正十年四月二十九日

要注意支那人ノ件

府下高田村字高田一五五六三崎館止宿要注意支那人東京同文書院在學施存統ノ行動ニ關シテハ本年一月十日外祕乙第一九號及本月二十三日外祕乙第五二三號ヲ以テ既報(鹿兒島(貴)縣ニハ通報セス)セシ如ク本人ハ無政府共產

主義思想抱持者ニシテ彼ノ露國過激派宣傳支部在上海「デモクラチック」俱樂部其ノ他在支那全主義者陳獨秀等ト連絡ヲ採リ之カ宣傳ニ從事シ居ルト共ニ我國社會主義者ト交通シ居ルモノナルカ尙本邦各地在留支那人ト連絡ヲ採リ之カ宣傳ニ從事シ居ル疑アリ在鹿兒島在留支那人「周」事「佛海」トハ深キ關係ヲ有シ居ルモノノ如ク全人ヨリ本月十九日附（鹿兒島局消印）ニテ左記ノ如キ文書ヲ郵送シ來レリ

追テ該文書ニアル「C」雜誌ナルモノハ彼等カ主張スル無政府共產主義宣傳機關雜誌ト認メラルルニ依リ目下在京留日支那學生ニ對シ嚴密内偵中ナリ

左記

存統兄

昨日獨秀ノ來信ニ接ス曰ク上海、湖北、北京各處ノ全志ト協商ス我等兩人ヲ駐日代表トナシ日本全志ト連絡セシメントス日人ノ間ニハ我等ノ間ニ此ノ團體アルヲ知ラサル者多シ我等ハ正ニ盡力セサルヘカラス但我ニハ二個ノ困難アリ

(一) 我ハ明年鹿兒島ヲ去ル此ノ一年間此ノ偏僻ノ地方ニ居住シテハ何事モ出來ナイ

(二) 我大學ノ志願ハ京都ニ在リ然シ日人ト連絡スルニハ矢張り不便ナリ以上二個ノ困難アリ我ハ代表ノ虛名ヲ擁シ實ニ慚愧ニ堪ヘス之ヲ獨秀ニ轉告ヲ請フ君ハ東京ニ居ルカラ非常ニ便利テアル日語ヲ早ク練習セラレヨ日本ニ於テハ代表ノ名アリテハ事ヲ成スニ不便ナリ君ハ如何ニ思フカ「C」雜誌第五號「注1」ハ原稿未ダ集ラス君ノ原稿ヲ頼ム我モ盡力スヘシ經費廣東全志ノ所得税ニ依リテ維持ス毎月百圓以上ハ五圓二百圓以上ハ十圓ヲ收ム秀松ハ既ニ露西亞ニ行ケリ「注2」彼ノ英語ハ熟セリヤ否ヤ我ニ告ケラレヨ

弟佛海

「注1」「C」雜誌とは、いわゆる上海共產主義小組が刊行していた機關誌『共產黨』のこと。第五號は一九二二年六月七日に刊行されたが、周

佛海の「奪取政權」(署名：無懈、一九二二年五月一日執筆)と施存統の「我們要怎樣樣幹社會革命？」(署名：CT、一九二二年五月一六日執筆)が掲載されている。

「注2」「秀松」は上海共產主義小組の發起人の一人でもある俞秀松のこと。かれは上海の社會主義青年團を代表して、青年共產國際(キム)の第二次大會に参加するため、三月末に上海を發つて陸路モスクワに向かった。

【A-5】

大正拾年五月廿壹日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外秘乙第六九一號 大正十年五月二十日

要注意支那人ノ件

客月二十九日外秘乙第五六〇號ヲ以テ既報セシ在鹿兒島居住支那人號「佛海」ハ全月二十八日(鹿兒島局消印)更ニ左記ノ如キ通信ヲ府下高田村宇高田一五五六、三崎館止宿要注意支那人「施存統」宛ニ郵送セリ

追テ該通信中ニ「我等兩人ヲ駐日代表云々」トアルハ彼ノ無政府共產主義者ノ首謀者タル陳獨秀カ全主義宣傳代表トシテ右「佛海」及「施存統」ノ兩名ヲ日本ニ代表トシテ駐在セシムルノ意ナルヘク又李達トアルハ昨年八月飯國シ現ニ上海中華民學生聯合總會理事並上海留日學生救國團長兼上海中華書局編輯局員タル元留日學生總會文牘科主任タリシ李達ト全一人ナルヤニ認メラル而シテ彼等ハ互ニ連絡ヲ取り種々ナル方法ヲ以テ全主義ノ宣傳ニ努メ居ルヤノ疑ヒアルヲ以テ引續キ其行動嚴重注意中ナリ

記 (譯文)

存統兄

弟佛海

前ニ一信ヲ寄ス既ニ接受セラレ候事ト存候陳獨秀ガ我等兩人ヲ駐日代表タラシメントスル事ニ對スル貴意如何?

僕ハ三月中旬ニC雜誌ニ一文ヲ草セントス其内容ハ我等ハ政權ヲ奪取セサルヘカラスト云フニ在リ現在一般ノ青年ハ皆政治ヲ談スルコトヲ忌ムモ僕ハ彼等ニ政權ノ必要アルコトヲ説カントス四月ノ改造ハ發賣禁止トナレルモ僕ハ皆得タリ中ニ山川均ノ社會主義ト國家ト労働組合アリ僕ハ之ヲ翻譯シテ新年ニ登載セリ〔注1〕河上肇ノ斷片ハ李達ガ譯シテC雜誌ニ登載スル筈〔注2〕兄ノ原稿ヲ希望ス

以上

〔注1〕山川均「社會主義國家と労働組合」〔改造〕一九二二年四月號は周佛海譯「社會主義國家與労働組合」として『新青年』九卷二號（一九二一年六月）に掲載された。

〔注2〕河上肇「斷片」〔改造〕一九二二年四月號は、李茂齋譯「斷片」として『曙光』二卷三號（一九二二年六月）に掲載されたが、C雜誌すなわち『共產黨』には掲載されていない。李茂齋が李達であるかは不明。

【A-6】

大正拾年五月廿六日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外秘乙第七二號 大正十年五月二十五日

要注意支那人「施存統」ノ行動

屢報セシ府下高田村字高田一五五六、三崎館止宿要注意支那人「施存統」ハ本月八日上海佛租界白爾路三益里五號「邵仲輝」及力子（號？ 又ハ變名？）宛ニ左記意味ノ通信ヲ發セリ

左記

「ソベエツト」ノ性質 今日山川均先生ノ「ソベエツトノ研究」〔注1〕ヲ讀ム眞ニ價値アル文章ナリ但シ小生ハ病氣ニテ完全ニ翻譯スルヲ得ス今其梗

概ヲ譯出スレハ

共產主義ノ理論ヲ以テスレバ「ソベエツト」ハ即チ無産階級ノ專政的國家組織ニシテ換言スレハ即チ反對階級ニ對スル強制組織ナリ故ニ階級對立ノ消滅ト共ニ全社會ハ悉ク無産階級ニ同化セラレ吸收セラレテ國家組織ノ「ソベエツト」トナリ漸次其ノ職分ヲ失去ス換言スレバ「ソベエツト」ハ革命的過渡期ノ政治組織ナリ此ノ組織セラレタル強制力ノ「ソベエツト」ハ完全ニ無用ノ時ニ到リ尙一個ノ労働組合ヲ殘スノミ我等ハ之ニ由リテ「ソベエツト」ノ性質ノ大要ヲ明ニシ得ルナリ

支那ノ労働問題、小山清次君ハ支那労働者ノ研究〔注2〕中ニ曰ク全支出中生存ヲ満足シ慾望ヲ満足スルニ足ル消費ノ比例ハ獨逸労働者ヲ最大トナス（八三パーセント）日本労働者ハ其ノ次（八二パーセント）米國労働者ハ其ノ次（八一パーセント）支那労働者ハ最少ニシテ（七二パーセント）ナリ現在支那労働問題中最重要ノ部分ハ如何ニシテ労働者ニ充分ノ食物ヲ供給スルヤニ非スシテ實ニ如何ニシテ相當ノ職業ヲ供給スルカニアリ失業問題ハ支那労働問題中ノ最重要ノ部分ヲ占ム然シテ此ノ問題ハ資本主義ノ下ニ於テハ到底解決ノ方法ナシ（存統）

力子君ヨ僕ノ病ハ依然舊ノ如シ且ツ種々煩悶ヲ加フ讀書數十分ニシテ頭ハ混亂シ毎日靜座スルコトハ實ニ困難ナリ僕ハ何モ考ヘマイトスルケレドモ又色々考ガ浮ビ來ル一昨日ハ煩悶ニ堪ヘス依テ青年會〔注3〕ニ至リ朱君〔注4〕ニ面會セリ「赤瀾會」〔注5〕ノ宣傳紙及信友會〔注6〕ノ宣傳紙共ニ譯文ニ誤アルヲ見タリ日本ノ同志ニ對シ申譯ナキ故登載スルコト勿レ僕ハ近來毎日日本警察ニ騷擾セラル眞ニ惡ムベシ

（存統） 八日

〔注1〕山川均「ソヴェエトの研究」〔改造〕一九二二年五月號のこと。

〔注2〕小山清次「支那労働者研究」（續支那研究叢書第二卷、東亞實進社、一九一九年一月）のこと。

〔注3〕神田にあつた中華基督教青年會館のことであらう。

〔注4〕「朱君」とは施存統が留日時期に交友のあった朱鳴田のことと思われる。

〔注5〕「赤瀾會」は日本社會主義同盟の周圍に集まつた山川菊榮、堺眞柄らの女性たちによつて一九二一年四月二四日に結成された社會主義的婦人團體。

〔注6〕東京活版印刷工組合信友會のこと。當時における最も戰闘的な労働組合のひとつであつた。

【A-7】

大正拾年六月廿日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外祕乙第九〇七號 大正十年六月十八日

要注意支那人ノ行動

府下高田村一五五六、三崎館止宿

施存統

右者屢報セシ如ク無政府共產主義思想ヲ抱持シ我が國社會主義者ト交通シ居ルヤノ疑ヒアル要注意支那人ニシテ近來其行動看過シ難キモノアルヨリ目下警戒中ノモノナルガ昨十七日當廳外事課員ニ對シ左ノ如ク語レリ

左記

余ハ上海ニテ「戴天仇」ヲ師トシ普通學ヲ修メタル後經濟學ヲ修メントノ目的ニテ日本ニ渡來セリ其ノ際「戴天仇」ヨリ宮崎氏ニ紹介サレ全人ノ盡力ニヨリ目下ノ宿所ニ止宿スルヲ得タリ目下午前中ハ專心英語ノ獨習ヲ爲シ午後ハ日本語及經濟書等ヲ研究シツツアリ而シテ準備ナラハ慶應大學ニ入學シ經濟學ヲ學ブ意嚮ナリ

一、渡來後毎月平均約一百圓ノ學資ヲ自宅ヨリ受ケ居レリ余ノ郷里ハ僻村ニテ農業ヲ營ミ居レリ故ニ交通不便甚タシ從テ爲替等ノ送金ニ就テハ不熟ノ爲メ上海ニ出テ「戴天仇」氏ニ托シテ送金ヲ受ケツツアリ「戴」氏ハ目下

廣東方面ニ在リ余ハ三月末送金二百圓ヲ受ケ四月分迄ノ宿料ヲ支拂ヒタルノミナルヲ以テ近ク送金ナキニ於テハ宿料ノ支拂ニ差支フル譯ナリ但シ「戴」氏不在ナルモ同氏宅ヨリ送金サルル事ナリ居レハ心配スルニハ當ラス

一、當地日本人中ニテハ宮崎龍介以外一人ノ交友ナシ支那人ハ全郷人帝大生「范壽康」中國青年會幹事「馬伯援」書籍販賣ニ從事シツツアル「謝晉青」ノ三名ト交際アルノミナリ「羅豁」トハ面識アルモ交際ナシ「謝」氏ハ余ヲ訪問シタル事數回アリ余モ亦時々神田方面ニ至ルトキハ青年會ニ立寄り「馬」及「謝」氏等ト談話ヲ交ス事度々アリ然シ日本社會主義者トハ交通セシコト一回モナシ、而シテ余ハ曾テ北京ニ遊學セシ際「胡適」先生ニ親シク交ハレル〔注〕ガ全人ハ余ノ尤モ崇拜スル一人ナリ「陳獨秀」ガ言論思想ヲ發表シツツアリタル際余ハ全人ノ說ニ感服シツツアリシガ今や廣東政府ノ官吏ト爲リ（教育部廳長）タルヲ以テ今日全人ハ自由ノ言論ヲ爲シ得サル狀況ニアリテ最早思想界ノ人ニアラス其ノ他我が支那人ノ社會主義者ニ、三名交際アリ

一、余ハ社會主義者ニアラス經濟問題研究ノ爲メニハ社會主義ノ研究ヲ爲ス是レ亦已ヲ得サルニアラスヤ即チ此ノ見地ヨリシテ「マルクス」ノ主義ヲ研究シツツアリ從テ労働問題、社會問題、婦人問題、選舉運動ヲ研究スル亦已ムヲ得スト云フヘシ故ニ社會主義ヲ研究スト雖モ余ハ社會主義者ニアラス從テ主義ノ宣傳等モ亦爲シタル事ナシ

一、最近警察ハ余ニ追尾シ余ノ一舉一動ヲ束縛スルコト甚タシ奇怪ニ堪ヘス而シテ宿主ヨリハ轉宿方ヲ要請サル等甚タ困窮シ居レリ仍テ宮崎氏ニ其ノ事情ヲ陳述シ余ニ代リテ官憲側ニ余ノ立場ヲ明カニサレンコトヲ乞ヒ置キタリ云々 以上

〔注〕施存統は、北京での工讀互助團運動に参加していた一九二〇年二月二四日の夜に、胡適のもとを訪れ、夜半まで語り合ったことがあった（胡適日程與日記 九年二月廿四日）（「胡適遺稿及秘藏書信」第一四卷、黃

山書社、一九九四年、二五九頁。

【A—8】

大正拾年六月廿參日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外秘乙第九三〇號 大正十年六月二十二日

要注意支那人「施存統」ノ行動

府下高田村字高田一五五六、三崎館止宿要注意支那人東京同文書院在學光亮事「施存統」ハ屢報セシ如ク無政府共產主義思想抱持者ニシテ其ノ行動警戒中ノモノナルガ去月二十六日上海佛租界白爾路三益里五號太朴事「邵仲輝」〔注1〕ニ對シ全主義ニ關スル左記ノ如キ通信ヲ爲シタル〔注2〕外在上海「周白棟」〔周白棟〕ト文通シ居レル事實アリ且下引續キ注意中ナリ

左記

一、邵仲輝ニ宛テタル通信 (原漢文)

太朴先生、五月十八日君ノ「覺悟」上ニ於テ我ニ答フル書〔注3〕ハ今日見タリ、我ノ君ニ對スル意見ハ一部分承認セラレタリ我ガ支那社會革命ノ意見ハ既ニ一文ヲ某雜誌ニ寄セタリ〔注4〕、御一覽ノ上ハ御指教ヲ乞フ、我ガ現在ハ唯大様ヲ説キ君ニ答フヘシ

我ガ重要思想ヲ簡單ニ列舉スレハ

- 一、我ハ經濟組織ノ變遷ヲ承認ス、何國ヲ問ハス皆同様ナリ、各國ガ工業制度ニ達シタルニ支那ノミ農業制度ヲ死守シ得ル理ナシ
- 二、我ハ經濟組織ハ社會組織ノ基礎ナリト認ム、故ニ何種ノ社會主義タルヲ問ハス強固ナル經濟的基礎ノ上ニ築カサレハ實現スルヲ得ス
- 三、我ハ若シ共產主義ガ圓滿ニ發達スレハ産業ハ必ス發達シ資本ハ集中スヘシト認ム
- 四、近代生産制度ハ小規模ヨリ大規模ニ進ム各産業間ニハ互ニ關係アリ故ニ經濟上ノ統一機關ヲ要ス

- 五、支那ハ産業ノ後進國ナリ故ニ現在ニ於テハ共產主義ヲ實行スルニ足ラス
- 六、支那ハ最短期間ニ工業制度ヲ作り共產主義ヲ實現スルノ外法ナシ
- 七、支那ノ工業ハ發達セサルヲ以テ總同盟ノ手段ヲ以テ舊社會ヲ倒スヲ得ス故ニ先ツ大多數ノ覺醒ヲ要ス
- 八、支那ノ農民ノ三分ノ二ハ自作農ナリ、職工ノ十中八九ハ手工業ナリ故ニ共產主義ヲ行フコトハ困難ナリ

九、共產主義ハ目的ナリ労働專制ト中央集權ハ手段ナリ

一〇、圓滿ニ共產主義ニ到達セントスレハ生産力ヲ増加セサルヘカラス支那ノ生産力ハ低シ現在ハ各人ノ要スル所ヲ取ルノ理〔以下不明〕

一一、何主義ト雖モ決シテ一足飛ヒニ成功セス幾多ノ過程ヲ經サルヘカラサルナリ

以上ハ我ガ君ニ對スル意見ニ非スシテ我ガ社會ニ發表セント欲シタル意見ナリシナリ我ハ舊社會ヲ顛覆シテ無産階級ノ國家ヲ建設セントス我ノ國家ニ對スル見解ハ一階級ガ他ノ階級ヲ壓迫スルノ機關ナリト見ルナリ階級一日存在スレハ國家ハ即チ一日存在ス我等ハ國家ヨリ無産階級ノ特權ヲ建設スルニ非スシテ國家ヨリ一切ノ階級ヲ撤廢スルヲ要スルナリ、階級ガ一日一日消滅スレハ國家ノ權力モ亦一日一日縮少ス階級ガ完全ニ消滅スルニ至リテ國家ハ其ノ效ヲ失フ故ニ我等ノ共產社會モ亦一個ノ無國家ノ社會ナリ(政府ハ自然ニ無キナリ)其ノ時ニ至リテ生産分配等ノ事ハ労働組合ニテ管理シ教育等ノ事ハ別ノ自由團體ニヨリテ處理ス實際ヨリ見レハ國家ハ一種ノ共產主義實現機關ナリ、共產社會ヲ建設スル人ハ必ス確實ナル者ナルヲ要ス無産階級ガ信用ナケレハ共產主義ハ到底實現シ得サルナリ、支那ノ無産階級ハ多クハ無自覺無訓練ニシテ組織ナシ若シ短時日ニ自覺アリ訓練アリ組織アラシメントセハ勢ヒ政治ノ力ヲ借ラサルヘカラス

無産階級ノ政權掌握必要ノ理由ハ次ノ如シ

- 一、政治ノ權力ヲ以テ反革命派ヲ壓伏スルコト
- 二、政治ノ權力ヲ以テ工業ヲ發展シ共產主義ノ基礎ヲ増進スルコト
- 三、政治ノ權力ヲ以テ無産階級ヲ訓練スルコト

四、政治ノ權力ヲ以テ漸々ニ私有土地ヲ沒收スルコト

五、政治ノ權力ヲ以テ強迫教育ヲ實施スルコト

六、政治ノ權力ヲ以テ生産事業ヲ調和スルコト

以上數種ノ最重要ナル理由ハ政權ヲ掌握スレハ二種ノ利アリ

(一) 主義宣傳ノ障礙ヲ除去スルコト (二) 每年數萬圓ノ收入ヲ得ルコト、之ハ即チ我等ガ政府ヲ顛覆セル後此ノ幾萬圓ヲ以テ正シキ事業ヲナシ得ルコト、或ハ曰ク支那人ハ天性上政治ニ興味ナシト是レ實際ノ事實ナリ然レトモ之ハ天性上政治ニ興味ナキコトハ決シテ固定的ニ非ス之ヲ改變シ得ルナリ歐洲ノ労働者ヤ女子ハ最初ニ政治ニ對シテハ何等興味ナカリシナリ然レトモ現在ハ即チ然ラス數千年專制淫威ノ下ニ屈服シタル人民ハ政治ニ對シ興味ナキハ當然ナリ支那人民ノ政治ニ對シテ興味ナキハ決シテ支那ノ幸ニ非サルナリ、彼等ガ政治ニ興味ナキ爲メニ尙專制淫威ノ下ニ屈服セルナリ彼等ニ政治ニ對スル興味ヲ引起サシムルニハ二個ノ方法アリ

(一) 適當ノ方法ヲ施スコト (二) 彼等ヲシテ政治運動ニ參與セシムルコトナリ數千年ノ歷史上傳來ノ習慣ハ經濟組織ノ變改ニ依リテ漸々改變セラレサルヘカラス以上ノ所説ニ依リテ我ハ極力「マルクス」主義ヲ支那ニ行フコトヲ主張ス、君ハ某ノ主義某ノ學說ニ從フヲ確實ニ確滅シ得スト云フモ然レトモ何人モ次ノ三件ヲ確實ニ證明スルヲ得ズ (一) 「マルクス」主義ハ完全ニ不合理ナルコト (二) 支那ハ「マルクス」主義ヲ實行シ能ハサルコト (三) 我等ノ主張スル「マルクス」主義ハ全ク「マルクス」ノ主張スル「マルクス」主義ト一致スルコト又何人モ我等ヲ以テ「マルクス」主義ノ生嚙リ丸呑ナリト云ヒ得ル者ナカルヘシ

力子ヨ、我ハ君ガ李達等ト共ニ討論ニ加入シ機ニ乘シテ主義ヲ宣傳センコトヲ希望ス、我ハ今身體弱ク眼病又發シ實ニ煩悶ス我ハ支那ノ改造ニ對シ甚タ悲觀ス

二、周白棟〔周白棟〕ニ宛テタル通信

(原漢文)

光亮 五、二六

我ハ數年居住シテ學問スル豫定ナリシガ現在國內ガ此ノ如ク沈寂ニテ何等ノ

刺戟ガ無い我思フニ事ヲナス第一ハ學問ニシテ第二ハ一種ノ感情ノ革命ナリ、實際小膽ノ學者ニ比シテ甚タ好シ晉青(中國青年會館内居住謝晉青)ハ我ガ親友ニシテ彼ハ江蘇省徐州ノ人ナリ彼ハ當ニ一個ノ革命家ナルノミナラス社會事情ニモ甚タ熱心ナリ但シ思想ハ甚タ個人主義ニ偏セリ十中九ハ彼ハ既ニ熱心ニ社會改造ニ盡セルモ何故ニ更ニ有效事ヲナササルヤ我ハ只君ガ文字上ニ事務上ニ社會革命ニ盡力セラルルヲ望ム君ハ治世ノ良民ニシテ亂世ノ英雄ニ非サルナリ

以上

〔注1〕太朴はアナキスト鄭賢宗の別名、「邵仲輝」すなわち邵力子とは別人である。

〔注2〕邵力子宛におくり、『民國日報』への掲載を前提としたこの手紙は、どうやら警察側に差し押さえられたようで、『民國日報』へは掲載されなかった。施存統は一九二一年七月一五日の『民國日報』「覺悟」に「一封答覆「中國式的無政府主義」者的信」を發表し、この手紙が上海に届いていないと述べ、再度太朴宛の手紙を寄せた。

〔注3〕「太朴答存統的信」(『民國日報』「覺悟」一九二一年五月一八日)のこと。

〔注4〕某雜誌にのせた一文とは『共產黨』五號(一九二一年六月七日)に掲載された施存統(署名:CT)「我們要怎樣幹社會革命?」を指すと思われる。

B

「過激派其他危險主義者取締關係雜件 社會運動狀況 支那 第一卷」(分類項目 四—三一—四—一五)

【B—1】

大正拾年六月卅日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛

外秘乙第九五號 大正十年六月二十九日

在上海支那共產黨ノ行動

在上海支那共產黨ハ明三十日上海佛租界貝勒路原名「適廬」ニ於テ全黨大會ヲ開催スル趣ナルカ該大會ニ參會スル各地代表者ハ北京、上海、廣州、蘇州、南京、蕪湖、安慶、鎮江、蚌埠、濟南、徐州、鄭州、太原、漢口、長沙等ノ各學生團體其ノ他諸聯合會員ニシテ日本人モ亦參會スルモノ、如ク目下其氏名内債中ナリ、

以上

C

「外國人退去處分關係雜件 支那國人」(分類項目 四—二—六—二—八)

【C-1】

外秘甲第一二六一號 大正十年十二月二十二日 警視總監岡喜七郎

内務大臣床次竹二郎殿

鹿兒島縣知事橋本正治殿

要視察支那人「施存統」ニ關スル件

東京府下北豐島郡高田村字高田千五百五十六番地下宿業三崎館止宿

施存統

當二十三年

右者屢報ノ如ク共產主義者ニシテ在上海秘密結社「共產黨」「社會主義青年團」及「社會主義大學校」等ニ加入シ居ル要視察支那人ナルカ大正九年七月十日日本邦ニ渡來以來我カ國社會主義者ト連絡ヲ執リ同主義ヲ宣傳シ居ルヤノ疑ヒアリ搜索ノ結果本人ハ本邦社會主義者堺利彦、高津正道、近藤榮藏、高瀬清、宮崎龍介等ト交通シ殊ニ本年十月五日在上海露國過激派代表者Sナル

モノ【注1】ヨリ本邦社會主義者ニ對シ赤化宣傳運動資金ヲ交付スヘキ使命ヲ帶ヒ來レル支那人「張復」事「張太雷」ヲ右近藤榮藏ニ紹介シ且ツ該金授受ノ仲介盡力ヲ爲シタルノミナラス本人モ亦同人ヨリ金百圓ヲ受領セン事實アリ右「張太雷」ハ目下鹿兒島(貴)縣下在住支那人社會共產主義者親友周佛海ノ紹介狀ヲ持參シ「施存統」ヲ訪問シタルモノナリ(周佛海ハ當時上海ニ滞在シタルモノナリ)

尙本人ノ聽取書並ニ關係書類ヲ添付ス【注2】
右及申(通)報候也

【注1】「上海露國過激派代表者S」とは、Sneevliet すなわちマールンである。

【注2】外交史料館所藏の文書綴にはそれに該當する聽取書は含まれていない。

【C-2】

内務省祕第二二六一號 大正十年十二月二十七日

支那人追放處分ニ關スル件

東京府北豐島郡高田村字高田千五百五十六番地 三崎館止宿

支那人 施光亮事

元東京同文書院生

施存統

當二十三年

右者在上海秘密結社「共產黨」「社會主義青年團」「社會主義大學校」及露國過激派宣傳支部「デモクラチック俱樂部」等ニ關係ヲ有スルモノナルカ大正九年七月十日留學ノ目的ヲ以テ本邦ニ渡來東京同文書院ニ通學ノ傍本國共產主義者「李達」「王仲甫」「陳獨秀」「戴天仇」等ト相提携シ無政府共產主義宣傳ニ努力スヘク本邦社會主義者「堺利彦」「高津正道」「近藤榮藏」「高瀬清」「宮崎龍介」等ト交通シ居リシカ本年十月五日在上海露國過激派代表者「S」

ナルモノヨリ本邦社會主義者ニ對シ赤化宣傳運動資金千圓ヲ交付スヘキ使命ヲ帶ヒ來邦セル支那人「張復」事「張太雷」ヲ前記近藤榮藏ニ紹介シ且ツ該金授受ノ仲介盡力ヲ爲シタルノミナラス本人モ亦同人ヨリ金百圓ヲ受領セルノ事實アリ右ハ警視廳ニ於ケル調査並本人ノ任意自供セル聽取書ニ徴スルモ頗ル明瞭ナリ

以上ノ如ク本人ノ行動ハ我治安ヲ紊ルコト甚大ニシテ此儘本邦ニ滞在セシムル時ハ益々我社會主義者トノ連結ヲ鞏固ニシ現代社會組織ヲ變壞スルノ虞アルヲ以テ速ニ之ヲ國外ニ追放シテ再ヒ渡來スルコトヲ阻止スルハ帝國ノ安寧保持上緊要ノ措置ト認メラレ且ツ此種不逞外國人ニ對スル一般ノ豫防取締上ニモ效果尠カラサルモノト思料セラレ候條左案ノ通り訓令相成可然哉

【C-3】

内務省訓令第九九八號

警視總監

支那人「施存統」ノ行動ハ帝國ノ安寧秩序ヲ紊ルモノト認メラルルヲ以テ本大臣ハ右「施存統」ニ對シ命令傳達ノ日ヨリ十日以内ニ於テ貴官ノ發給スル通行券規定ノ經路ニ從ヒ帝國領土ヲ退去シ且命令ノ取消サル迄再ヒ帝國領土ニ立入ラサルコトヲ命ス依テ貴官ハ此旨相達シ通行券ヲ交付スヘシ若シ十日以内ニ於テ帝國領土ヲ退去セス又ハ通行券ノ規定スル所ニ違反シタルトキハ必要ナル強力ヲ用ヒ速ニ之ヲ國外ニ追放スヘシ

右訓令ス

大正十年十二月二十七日

内務大臣

【C-4】

大正拾年十二月廿九日接受 亞細亞局 第一課 警視總監ヨリ局長宛
外祕乙第一六一九號 大正十年十二月二十八日

支那人施存統追放處分ニ對スル在留支那人ノ感想

「施存統」ガ本邦渡來後比較的親交有リシ「謝晉青」(要觀察支那人)「朱鳴田」(靳文炳)「馬伯援」(以上要注意支那人)等目下何レモ飯國中ニシテ現在、在留セル者ノ内ニハ彼ニ對シテ深厚ナル同情ヲ有スル者ナキ干係モアリ同人ノ追放ハ目下ノ處大ナル反響ヲ與ヘタル模様ナク彼ト相交通セル「田漢」「林朝章」(何レモ要注意支那人)等ニ就キ其感想ヲ聞クニ彼等モ亦新聞紙上ニ掲載セラレタル如ク社會主義ヲ宣傳シ本邦社會主義者ト交通シテ日本ノ治安ヲ害スルガ如クンバ追放處分ニ附セラル、モ止ムヲ得ザルヘシト考ヘツ、アル狀況ナリ

尙本人ガ居住シ居タル三崎館止宿支那人等二十餘名ハ同所ニ於テ約十分間茶菓ヲ共ニシ送別ノ意ヲ表シタルモ深刻ナル同情ヲ表シ居ル模様無ク見送りヲ爲ス等ノ企ヲ爲シタルモノナシ

以上

【C-5】

外祕乙第一六一二號 大正十年十二月二十九日

支那人施存統追放處分ニ關スル本邦人ノ感想

支那人施存統退去處分ニ關シ本人ノ渡來以來東京同文書院入學其他種々斡旋セル支那浪人宮崎滔天ハ左ノ感想ヲ漏セリ

一、施存統ハ友人戴天仇ヨリ斡旋方ヲ依頼サレタル爲種々便宜ヲ與ヘ居タリ全人ハ施存統ノ頭腦明晰ナルヨリ將來ニ望ヲ屬シ本邦ニ留學セシメ毎月五十圓内外ノ學費ヲ給シツツアリシナリ彼渡來ノ後本邦ノ社會主義者俾利彦、大杉榮等ヲ訪問シタル旨聞知セルヨリ前後三回迄本邦ノ社會主義者ハ實文賣名ノ徒ニシテ眞ノ社會主義者ニ非ズ彼ト交際ヲ續クルハ將來ノ爲メニアラズトテ懇々訓戒シタルニ當時本人ハ今後ハ絕對ニ堺等ト交際ヲ絶ツ旨言明セルニ因リ自分モ之ヲ信シ居リタリ兎ニ角官憲ニ在リテハ相當實證ヲ舉ゲ追放處分ニ附セラレシ事ナランモ隣國支那ノ一青年ヲ再ビ入國セシメザ

ルガ如キハ餘リニ偏狹ノ處分ナラズヤ余ガ爲政者ナランニハ決シテ斯ク處置セザルベシ支那人モ亦全様批難スベキハ當然ナリ、本人ハ本邦ノ書籍ヲ讀ミ得ルモ會話ハ相當修學ノ餘地アリ他ノ外國語ハ絕對不便ナルヨリ露國共產黨ト連絡ヲ執リ其主義宣傳ヲ爲スガ如キハ絕對無シト信ズ兎ニ角本件ハ一應「戴」ニ通信ヲ爲シ置ク積ナリ

云々

【C-6】

外祕收第四七九二號 大正十年十二月二十九日 神奈川縣知事井上孝哉

内務大臣床次竹二郎殿

外務大臣伯爵内田康哉殿

警視總監、兵庫、福岡、山口縣知事殿

退去受命者支那人施存統出發ノ件

東京府下高田村高田三崎館止宿

退去受命者支那人 施存統 當二十三年

右者本月二十七日内務大臣（貴官）ヨリ退去命令ヲ發セラレタル旨同日警視（貴）廳ヨリ電話通知アリタルモノ、處本日午前八時三十分汽船ありそな丸ニテ警視廳ノ警官二名附添ヒ上海ニ向ケ横濱ヲ出發セリ全船ハ途中神戸、門司ニ寄港スル筈ニ付關係各縣ニテハ相當御警戒相成タシ

追テ内務大臣（貴官）兵庫（貴）縣ニハ電報警視（貴）廳ニハ電話ニテ既報ス

右及申（通）報候也

【C-7】

高祕第九三七號 大正十一年一月六日 福岡縣知事安河内麻吉

内務大臣床次竹二郎殿

外務大臣伯爵内田康哉殿

警視總監神奈川兵庫縣知事殿
上海總領事館木下事務官殿

退去受命者支那人施存統ニ關スル件

支那浙江省金華縣葉村

東京府下北豐島郡高田村字高田一五五六番地 三崎館止宿

支那人 施存統 當二十三年

右ノ者渡來ニ關シテハ内務省警保局長及兵庫縣知事ヨリノ通報ニ依注意中ノ處本人ハ本月五日午後二時五十分ありそな丸ニテ管下門司ニ來着シタルヲ以テ觀察スルニ本人ハ船室ニアリテハ（労働ノ未來ト現在）ト題スル書籍ヲ繙讀シ時ニ甲板ヲ逍遙スル事アルモ何等異狀ノ言動ナク翌六日正午同船ニテ上海ニ向ケ（當時關係方面ニハ電報通報神奈川兵庫各縣ニハ通報ナシ）無事出發セリ

右及申通報候也

附錄 二 施存統證言

本附録では、いわゆる「曉民共產黨事件」の東京地方裁判所における豫審記録より、施存統の行った證言（一九二二年一月二三日）を掲げる。採録にあたって依據した文書は、松尾尊允氏所藏の寫眞版で、裁判所側が作成した證言記録を被告辯護人側が筆寫したものと考えられる。これまで、この施存統證言は、片山政治編『日本共產黨史（戦前）』（公安調査廳、一九六二年五月、現代史研究會復刻版、一九六二年一月）にその一部が收録されたことがあったが、同書が主に日本の共產主義運動を論じたものだったため、中國の共產主義運動に關する部分は割愛されていた。結成當初の中國共產黨の狀況を物語る貴重な證言であることに鑑み、採録にあたっては行がえ等の技術

的加工のみを施し、誤字、脱字にはいっさい手を加えていない。ただ、原文書が筆寫の便のために、故意に漢字を假名で代替した部分（例えば「社會主義」を「社會主ギ」と表記したり、各發言の冒頭に附してある「問」「答」が、後半よりそれぞれ「と」「こ」で代替してある部分）は、漢字に復元した。また、中國人の人名のみは、推定しうる人名を（「」内に補った。この證言記録を提供し、公表を許してくださいと松尾尊允氏に感謝する。

調書

證人 施存統

十二月廿三日 於東京地方裁判所

問 留學生か

答 左様であります

問 何學校に在學して居るか

答 私は大正九年七月十四日日本に渡來し東京同文書院に通學して居りました。が本年初め同校を退學して居ります

問 現在は何をして居るか

答 専ら社會主義の研究をして居ります

問 日本に渡來前は何かをして居たか

答 初めの程は支那浙江省杭州第一師範學校に入學し三學年にて中途退學し直ちに北京騎河樓獨逸抗七號にある、一方に於て働きながら一方に於て學問の出來る北京工讀互助團と云ふ處に這入り三ヶ月許り勉強し上海自「一字空白」路三益里十七號にある週刊新聞を發行する星期評論社に這入り日本に渡來する迄當社の事務補助員として働いて居りました

問 原籍は何處か

答 支那浙江省金華縣葉村であります

問 父は

答 施長春と云ひます

問 張太雷を知つてゐるか

答 知つて居ります

問 支那に居る時からの知合ひか

答 ではありませぬ支那に居る時分は知らなかつた人であります

問 何時知つた

答 張太雷が私の居る高田村字高田の下宿三崎館に來た時初めて知つたのであります

問 張太雷が來たのは何日か

答 本年十月五日であります

問 何日間滞在して居つたか

答 一週間ばかり滞在して居りました

問 張太雷は何の用事で渡來したのか

答 露國過激派S君の使命を帯びて渡來したのであります

問 S君は何をして居る人か

答 露國過激派の代表者でよくは存じませぬが私の思ふ所では多分露國勞農政府の代表者だと思ひます

問 張太雷はS君より如何なる使命を帯びて來たのか

答 ワシントン會議開催の日を期して露國モスコの第三インタナショナルがイルクツクでワシントン會議に對抗する會議を開きたい就いては日本からも十名許りの派遣員を送つて參列して貰ひたいとの其使命を帯びて來たのであります

問 張太雷は日本に來て如何なる人に其の事を申したいと言つてゐたのか

答 張太雷は其使命を帯びて日本に來たものの日本に知人がないので私の友人で鹿兒島第七高等學校在學中の周佛海の紹介狀を持つて私を訪ね來り私に申込んだのであつて其時張太雷の話には日本から派遣して貰ふ代表者は社會主義者に限つた譯ではない然し一般の日本人は散漫にして團體がないから秘密が洩れるかもしれない洩れては困る夫れを心配するから先づ社會主義者に會つて何ういふ人を派遣したらよいかと云ふことを諮つて夫れによつて派遣員を決する様にして貰ひたいと云ふ事でありました

問 證人は張太雷の申込を先づ誰に話したか

答 私には日本の社會主義者中大杉榮山川均堺利彦等を知つてゐますが大杉山川には未だ面會したことがないので面會して知つて居る堺利彦に先づ話したらよからうと考へ張太雷が私方に來た翌日と思ひますが同人を連れて先づ堺利彦を訪問したのであります

問 堺に面會したのか

答 致しました

問 張太雷は堺に使命の趣旨を告げたのか

答 告げました間もなく堺は近藤榮藏を呼び張太雷は堺及近藤に對して使命の趣旨を話しました其の趣旨は雙方共英語で致しました

問 其時張太雷は金を渡しはしなかつたか

答 張太雷は堺及近藤と堺方に於て其の時と其後一度都合二度會ひました其時でしたか其の次の時であつたかそれは覺えませんが兎に角張太雷が金を渡した事は事實であります

問 何程の金を渡したか

答 朝鮮の百圓札十枚にて千圓渡しました内五百圓は私が朝鮮銀行に行つて日本紙幣と兩替して來ました

問 其千圓を張太雷より受取つたものは誰か

答 判然と覺えては居ませぬが受取つたものはたしか近藤であつたと思ひます

問 其千圓は何にする金か

答 派遣員の旅費であります

問 張太雷が二回目にも面會した理由は

答 何名派遣することにしたかそれをたゞす爲に行つたのであります然し私は其の結果については詳細に知りませぬ

問 張太雷は右使命の外に尙何か用事があつたのではないか

答 そんなことはありません

問 露國支那及日本の各社會主義者連絡して大いに新社會主義運動を□□

「字空白」らふと云ふ様な事も相談したではないか

答 そんなことは有りませぬ

問 張太雷は支那に於ける如何なる地位の人か

答 此際初めて會つたのでありまして一名張復と云ひ江蘇省の人で元天津の北洋大學に學んでゐた人物でありますが今日では上海社會主義青年團の團員となつて居るのであります

問 張太雷が歸國したのは何日か

答 十月十三日頃であつたと思ひます上海に向つて歸りました

問 證人は張太雷より金を貰つたか

答 日本の社會主義に關するもの（出物）四五冊を翻譯したものを渡し百圓受取りました只貰つた譯ではありませぬ

問 上海のライフ□□「一字空白」ゴーマンを知つてゐるか

答 知りませぬ

問 實際か

答 本當に知りませぬ

問 證人はいつ頃から社會主義を研究してゐるのか

答 十九才頃から研究してゐます

問 アナーキストか

答 元はアナーキストであつたが今はコミュニニストであります即ちマルクス派に屬してゐます

問 支那に於ては如何なる社會主義者と親友なるか

答 かなり多くの社會主義者を知つてゐます其の主なるものは陳犯秀（陳獨秀）、戴天仇、李達、張國燾、秀松（俞秀松）、邵中子（邵力子）、陳望道、王仲甫、吳明（陳公培）、沈玄盧（沈玄盧）、黃璧魂、李際、周佛海、謝晉青、李漢俊、楊明富（楊明齋）、李□明（「一字不明」）、哲民（費哲民）、李虛丹等であります

問 日本に於ては如何なる社會主義者と親交あるか

答 日本に於ては堺利彦、高津正道、伊井敬、高瀬清、宮崎竜介等の社會主

義者と交渉して居ます

問 吉良といふ人を知つてゐないか

答 知りませぬ

問 黄界民「黄介民」を知つてゐるか

答 知りませぬ

問 上海に於ける社會主義者團體状態は如何

答 私の知つてゐる上海の團體は共產黨社會主義青年黨及社會主義大學校の三團體であります

共產黨は陳犯秀「陳獨秀」が牛耳を執り社會主義青年團は李達が主として

其の事務を執つて居る

社會主義大學校は委員制度でありまして李達、王仲甫等が委員であります

此の大學校は昨年中ではロシアの過激派代表者との關係があつて幾分かの

宣傳費を貰つてゐました

多分月千圓位貰ひ受けてゐたと思ひます

通事 中島 由雄

證人 施存統

右通事讀きかせたる處通事は之れを證人に通じ相違なき旨申立通事證人共に

署名せり

同日於同所作立

裁判所書記 稻垣 正二

豫審判事 角南 美貴

豫審判事 角南 美貴

豫審判事 角南 美貴

施存統著作繫年目錄初稿（一九一九—一九三三年）

各掲載新聞雜誌、『五四時期期刊介紹』一—三集、『民國時期總書目』、各種雜誌の出版廣告文などによつて作成。中共を離黨した一九二七年八月以降に關しては、單行本のみに限定した。*印を附したものは未見である。※印を附したものは、執筆が推定されるものである。雜誌・新聞名に關しては以下の略稱を用いる。

浙江省立第一師範學校校友會十日刊

時事新報副刊 學燈

民國日報副刊 覺悟

民國日報副刊 婦女評論

民國日報 上海追悼列寧大會特刊

民國日報 五一勞動紀念特刊

總理週年紀念特刊

↓十日刊

↓學燈

↓覺悟

↓婦女評論

↓列寧特刊

↓五一特刊

↓總理特刊

なお、本目錄作成にあたっては、森時彦氏が初步的に作成された「施存統著作目錄」（未刊稿）を参照させていただいた。

一九一九年	雜誌・新聞名	卷號・年月日
*「這倒是貧家的人好！」	十日刊	一號 一〇月一〇日
*「偶象」	十日刊	二號 一〇月二〇日
*「文字爲什麼要橫行？」	十日刊	三號 一〇月三〇日
*「非孝」	浙江新潮	二號 一一月八日
「施存統致東蓀先生的信」	學燈	一一月一四日
「施存統致東蓀先生的信」	學燈	一一月一七日
「施存統來信羅家倫答」	新潮	二卷二號 一二月

「施存統致宋介的信」		曙光
一九二〇年		
「只管衝進去罷！」	覺悟	四月四日
「看不慣「女士」二字」	覺悟	四月五日
「好一個頭銜！」	覺悟	四月六日
「投向資本家底下的生產機關去」	覺悟	四月一日
「鑽進工場裏去」的解釋	覺悟	四月一六日
「把「愛國運動」變做「社會運動」	覺悟	四月一八日
「越攻擊越奮鬥」	覺悟	四月二八日
「『工讀互助團』底實驗和教訓」	星期評論	四八號 五月
「廢除婚制」討論中的憤語	覺悟	五月一二日
「侮辱女子人格」底解釋	覺悟	五月一五日
「打破婚制的同調」	覺悟	五月一七日
「解決婚姻問題底意見」	覺悟	五月二〇日
「廢除婚制問題底討論」	覺悟	五月二一日
「辨論的態度和廢除婚制」	覺悟	五月二二日
「青年所應受的兩重苦痛」	覺悟	五月二三日
「廢除婚制問題的討論」	覺悟	五月二四日
「紀夢」(詩)	覺悟	五月二五日
「廢除婚制問題」	覺悟	五月二五日
「廢除婚制問題底辯論」(三篇)	覺悟	五月二七日
「爲什麼要從事根本改造？」	覺悟	五月二七日
「改造家和愛情」	覺悟	五月二九日
「廢除婚制問題的討論」	覺悟	六月二日
「怎樣報答這個「罔極之恩」？」	覺悟	六月四日
「頭銜嚇人」	覺悟	六月四日
「不敢擅自立異！」	覺悟	六月四日
一卷二號 一二月		
「貴族的文化運動和貴族的著作」		覺悟
「對於文化運動底感想」		覺悟
「旁聽生和學生」		覺悟
「致諸位朋友信」		覺悟
「存統信中的趣語」		覺悟
「青年應自己增加工作」		覺悟
「鐘」(詩)		覺悟
「追哭「先母」」(詩)		覺悟
「對「白樺底照片」有感」(詩)		覺悟
「奮鬥」(詩)		覺悟
「回頭看二十二年來的我」		覺悟
「我們底大敵，究竟是誰呢？」		覺悟
「我底最近覺悟」		覺悟
「智識階級聽者！」		覺悟
「奮鬥與互助」		覺悟
一九二一年		
「譯書要有目的」		覺悟
「勞動問題」(翻譯：北澤新次郎)		覺悟
「改革底要件」		覺悟
「對於抄近路求學的朋友底忠告」		覺悟
「現代文明底經濟的基礎」(翻譯：山川均)		覺悟
「社會主義底進化」(翻譯：河上肇)		覺悟
「勞動問題底發生和組合運動底進化」(翻譯：植田好太郎)		覺悟
「團體和分子」		覺悟
「理智和感情底矛盾」		覺悟
六月五日		覺悟
六月六日		覺悟
六月二〇日		覺悟
七月一三日		覺悟
八月二六日		覺悟
八月二七日		覺悟
九月三日		覺悟
九月一〇日		覺悟
九月一七日		覺悟
九月二〇、二四日		覺悟
九月二八日		覺悟
九月二九日		覺悟
一〇月三日		覺悟
一〇月一四日		覺悟
一月四日		覺悟
一月六、一八日		覺悟
一月一〇日		覺悟
一月二七日		覺悟
二月二、三、二四日		覺悟
二月二七、二八日		覺悟
三月三、四日		覺悟
三月一六日		覺悟
三月二三日		覺悟

「勞動經濟論」(翻譯：賣文社)	覺悟	三月二七日 四月四日
「賣文者與社會組織」	覺悟	四月五日
「考茨基底勞農政治反對論」 (翻譯：山川均)	覺悟	四月二二、二九日
「發展實業和失業軍」	覺悟	五月八日
「請看反對獨秀的理由」	覺悟	五月八日
「盲目地瞎鼓吹」	覺悟	五月八日
「爲主義信主義」	覺悟	五月八日
「唯物史觀和空想」	覺悟	五月九日
「一個好消息！」	覺悟	五月一〇日
「經濟組織與自由平等」	覺悟	五月一〇日
「但一定比你想得還要好」	覺悟	五月一日
「主義和遺產」	覺悟	五月一日
「討論」沒有辨駁的價值」的信」	覺悟	五月三日
「社會主義與勞動者人數」	覺悟	五月三日
「什麼最可惡？」	覺悟	五月三日
「注意灰色主義」	覺悟	五月三日
「請看高論」	覺悟	五月五日
「你哪里知道？」	覺悟	五月五日
「非人的生活」	覺悟	五月五日
「見於『共產黨宣言』中底唯物史觀」(翻譯：河上肇)	覺悟	五月一五、一九日
「越出越奇的辨論」	覺悟	五月一六日
「勸你遵守這幾句話」	覺悟	五月一六日
「這話你從哪里得來？」	覺悟	五月一六日
「沒有第二種好處」	覺悟	五月一七日
「攻擊個人」	覺悟	五月一八日
「勞農俄國底安那其主義者」 (翻譯：山川均)	覺悟	六月一日
「我們要怎麼樣幹社會革命？」	共產黨	五號 六月

「無產階級專政和首領變節」	覺悟	六月九日
「對於留學日本諸君的一個提議」	覺悟	六月一九日
「施存統致宋介的信」	曙光	二卷三號 六月
「對於文章署名的一點小意見」	覺悟	七月一日
「一封答覆『中國式的無政府主義』者的信」	覺悟	七月一日
「馬克斯主義和勞動全收權」 (翻譯：河上肇)	覺悟	七月一五、一九日
「第四階級獨裁政治底研究」	覺悟	七月二一日
「再與太朴論主義底選擇」	覺悟	七月三一日
「馬克思底共產主義」	覺悟	七月三一日
「究竟『一百幾十年』？」	覺悟	九卷四號 八月
「勞動組合運動和階級鬥爭」 (翻譯：山川均)	覺悟	八月一日
「階級鬥爭和促社會死亡」	覺悟	八月一九日
「希望大家多做一點研究」	覺悟	八月二九日
「主義本身是不負責任的」	覺悟	八月二六日
「革命的事實」和「革命的文句」	覺悟	八月二六日
「第四階級解放呢？全人類解放呢？」	新青年	九卷五號 九月
「什麼叫做『英國式』的工業？」	覺悟	九月二日
「唯物史觀在中國底應用」	覺悟	九月八日
「馬克斯主義底特色」	覺悟	九月二三日
「唯物史觀」與「和現勢力妥協」	覺悟	九月二三日
「讀費覺天君底『從羅素先生底臨別贈言中所見的『政治支配經濟策』』」	覺悟	九月二五日
「河上底左傾」	覺悟	九月二五日
「自便的主張」	覺悟	九月二五日
「關於馬克斯主義的一個誤解」	覺悟	九月二六日

「介紹「社會主義研究」	覺悟	九月二七日
「責備主義者底標準」	覺悟	九月二七日
* 「對於高一涵先生「共產主義歷史的變遷」的懷疑」	覺悟	二月五日
「馬克思主義上所謂「過渡期」」 (翻譯：河上肇)	覺悟	二月一八、一九日
一九二二年		
「社會經濟叢刊」 (翻譯：河上肇等)	泰東圖書局	一月
「馬克思主義和達爾文主義」 (翻譯：堺利彥)	商務印書館	一月
「俄羅斯革命和唯物史觀」 (翻譯：河上肇)	覺悟	一月一九日
* 「我對於平民女學之希望」	婦女聲	六期 三月五日
「馬克思底理想及其實現底過程」 (翻譯：河上肇)	東方雜誌	一九卷六號 三月
「馬克斯學說概要」 (翻譯：高島素之)	商務印書館	四月
* 「勞動運動史」	人民出版社	四月
「對於青年團的意見附記」	先驅	六號 四月
「學校離得離不得呢？」	覺悟	四月二一日
「中國社會主義青年團第一次全國大會」	先驅	八號 五月
「唯物史觀在馬克思學上底位置」 (翻譯：櫛田民藏)	東方雜誌	一九卷二一號 六月
「讀新凱先生底「共產主義與基爾特社會主義」	新青年	九卷六號 七月
「快快參加民權運動啊！」	先驅	一二號 一〇月
* 「新俄羅斯底建設和婦女」	婦女評論	六七、八期 一一月
「一九一七年十一月七日」	先驅	一三號 一一月
「勞農俄國問答」 (翻譯：橫田千元)	先驅	一三號 一一月
一九二三年		
「湖南學生的大覺悟」	先驅	一四號 一月
「日本青年運動之曉鐘」	先驅	一四號 一月
「討論與國民黨聯絡及社會主義者的生活問題」	先驅	一四號 一月
「四個死者、一個精神！」	先驅	一五號 一月
* 「李卜克內西和盧森堡」 (翻譯：山川菊榮)	先驅	一五號 一月
「去年的今日和今年的今日」	先驅	一五號 一月
「去年的特刊和今年的特刊」	先驅	一五號 一月
「從單純的學生運動到普遍的群眾運動！」	先驅	一六號 二月
「所謂「不合作主義」	先驅	一六號 二月
「保持人格」！	先驅	一六號 二月
「本團的問題」	先驅	一六、一七、一九、二一號 二、三月
「資本制度解說」 (翻譯：山川均)	覺悟	三月一、二〇日
「中間階級的社會主義論」 (翻譯：佐野學)	覺悟	五月三、一〇日
「甚麼是青年運動？附記」	先驅	一七號 五月
「勞農俄國底農業」 (翻譯：河田嗣郎)	覺悟	五月一三、一八日
* 「一九二二底國際婦女日」 (翻譯：山川菊榮)	婦女評論	九一期 五月
「新經濟政策」與俄國之將來 (翻譯：山川均)	覺悟	五月二〇日
「無政府主義和科學的共產主義」 (翻譯：フーバーリン)	覺悟	五月二四、二七日
「對於本屆全國大會的感想」	先驅	一九號 六月
「青年共產主義運動在中國的意義附記」	先驅	一九號 六月
「我們與學生運動附記」	先驅	二〇號 六月

355

* 「何謂「政治經濟」？」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「修談分工」！	評論之評論	二期	八月一七日
* 「如此分工」！	評論之評論	二期	八月一七日
* 「野心家」！	評論之評論	二期	八月一七日
* 「誰說不要「專門人才」！」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「正中下懷」！	評論之評論	二期	八月一七日
* 「那時用不着政黨了」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「其心可誅」！	評論之評論	二期	八月一七日
* 「讀了「孫總理對農民演說」以後」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「直系將蹂躪江浙」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「林鈞被打之報告」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「歡迎孫中山先生」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「國際信義」與「賣身契約」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「誰選柯立芝為美國大總統」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「世界殖民地現勢一覽表」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「不反對任何主義的「中國社會黨」！」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「中國社會黨來信」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「只要我是一個工人」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「南通覺悟學生與蠻橫當局的奮鬥」	評論之評論	二期	八月一七日
* 「無常識的造謠！」	評論之評論	二期	八月一七日
一九二五年			
「新年的第一件工作」	覺悟	一月一日	
「社會科學概論」	覺悟	一月一日	
「國民會議與國民革命」	評論之評論	四一期	一月五日
「誰的國民會議？」	評論之評論	四一期	一月五日
「清室之保護者！」	覺悟	一月六日	
「保全將才」！	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「洪憲皇帝」在天之靈！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「罰洋五百元」！	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「直豫士紳「覓一死所」！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「實力派」！	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「黃龍三週紀念」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「中日經濟提携之「意義」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「資本制度淺說」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「段執政的「仁政」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「好一個「清高」的學府！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「教育與政治（一）」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「二七」流血二週紀念」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「東南戰爭損失在「二十億以上」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「列寧週年紀念與中國民衆」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「何謂「擅行藉端罷工」？」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「反對東洋人打人」！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「兩重意義的大罷工」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「一方面保護，一方面壓迫！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「致祝修德先生短信」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「國民的資格」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「國民的權利」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「慈善家呵！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「廢物利用」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「重新「廢督」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「悼孫中山先生」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「嗚呼，是何心肝？」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「公道自在人心」！」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「孫先生，國民黨・與民衆」	評論之評論	四二期	一月一二日
* 「偉大的追悼會」	評論之評論	四二期	一月一二日

「組織工會及罷工的自由」	上大五卅特刊	二期	六月二三日	漢口民國日報	五月二三日
「只有前進、不能後退！ 我們的生死關頭」	上大五卅特刊	三期	六月三〇日	中央副刊	八月三〇日
「中國學生在民族革命中的地位 與任務」	上大五卅特刊	四期	七月七日		
「我們底戰鬪方略」	上大五卅特刊	五期	七月一四日	復旦書店	九月
*「勞動問題講演大綱」	上大五卅特刊	五期	七月一四日	復旦書店	一〇月
「醒獅派底「排外主義」	上大五卅特刊	六期	七月二四日	新東方書店	一〇月
「國家主義」底反動性」	上大五卅特刊	八期	八月二六日	現代中國社	一一月
*「醒獅派的「革命」假面具揭穿 了！」	上大五卅特刊	八期	八月二六日	現代中國社	一一月
*「排外與帝國主義走狗」	上大五卅特刊	八期	八月二六日		
「內外交殺中的民衆」	上大五卅特刊	八期	八月二六日		
「評戴季陶先生的中國革命觀」	中國青年	九一・九二期	九月		
「研究中山主義應取的方法」	中山主義週刊	一期	一二月二〇日		
一九二六年					
「施存統同志在寧波市黨員大會 之演講詞」	中國國民	二四期	一月二五日	新生命書局	一月
「聯俄與階級鬭爭的討論 寧波市黨員大會中施存 統同志的意見」	中國國民	二五期	一月二八日	新生命書局	三月
※「未必會至於此極吧」	中國國民	二六期	一月三一日	新生命書局	五月
※「反革派命和中國國民」	中國國民	二六期	一月三一日	新生命書局	六月
*「中山先生的三大革命政策」	總理特刊	一期	三月一二日	昆崙書店	八月
「中國國民黨的組織和訓練」	眞美書社	一二月（？）		昆崙書店	九月
一九二七年					
*「經濟科學大綱」 （翻譯：赤松克鷹）	新青年社	一月		新生命書局	刊行月不明
*「馬克司主義孫中山主義及國民 黨與共產黨之關係」	前敵	一二期	三月	出版社不明	刊行月不明
「反蔣運動」	革命生活	四月二一日		大江書舖	四月
「中央獨立師政治部報告夏逆潰 敗情形」					
「悲痛中的自白」					
一九二八年					
「目前中國革命問題」					
「中國革命與三民主義」					
*「增訂資本制度解說」 （翻譯：山川均）					
*「中國革命底理論問題」 （翻譯：山川均）					
*「辯證法淺說」（翻譯：山川均）					
一九二九年					
「日本無產政黨研究」					
*「蘇俄政治制度」（翻譯： （翻譯：ボグダノフ）					
*「社會意識學大綱」					
*「歐美無產政黨研究」 （翻譯：藤井悌）					
*「世界社會史」 （翻譯：上田茂樹）					
*「唯物史觀經濟史」 （翻譯：山川均） 石濱知行 河野密）					
*「辨證法與資本制度」 （翻譯：山川均）					
*「社會問題大要」					
一九三〇年					
*「社會問題之基礎知識」					
*「工會運動底理論與實際」 （翻譯：山川均）					

*『實用經濟學』 (翻譯：高橋龜吉)	春秋書店	八月
*『美國資本主義發達史』 (翻譯：石濱知行)	春秋書店	九月
*『蘇聯經濟政策及社會政策』 (翻譯：)	新生命書局	九月
*『資本論大綱』 (翻譯：高島素之)	大江書舖	一二月
*『近代社會思想史要』 (翻譯：平林初之輔)	大江書舖	刊行月不明
*『新經濟學講話』(翻譯)	大江書舖	刊行月不明
*『社會進化論』 (翻譯：福本和夫)	大江書舖	刊行月不明
一九三一年		
*『經濟史綱』(翻譯：石濱知行)	大江書舖	五月
*『新財政學』(翻譯：阿部賢一)	大江書舖	八月
一九三二年		
*『中國現代經濟史』	上海良友圖書	三月
*『世界史綱』(翻譯：上田茂樹)	大江書舖	刊行月不明
一九三三年		
*『轉形期底經濟理論』 (翻譯：山川均)	新生命書局	二月訂正初版
*『財政學大綱』 (翻譯：大内兵衛)	大江書舖	一二月

十↓中央檔案館・湖北省檔案館編『湖北革命歷史文件彙集』甲1(湖北人民出版社、一九八七年)所收、一三一～一三二頁。